





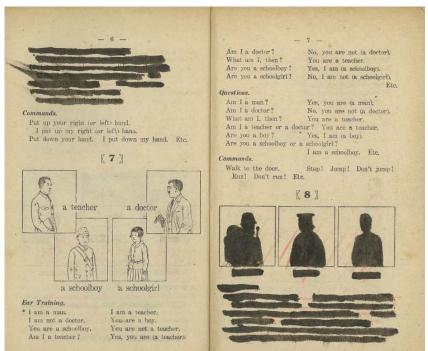
#### 武蔵野から伝える 戦争体験記録集 第『集



Ear Training.

I am a mam.
I am a teacher.
You are a schoelboy.
You are not a teacher.
You are (a teacher).

Yes, you are (a teacher).





## 武蔵野から伝える

# 戦争体験記録集(第Ⅱ集)

平成24年度

武蔵野市非核都市宣言平和事業実行委員会 武蔵野市

#### はじめに

と頑張っています。 った樫の木も枯れ始めています。是非保存していきたい島変電所も間もなく取り壊しの運命にあります。生き残え去りました。市内ではただ一つ残っている当時の旧中戦後 67年が経過して、私達の周囲から戦争の足跡は消

更に多くの方々のご協力をお願いいたします。ないかと思います。記録集の発行は2回目になりますが、この機会を逃しては戦争の記録を残すことが不可能では今や戦争体験者はご高齢となり数少なくなりました。

平和を世界に発信していきたいと思います。と定め平和啓発事業を発展させています。武蔵野市からわが市では、昨年、1月2日を「武蔵野市平和の日」

おります。料を大切に保存し、機会あるごとに公開、説明を行って襲を体験した人達が持ち寄った戦争にまつわる遺物や資戦争犠牲者の慰霊と恒久平和を祈っています。また、空私の住まいである延命寺では平和観音菩薩を建立して、

をこめた、平和の大切さを後世に伝える教科書でありま心の叫びであります。戦争の悲劇を繰り返させない願いこの記録集は戦争の悲劇を体験した生き証人としての

体験記をお寄せいただいた方々に対し心より感謝中

し上げます。

す。

武蔵野市非核都市宣言平和事業実行委員会

委員長 中里 崇亮

## 戦争体験記録集の発行に寄せて

なります。 た。この冊子は、 から伝える戦争体 のたび、 武蔵 平 験 野 成 記録 市 22 民 年に発行した同体験集の 集 の戦争体験をまとめた「 第 集」 を発行い たし 続編と 武 まし 蔵 野

皆 樣 記録 聞い IJ 親から戦時中のお話を聞き取る機会となったという話も 経て再会するきっかけとなったり、 ただきました。これを読 ŧ お す。 集が多くの共感や縁 の前で体験をお話し かげさまで、 ております。 第 夏季平和事 集は発行直 を紡いでいることを実感し 11 んだ旧知の方同士が長い ただいたこともあり、 業におい 後から多くの反響 改めてご家族やご両 ζ 執筆者 の方に 期間 てお 冊 を の ίI を

い 平 郷を失った方々が大勢い 尊 うことは、 大震災という未曽有の災害を体験 ίÌ 第 命が失 穏な日常や輝 集の発行以降、 へわれ、 惨 な戦争体 かし 大切 昨年の3月 ١J な 験を彷彿とさせる悲しい 未来が一 らっしゃ 家族や仕 瞬にし 事、 11 しし L١ 、ます。 f た 住まい、そして故 L て奪わ まし わ かけが が国は た。 ħ 多くの できご てし 東日 え の ま 本 な

武蔵野市では、昨年、 11月 24日を「武蔵野市平和の

穏やか 日日 さを発信していきたいと思っています。 験の継承事業も含め、 で安心 て 制 な毎日が永遠 定 L١ た U 市民の皆さんとともに平和 まし に続い た。 核 も戦争 てい < 、ために、 もな ίĺ の 戦 そ 大切 争 体 て

るとともに、 そして編集にご協力をいただい を寄せていただきました。 平和交流団として派 を心より願っております。 今回は、 34 一人でも多くの方 人の方の体験と、 遣した中高校生の中から3人の 寄 稿していただいた皆さ だ読 た皆さんに感謝申 この夏、 h で しし 長崎市 ただけ へ青少年 し上げ ること hį 作文

武蔵野市長 邑上 守正

17 頁

松木

みよ子

#### 第 部 武蔵野の空襲とその記憶

戦時中、 戦後の思い出

橋 本 又治

1

七

戦時中の武蔵野市

中島飛行機武蔵工場での空襲体験

古内 竹二郎

4 頁

八 慰問袋と闇米

渡邉

とし子

24

頁

九 中島飛行機武蔵野と給友会

清水 正之 31

頁

安 部 菊圃 38

頁

五

戦時中の思い出

臼井

具 子

15

頁

+

兀

中島飛行機武蔵製作所での思い出

岩崎

兼男

9 頁

+

戦中・

戦後の食糧難

Ξ

中島飛行機・

武蔵製作所での戦争体験記

志賀

— 将

7 頁

戦争とともに歩んだ都立五商 期生の 恙い 出

田 村 41 頁

宇田川 白川 節 子 文子

竹内 静 江

野口 マリ子

具 子

真田

21 頁

## 第二部 市民の心に残る戦争体験

| 十<br>八                  | 十<br>七                                  | 十<br>六                               | 十<br>五                                    | 十<br>四      | ±<br>=       | 十<br>二<br>二<br>二      |
|-------------------------|---|--------------------------------------|---|-------------|--------------|-----------------------|
| 黒板は木の枝に                 | 精<br>私の頭に落ちた日 ~ 孫:<br>アメリカ B 29 の爆弾焼夷弾が | 父から聞いたこと                             | 邊見陸軍特別幹部候補生を志願して                          | 私の戦争体験談     | 技術部兵として      | 戦中・戦後の思い出 生方の心に好る戦争体験 |
| 竹<br>山                  | ラ 孫 た 男弾が                               | 芝                                    | 透見して                                      | 後<br>藤      | 大<br>野<br>田  | 生<br>方<br><b>体</b>    |
| 悠<br>紀<br>子             | 清水 正也 55<br>- 孫たちへの証言                   | 綾<br>子                               | 憲二  | シ<br>ヅ<br>ヨ | 武            | ゆ<br>き<br>子           |
| 57<br>頁                 | 言<br>55 ~<br>頁                          | 53<br>頁                              | 50<br>頁                                   | 48<br>頁     | 46<br>頁      | 43<br>頁               |
| 内山 満榮二十五 大連、青島での出来事について | 畑橋 武雄二十四 大連で迎えた終戦                       | 石渡 俊子 8 戦争をしていた 二十三 私の子ども時代、日本はずうーっと | 清本 和子―――――――――――――――――――――――――――――――――――― | 二十一原爆の落ちた日  | 二十のの時私は十歳だった | 佐々木由里子十九 戦争のない平和な世の中へ |
| 79<br>頁                 | 74<br>頁                                 | 68<br>頁                              | 66<br>頁                                   | 64<br>頁     | 63<br>頁      | 60<br>頁               |

| ĺ  |
|----|
| 六  |
|    |
| 軍  |
|    |
| 隊  |
| で  |
| Ċ  |
| の  |
| U  |
| 経  |
|    |
| 験  |
| ツヘ |
|    |
|    |
|    |
|    |
|    |
|    |
|    |
|    |

斉藤 與太郎 83頁

與太郎 33 頁

二十七 満州からシベリアへ

~ 青春時代の戦争体験~

四

年表・工場配置図

大寺 正光 86頁

五

実行委員編集後記

107 頁

二十八 預言者の受難

フェニックス 広島

梅岡 功 91頁

愛する人を失わないために

柴田 フミノ 93頁

編集にあたって

・標記については、当時の呼称に従いました。

足・再編集し、一部注釈をつけました。ように配慮しながら、読む方にわかりやすいよう補・原稿の編集に際しては、内容や主旨をそこなわない

ままの確認ができない部分については、体験者の記事実の確認ができない部分については、体験者の記

述を尊重しました。

二十九

武蔵野市青少年平和交流派遣団の概要 96頁

平和を未来へ~ 青少年平和交流派遣団~

青少年平和交流派遣団に参加して

高林 彩香 98 頁派遣団員 塩澤 理紗 97 頁

八木 詩織 99頁

三 市民から寄せられた

戦中・戦後の武蔵野の資料

100 頁

104 頁

市民の戦争体験

部 武蔵野の空襲とその記憶

第一

### 戦時中、戦後の思い出

### 桜堤 橋本 又治

### 工場での仕事について

呼ば 年 か いまし そのポンプの取り付けをし で、 Ó のため、 重油をエンジンの中で爆発させるのには、 体を作っていて、 私 東京い ら川 新 エンジンの具合を見ました。 れた今の京浜東北線で東京から通っていまし は 大正6 た。 潟で採った重油で機械を動 富 崎 終戦のころは、 すゞ 士の裾野に戦車を持っ の 年生まれで、 池貝鉄工という会社に勤 自 私 動 車 たちの会社は ( 当時は東京自動 江東区で育ちました。 てい 日本に まし て行っては、 かしてい もうガソリンは そのエンジンを作っ た。 めており、 車) エンジンの ました。 ポンプが要り、 が戦車の 試運 昭和 た。 省線 な 確認 その 転 L١ を て 今 ع 15 の 車

で呼 せ 日 およそ1 本の h の後、 'n |場は軍需工場なので、 В で おり、 0 射 29 海 軍 砲は 0 を迎撃する日本の戦闘機も同じ80 0 機関 0 の要請で小金井へ来ました。 8 メー 0 銃の砲身を作っていました。 0 1 0 メー ル の高さで飛んでくるのですが、 皇国第何号というような号数 1 ル ぐら ١١ まで その小 L か 0 В 届きま 0メー 29 金井 は

ルの高さまでしか上がることができませんでした

1

砲身の 機関銃 薬は増えるのでそれは大変なことでした。 た。 中をらせん構造にくり抜く技術を活かすことができまし U た。 時 U В かし口径が大きくなり弾が大きくなる分、 製作技術を習ったので、 の 29 日本軍 砲身を作り を撃墜するために、 一機に積 ました。 んでいる機関銃は 前 に勤 そのとき学んだ、 工場では新 がめて 20 L١ し い 30 ミリのも た池貝鉄 使う火 ミリ 砲 身 の の で の で

でした。休みもひと月に2回休めればよかったです。 が工場から火を消す手伝いに行きました。 しし とはなく、 始業が7時で終業が17 られた飛行機に搭載されたと聞い み合わせて機関銃として組み立てられ、 ましたが、 今の天皇陛下が幼少のころ、 できあがった砲身は鈴鹿工廠に運ばれ、 大体終業は21時でしたし、3日に1度は そこの宮殿が火事を出して焼 時でした。 小金井公園に疎開され U てい かし17 ます。 中島飛行機 けた際、 時で帰れるこ 他 工 場 の 部 で 品 徹 は で لح 我 組 々 て 夜

まで働 業という名前 変わりましたが、 その工場は、 きました。 に 終戦 なりました。 後、 業をしてい 軍とのつながりも切 現在は小金井製作所 ます。 私 は そこで れ ごと名が Ш 本工

私は戦争に行くことはありませんでした。3回召集令

状が れたためです。 エンジンが作れなくなるから行かなくてい の 知 識 来 が ましたが、 あったため、 召集令状が届 工場長から「 L١ ても、 おまえに行か 私 ίį には \_ エンジン と言わ れると

き始め、 学校は、 に泊り ジンの日本 生に工場での仕事が終わったら来いと言われ、 教わりました。 関敏郎さ 工場が三河島に 今のニコンという会社が当時日本光学と言って、その分 エンジンの知識は、 込んでエンジンについて教わりました。 h その間、 · の 権 に出 囲の 自分自身に納得がいかないようなら、 威です。 会いました。 美土代町にあり、そこで、 ありました。 電気の専門学校にも通いました。 池貝鉄工に勤める前に学びました。 その方から、 この方は、ディーゼルエン 14 歳のころ私は、そこで働 エンジンの知 早稲田大学の 先生の そ の 識 先 家 を

#### 空襲について

襲し 今の な 明 羽田 を 工 所 ました。 29 和 が が中島飛行機武蔵製作所に爆弾を落とす前 17 場 分かるそうです。 の 年 飛行 の 。 4 東京での一番最初の空襲だと思います。 真上から落とすことによって、 場辺りから飛んできて、 月 18 日にB25という飛行機がちょうど バケツの中へ砂利を入れると、 初めて東京 工 場 Ę の を空 正 照 確

いでしょうね。同じです。ああいう音を聞いたことのある人は今はいなザラザラッと音がしますが、爆弾が落ちる音はあの音と

年の ましたが、 ( 今の西東京市のヴィー また、 初めに空襲を受けました。 中島 ものすごい爆撃でした。 飛 行 機 武 蔵 ガーデンのある場所) 製 作 所 私は だ け 徹夜で仕事をし では なく も 昭 豊 和 和 て 重 20 I

が、 に使ったことがあります。 工場の空襲のときにも周りにはたくさんの焼夷弾 ました。その焼夷弾の中身にはゴムが使 下町の空襲のとき、たくさんの焼夷弾が落ちま そのゴムの焼け かすを拾って自転 車 わ の パ 'n てい ンクの ました が U 落 た が 玾 ち

片が埋まってい ですが、 度か改築をし の 頭の 私は昭和17年から桜堤に住んでいましたが、 部分です。 床下から高射砲の弾の破片が出てきました。 ました。 るの このあたりには、 かもし あるとき、三畳 れません まだ高 の 部屋 射 を壊し 砲 戦 の 後 たの の 何

### 昔の桜堤について

そ 14 のうち最初 桜堤あたりには住宅が 軒 が、 豊 ፲፲ の2軒は昭 の 海軍 工 廠 和 208 か 軒あり 16 50 年、 命令で移っ ましたが、 私は翌年に単身で桜堤 てきた人で、 そのうちの

妹弟が疎開してきました。そして現在に至っています。

ご本人からの聞き取りにより作成しました。

今は、 ってきて、 赤い 呼ばれていました。 速 い 寝られませんでした。 ましたが、この辺は砂利道で、 れないような状態でした。 の に 地 ので、 土ぼこりが舞い ました。 主の方の土地でした。玉川上水には当時柵 ちょろちょろとした流れですが、底が深く流れが 人が落ちたら最期ということで、人喰 夜帰って来たときは、畳が泥だらけで、 まわりに家も少なく、 一面のはらっぱなので、風がふくと 上がり、その土ぼこりが家の中に入 27歳でこちらへ引っ越して来 馬車が通るとうるさくて 武蔵 境の駅 が まで1 なく、 11 寝ら Ш ع 人

せんでした。ている地帯は、雨が降ると水が出てどうしようもありまマイモを食べていました。現在のURマンションが建っ土手の草を食べました。ここは米が取れないので、サツ戦争が終わってからは、食べ物がなくて困りました。

いろんな物を洗っていました。す。しかし、こちらの川は、どぶ川みたいに細い川で、っていました。今、URの中を流れている仙川と同じで住宅の間に細い川があり、そこで農家の方が野菜を洗

たがらなかったんですが、昭和2年1月に深川から母とっていました。だから、私の両親や兄弟たちはここへ来私はよく「ここは人間の住むところじゃない。」と言

## | 中島飛行機武蔵工場での空襲体験

### |東京市 古内 竹二郎 | ふるうち たけじろう

アメリカやイギリスなどに宣戦を布告し、い 摩 製作 昭 太平 和 +所 洋 Ł 12 戦 年 第 争 (一九四二年) 期 が始まったば 0 養 成 エとし 四月二日、 て入社 かりであっ L 私 た。 は中島飛 当 時 わゆる「アジ  $\mathcal{O}$ 行機 日 本は 多

は、 とクラルテ武蔵 ろだった。半年ほどして武蔵野市関 に配属された。 までで養成期間  $\mathcal{O}$ 他 養成期間 保 谷町上保 青年学校 は 谷新田 野のところ) 0 般教養や機械工学と工作実習を学んだ。  $\mathcal{O}$ 軍事 授業を打 教練 (現・ ; ち切 もあ に 西東京市柳沢二丁目) 移 ŋ, った。最初に住 った。 十八年 前 (現在の千川 戦時特例で十二月 . О 月 んだ独身寮 から 小学校 のとこ 現場 そ

その る目的 中島 玉 頃 用工· で、 加  $\mathcal{O}$ 飛行機多摩製作 の飛行機の生産は、戦 至上命令であった。 時 昭 間 学 和十六年の十一月に稼働  $\mathcal{O}$ 徒 フ 動 ル 員 稼働であ 0 一所は、 生徒・その他を含めて約五万人が それで昼・夜二交替や三交替 争をする上で必要なものであ 海 り、 軍  $\mathcal{O}$ 最 飛 盛時には正 したば、 行 機 のエ カュ りで ンジンを造 規社 あった。 員、工

> ラン して 1 なってから った。昭和十八年に武蔵野と多摩が統合 未成年の労働規制も ので使い道がなか 配 クとピ いた。十五歳の 属 され 東工場に スト た職 場 ンを結ぶピストンピンと言う部 は 私達も二交替夜勤 っった。 移 ない時代で、十二 六 つった。 棟 目 *の* 給与は良かったが 階 東 0 体 時 方 制に 間 L で、 の半 組み込 武蔵 工 買う物 ンジン 強 製 制 品 作 ま 労 を 働 所 製 が に 造 無 だ

では 場の全景を航空写真で撮って行ったのである。  $\mathcal{O}$ 機が、銀翼を光らせ白く長い飛行雲を引きながら東 が鳴り、すぐに空襲警報に変わ 五. 1 麗だなあと思った。)下から高射砲を打つのだが 方に飛んでいくのが見えた。 日 ルくらいで爆発し、一 昭和十九 届かなかった。この日は偵察だけだった。たぶん三日、 七日も来たと思う。 年 (一九四四年) 十一月一 万メートルの高さを飛ぶ 戦後知ったことだがこの いった。 (初めてB 工 場 日  $\mathcal{O}$ 29 を 見 の上空をB 昼過ぎ警戒 た時 八 В 千 時 カュ にエ 29 5 29 は メ 警 ま 綺 西 報

で近くの防空壕に入った。グオウー が ーン、ドカーンと今まで経験したことの 崩 ン、ズシンズシンと、音と地響きがする度に防 十一月二十四日、 れるので生きた心地もしなかった。 「空襲だ。防空壕に入れ」と言う声 昼食 のため食堂に行く途中、 ゴ ウ がしたので、 ない大きな音 かに ド な 力 空壕 突然ド 0 K 力 力

が、 に が 夷 計 避 台 + 担 難 出 弾 が 余 架で病院に運ばれて行った。  $\mathcal{O}$ 無 L 7 名 て 硫 残 4 ると、  $\mathcal{O}$ 黄 に 11 て、 犠牲 ŧ が 燃える異 壊れ 直撃を受けて負傷した人や死亡し 今まで働 者 てい が 出 様 たと記 た。 V な臭 工 7 場 録 V が た に が 死亡七十八名 燃える 工 んてい らある。 場 が 油 · る中 燃 え、  $\mathcal{O}$ 匂 で、 本 11 た 重 地 P 館 人達 下  $\mathcal{O}$ 軽 傷 道 焼 時

すっ 空襲の 牲者の た。 報 n 補 が 下 は を  $\sum_{}$ П 空気 自 修 工 する音 開 0) これ B 7 飛 場 時 空 転 ょ 1 上 1 び た瞬 多い  $\hat{\mathcal{O}}$ 一空を見ると編隊で次々と飛んでくるB ま 襲 な 車 ŋ を圧するようなグオウ ときは、武蔵境駅や三鷹駅の方に逃げる人波 が 方で Lがし、 ŧ で工場の外 保 機 か В 間 のに驚い 報 0 谷 疎 械 29 黒 た は 工 開  $\mathcal{O}$ L に そのうちドカー . の た。 場 周 毎  $\mathcal{O}$ 1 よる東京空襲の始まりであった。 で、 りは もの に 道 日 空襲警 て、 を選 疎  $\mathcal{O}$ 危 避難することを禁止してい よう メチャメチャに壊れ 開 (爆弾) 禁止令を解除した。十二月三日 険 L W 報解 度は た。 だ。 12 あ ] 私 中 が 一 シ、 除 同 つ 島と二キロくら  $\mathcal{O}$ ľ で たような ドカー グオウー 職 瞬見えたが、 くらいだった。 職場に戻ると、 場 は保谷にあ ンと破裂する音 気が ていた。 لح 29 す 爆 そ が、 る。 たが った 屋根 が続 会社 警 숲 弾  $\mathcal{O}$ L あ 弾 戒 か 社  $\mathcal{O}$ 倉 Щ は が 落 لح 犠 警 離 V  $\mathcal{O}$ は

に 印 象 1 に 残る  $\mathcal{O}$ 攻 ŧ 撃だった。 0) だけ 列 記する。 ちょうど私たち 翌年の二月十七 0 るあ 日 た は

> 中 V) 0 7 率 カン 機 が 5 銃 高 急 掃 降 < 射 被 下 害 2 も大きか 中 島 することも 8 が 0 け た。 · て 爆 爆弾を落とし 弾 あ を った。 落 とし た後 た。 に n を は 狙命

た。 と 何 で、 弾 が が 解除されたころから、 几 時限爆 仕事が 月二日 カン 落 落ち され 弾であ 手につ る音 周 は 夜 り が は 勤だった。 った。 かなかった。 するだけで 昼 のように 何 ボカー 時何 夜 中 爆発は 明るくなった。 処 に空襲警報 ン、ボカー で爆 発するか判ら な かつ -ンと爆 が 鳴 た。 ユ 0 ッシ 警 発 て、 な L 戒 始 警 照 ユ  $\mathcal{O}$  $\emptyset$ 報 ツ 明

こに 見 寝 V) に が 防空壕に入った。  $\mathcal{O}$ で 左 て 1 なった ると、 な が あ 腕 掘 崩 て 四月十二日 軒の家 ħ V) 無残だった。まだまだ経 る。 住 が り起こしたが 千 て半分生き埋め状態になった。 た。あちこちで大きな音  $\lambda$ 土の にので外 切 で  $\mathcal{O}$ が跡形も無くなってい れ 塊がア 木 。 一 腕 た に 時 12 五. は <u>۱</u> ズシーンと強く大きな音が "、 出 出 雨のように降り 計 人が 肉 だけ ン爆弾の てみると、 片や着 てくるも 直 残って 撃 で吹き飛ばされて死亡 一験し 物 ときは、 五. がし  $\mathcal{O}$ 0 1 は肉体 十 たことは 切 紙 たの た。 たの メー れ 屑 土をか 夜 救 端 が が忘れられ 護の が  $\mathcal{O}$ で 勤 1 舞ってい < 破 明 あ ル 急 も離 兵隊 るが き分け 0 片だけだった け 11 L つ て、 で  $\mathcal{O}$ たち た 1 工 紙 れ た。 L 7 7 7 防 場 8 た 外 空 寮 が 11 内  $\sum$ る  $\mathcal{O}$ 来 な カ を 壕  $\mathcal{O}$ で

でも流 1 空襲 洋 れ弾 で  $\mathcal{O}$ が落ちて、 完全に廃墟と化した。周辺の練馬 近 代 :設 備 を誇 多くの被害を受けた。 0 た中島 0 工場 ŧ 敗 区 や西 戦 ま 東 で 京  $\mathcal{O}$ 市 激

う。 戦闘 戦 戦争を知ら 量 の 特に原子爆 争とは人と人の殺し合いであり、大量の生産物と緑豊か 自 5争を体す 類 然 今考えて見ると、 私は 人命を奪  $\mathcal{O}$  $\mathcal{O}$ 員 破 破 • 非戦 滅と地 壊で 験した者として語り 「どんな戦争も二度と起こしてはいけない」と、 な 弾 ある。 い 自 闘員にかかわらず多数の人が被害者になる。 7  $\mathcal{O}$ 発明は、 世代の若者や子供たち、そして世界中に、 球の 然を破壊する兵器となっている。これは 戦争ほど恐ろしいことは無か 現代の進歩発達した兵器と戦法では、 破壊を意味する以外何物もないと思 その破壊力と放射能の発生で、 継 1 でいく決意である。 っった。 大 な 戦

記念植 含めた参 中央公園 見 7 六  $\mathcal{O}$ +んで行くのだ。私の帰る方向 風 二〇一一(平成二十三)年十一月二十四日、 たの 船 が 七 樹 年 前 が 加 があった。 (はらっぱ公園) あ 南風に流されて高く飛んで行くのを見た瞬 者  $\mathcal{O}$ あ あ 中  $\mathcal{O}$ 島空襲のB В 同で、平 時 29  $\mathcal{O}$ 植樹が終ったあと、 でなく 飛行 和 航路と同 0 で「武蔵 29 鳩 平 の編隊を思い起こした。 なので自転 0 風船を飛ばした。その「鳩 和 0 ľ 野市 様に 鳩 保育園 な 平和 0) 車 西 だ。 [東京市 に  $\mathcal{O}$ · 乗り 都立武蔵 の子供らも 日 平 制 Ĺ の方に 定」 和 0 間  $\mathcal{O}$ 日 野

の空なのだ」と平和の有難さをしみじみと感じた。

本

### ・1 艦載機(かんさいき)

空母艦に搭載され、そこから飛び立つ航空機のこれ

航

### \*2 機銃掃射(きじゅうそうしゃ)

機関銃で敵をなぎ払うように射撃すること。

## 三 中島飛行機・武蔵製作所での戦争体験記

### 西東京市 志賀 一将

察飛 時の軍 語していたのに何という体たらく。 八千メート 米軍機だ。その時、高射砲が打ち上げられるが、届かない。 一万メー 爆音で不審に思 勤 九 行 8 部 7 兀 の撮影で、 匹 1 は 1 一敵は ル位で破裂してい た。 ル (昭十 位の上空を見慣 + 1 九 その後の中島への爆撃が 、二階の 機たりとも日本の空に入れない」と豪 月一 年、 日。 中 窓を開け る。 警戒 島 れ 飛 ない機影が一 警 行機武蔵製作所、 敵機は悠々たるものだ。 後に分ったが、この偵 報 て、 発令。 空を見上げると、 始まったのだ。 聞き慣 機、明らかに 運 れ 輸 な 課

大きく と同 ても、 離 ころがっているのを見た。空襲 空襲解除後、三階を突き抜け二階階段の踊り場に不発弾 れ 十一月二十四日、 る必 時 なり 職場を守れの命令。 避 難 被害も大きくなってきたので、男子も警戒 が あ が許された。誤爆もあるのでかなり工場 る。 第一回 女子はトラックで の爆撃を受ける。空襲警報が出 初  $\otimes$ も回を重ねる毎に、  $\mathcal{O}$ 爆 弾は 避 難ができた。 2 50キロ 爆弾 位 警報 カゝ か。 ŧ, が 5

ながら落ちてくる。落下音を聞いたら、直ちに大地に腹ば百機位の編隊から一斉に投下される爆弾はザーと唸り

飛び出しや、鼓膜の破れを防ぐためである。い、目と耳を指で強くふさぐのだ。爆風で腹わたや目玉

 $\mathcal{O}$ 

私は慌 職場間 なり青天井だ。 かりが差し、 えない。 が 二月十七 むずかし の部品の運 てて地下道ににげ込 完全に生き埋めか。二十~三十分して入口 V ) 日 急 は この 1 違っ で外に出る。 搬 路。 た。 日は警報と同時に銃爆撃が始まった。 艦 電気は消 載 んだ。 機 鋸屋根 は 地下道は防空壕ではなく 超 え、 低空で来るの 爆煙充 の工場は屋 満、 根 入口も で、 から が 無 明 見

が出た。 襲では、 限 弾の落下音は聞こえるのに破裂音がない。朝方にな  $\mathcal{O}$ 爆弾 頭 四月二日、 公園 で、 田 0) 無・ 公園の池を工場と見誤ったらしい。この あたりでバー 夜間空襲。 保谷などの工場外の 吉祥寺東町の シ、 バーンと破裂が 民家も、 自宅にい か 始 なり まった。 た  $\mathcal{O}$ 夜間 ŋ で、 時 井 空 爆

時に地上に伏せていると体が舞い上がる程。その そ 言  $\bar{\mathcal{O}}$ 語 七・八・九 落 に 下音は 絶するすさまじさ。鉄筋三階 回 目 「ザ 0 アー」 爆撃になると一トン爆 ではなく 「ゴ 0 建 才 物 اَ 弾 は跡 ; が 用 と唸 形 V 破壊 り、 5 れ

尾 務所としていた。 山 中 0 島 洞窟で操業。 飛行機は廃墟と化した。 私 0 所属の課は武蔵 工場は 境の 浅 Ш 商店を借りて に疎開 Ļ 高

1)を店先で聞いた。 九四五 (昭二十) 年八月十五日。 正午。 玉音放送 **\*** 

ぐ理解した。 宣言のことは聞き知っていたので『その宣言』の意味を 言受諾とか、無条件降伏とかの言葉はない。 通告セシメタリ~』。 府ヲシテ米英支ソ四国ニ対シ其ノ共同宣言ヲ受諾 朕深ク世界ノ大勢ト帝国ノ現状ニ鑑ミ~、 この詔勅の文言中には、 私はポツダム ポツダム宣 朕 ハ 帝 ス ル旨 国 政

できていない」と思った。 課長は烈火の如く怒った。 管制の電球の覆いをはずせる」と言ったのだが、それでも 軍人課長に殴られると思ったので「あゝ、今夜からは灯火 「あゝ、これで死なないですむ」と歓喜したかったが、 「この課長、 詔勅の意味が 理

謝です。 歳で死ぬべき命、 の宣戦布告を拒否する勇気があっ 昭 国民を死なせずにすんだはず。 和天皇 多大の でも、 一の戦争を終わらせる決断と勇気のお陰で、二十 迷惑をかけずにすんだはずです。 昭和天皇が一九四一(昭十六)年十二月八 永らえて八十余歳の今日を得ました、感 他国や、その国民を苦 たら、あたら有為な青 世界の 国

> 憎んでも余りありま 々を塗炭 の苦しみに陥 れ た、 日 本 軍 部 の罪 は、 どんなに

#### \* 1 玉音放送 (ぎょくおんほうそう)

天皇の肉声(玉音)を放送することをいう。特に一九四五年 詔書」の音読放送を指す。 20 年) 8 月 15 日にラジオ放送された、 昭和天皇による (昭

0 和

## 四 中島飛行機武蔵製作所での思い

出

二鷹市 岩崎 兼男

### 中島飛行機へ就職

び 歳 が と 職 1 L 務 8 行 力 経 き 中 た て 最 私 0 < 月 機 L は 5 日 月 験  $\mathcal{O}$ 島 た 時 お 製 初 23 n 働 で が 待 作 に VI で 1)  $\mathcal{O}$ 日 大  $\mathcal{O}$ あ 遇 中 就 11  $\mathcal{O}$ は 工 所 100 ま て 正 若 7 لح 給  $\mathcal{O}$ 職 島 円 0 で 者 11 1 た 全 料 か ジ 下 L 15 昭  $\mathcal{O}$ 近 た が 円 然 た 年 は 請 6 ン < 5 和 記 とて と を 100 に 違 徴 け  $\mathcal{O}$ 12  $\mathcal{O}$ ょ 18 憶 な が 0 用 作 工 は 円 給 う 月 年 が ŧ る て そ 場  $\mathcal{O}$ 料 ど が 0 8 16 あ  $\overline{2}$ か 良  $\mathcal{O}$ 11 7 で Щ 給 を か H 月 ŋ < な す。 Ł 理 ま 料 年 か VI 丸 23 ま さ、 5 L ま 由 V) 工. 5 間 をもら す。 日 な た。 そこ だ ま 業 0 L た。 11 لح 他 株 7 中 l 市 た。 カュ 思 で 2 式 0 11  $\mathcal{O}$ 島 で そ と 7 年 人 そ 会 ま 11 は で 生 れ 社 1 中 ま が 働  $\mathcal{O}$ 1 L 4 ま う カュ た。 た す 力 徴 島 工 と 主 11 れ 時 6 0 て 場 月 用 飛 に 11 ま 代 昭 で、 中 に 旋  $\mathcal{O}$ 行 う で 11 L で 島 和 般 民 行 ま 機 勤 盤 正 20 父 で 間 12  $\aleph$  $\blacksquare$  $\mathcal{O}$ 0 L 工 が た。 18 業 就 た 年 を 飛 は 人 7

した。

え き 民 11 通 L た。 が 7 は 服 0 出 とて て 11 لح 勤 時 ま 空 結 11 11 Ł 襲 う L ま 構  $\mathcal{O}$ き た L が カュ 服 面 つか た。 が 装 倒 始 ま < 作 は 0 さ そ 仕 0 業 たです。  $\mathcal{O}$ 事 7 服 カン 場 ] 作 カコ 0  $\mathcal{O}$ た 業 5 気  $\vdash$ 入 は で 着  $\mathcal{O}$ ル る す き を に 0 ٢ 巻 切 4 11 き そ た 削 W 11 に な れ た ŧ 油 鉄 は t が が  $\mathcal{O}$ 付 で  $\mathcal{O}$ か 通 で、 Š 着 作 勤 L 業 لح 用 当 て 着 を  $\mathcal{O}$ 持 服 時 お に 着 V) 着 装 0 る  $\mathcal{O}$ 臭 替 7 で 玉



かの

5

40

代

 $\mathcal{O}$ 

t

お

ŋ

中

に

は

世

帯

を

持

0

7

1

る人

\$

11

ま代

中

島

に

入

社

7

カュ

5

は

保

谷

に

入

0

7

約

力

月

間

研

修

を

受

け

まし

L

た。

緒

に

寮

にの

入寮

0

た

人

た

ち

は

10

岩崎氏の身分証明書(出勤時、この身分証明書を守 衛に提示しないと工場内に入れなかった。)

### 第6機械職場へ配属

た 旋 配  $\mathcal{O}$ . と記 中 盤 属 研 だ 央 さ 修 付 後 憶 0 れ 近に た た 各 て  $\mathcal{O}$  $\mathcal{O}$ あ 1 で が 現 0 ま 場 た す。 作 武 に 食 配 0 蔵 堂で 勤 て 属 野 さ 務 第 11 食べ は た れ 6 2 t 機 た てい 交代 わ  $\mathcal{O}$ 械 職 け は ました。 制 割 場 で で、 合に で す す が 昼 小 タ 物 私 食 は が が 東 多 最 V 工 カン ツ 初 場 0 1 に

### 11月24日の空襲

に あ あ る そ 0 第  $\mathcal{O}$ た空 後、 17 職 襲 場 を は 体 第 移 験 6 ŋ L 機 まし まし 械 職 た。 た。 場 カゝ そこで 5 西 昭 工 場 和 第 19 3 年 棟 11  $\mathcal{O}$ 月 3 24 階 に 日

ろに だと 記 爆  $\mathcal{O}$ 撃 日 憶 が は あ て ŋ 1 昼 ま ま 食が した。 す。 終 多 わ < 2 たあ、  $\mathcal{O}$ 社 とだっ 員 が 食 た 堂 に  $\mathcal{O}$ で、 行 0 て 昼 1 過 るこ ぎ 頃

げ

で、

助

カゝ

0

たと感

U

ま

した。

私 わ 3 لح لح 誰 機 階 れ 私 は、 ŧ 同 か  $\mathcal{O}$ 7 は 消 が 見 僚 職 11 恐 地 か 場 ま 火 は 空 班 5 け に 上 Ź 襲 で、 た。 に ま 待 だ 早 機 は せ  $\mathcal{O}$ 時、 す W 食 焼 るよう カコ で 私 事 夷 弾 と 6 警 が を含め 警 た。 終 が 1 報 ŧ É 戒 うこと お わ 5人くら 上 耳 言 0 5 た て 報 司 に わ で、 後、 き が  $\mathcal{O}$ L れ た 出 指 ま て 全 7 せ 1 上 5 11 示 防 員 が 司 が 11 W ま 残 地 た あ で L カン げ た。 と 上 0 下 0 L 5 思 7 道 た た 消 لح Ļ L お 1 火 司  $\sim$ ま り 降 い カン 班 に す。 ŋ う 飛 は 言 L

> だ 空襲 ダン の音に 5  $\mathcal{O}$ た。 信 0 11 爆 任 ! た 離 弾 管  $\mathcal{O}$ 爆 を その は、 似  $\mathcal{O}$ 弾 と 音 持 が n で、 どう た は は 7 لح 11 0 ところ 私 直 ね 1 か 11 1 ます。 たち 死 る。 う 後 す か 5 傷 階  $\mathcal{O}$ 皆 る げ ? に 者  $\mathcal{O}$ は  $\lambda$  $\mathcal{O}$ 振 降 250 落ち 11 屋 う ŋ は 動 (技 キ Ź た 場 出 上 な لح が 秋 口 < 仲 術 ま た カ 葉 0 爆 と答 よう て が せ 所 る 原 5 間 弾 カゝ 場 き 下  $\lambda$ 地  $\mathcal{O}$ が に でし です て、 5 手 合 え ガ 落 聞 下 は ま 5 は カン た。 で に が、 近 消 ド て 全 n 大 < きま 作 抜 え 下 員 た 体 た 5 ア 幸 け に を で  $\mathcal{O}$ . と 思 メ V 落 で、 れ 20 地 て L 通 IJ た。 そ 5 7 メ 1 過 下 力 きま た に 0 す 11 n た る 場 た 0 が 1 実 降 お L お 爆 不 ŋ ル n た カュ 弾 発 ぐ で 車 ま が

限 ち  $\lambda$ 装置 な は そ 散 0 工 後、 兵 が 5 何 が ば 0 で 無 不 工 V) 1 事 逃 発だ 兵 て が に げ 1 来て片 処 る 出 0 理 た カコ L ŧ ま  $\mathcal{O}$ ま づ か L L け た لح れ た。 が な 話 作 業 1 L て を 結 始 11 局 لح そ た  $\otimes$  $\mathcal{O}$ 叫 5 ま び L 後 ま は 誰 た 何 L が か た。 事 が 私 Ł 4 時 な た

な か に 確 か 関 私 認 す た 0 で た る ち き は、  $\mathcal{O}$ 情 ま で、 報 せ 外 B  $\lambda$ が 職 建 で 場 暗 物 L くな B た。 建 人 る 的 物 まで が 被 تلح 害  $\mathcal{O}$  $\mathcal{O}$ 地 状 ょ 下 う 況 に な 等 11 被 は ま 害 何 L ŧ た 入 が け 0 てこ た 空

そ n カコ 5 家 ま で 歩 ĺ١ 7 帰 ŋ ま L た が 自 宅 に 着 11 た

 $\mathcal{O}$ は 夜 8 時 頃 で L

警 ŋ < ら 0 7 自 5 報 が 私 父は 宅まで走って帰っ は 1 1 が あ  $\mathcal{O}$ たようです。 だったと思 父親 運 出 ŋ が 私 中 た よく、 が 島 Ł か 5 遅くまで 飛 逃 行 当 空襲 げ 機 日 1 両親には大変な心配をかけました。 Ś ます は、 て来たようです。 帰 と 行 時 が、 に ってこなか 1 0 産 工 うことで、 て 業 働 場で勤務してい 報 全くけがも 国 1 てい [会と 0 たので 仲 ま 1 そのとき なかったそうで 間 う労務 L と共 た。 たのはこの 死 者 んだと思 に 父 50 工 は  $\mathcal{O}$ 半 集 場 空 ば 襲 カュ ま

女と海

城中学の学生たちと一緒

に仕事をしまし

た。

時 だけ そ  $\mathcal{O}$ でし 後、 た。 第 17 職 場 で は 爆撃さ れ た 後 f, 被 害 を 受け

て 1 な V 機 械 で、 仕事をしました。

うで、 大谷を考えてい そ 0) 時 候 上 補 層部 地 としては、 たようです。 は すでにエ 浅 ፲፲ 一場の 八 移 王 子 転を検討 لح 福 L 島 てい そ たよ れ

#### 年学校での 思 V 出

仕 事 そ は  $\mathcal{O}$ 後、 以 前 私 と ほ は とん 青 年学 تلح 同 校 じ ^ で、 職 場 小 が ż 移 1 り 部 ま 品 た。 を主 一に作 そこ で 0 7  $\mathcal{O}$ 

し

11

ま

L

た。

た

そ 0 時  $\mathcal{O}$ 職 場  $\mathcal{O}$ 同 僚 に は 1 ろ V ろ な 立 場  $\mathcal{O}$ 人 が 1 ま

> ちは、 な家庭 ん ど片 そ 他  $\mathcal{O}$ 言 中 人だ に  $\mathcal{O}$  $\mathcal{O}$ 職 日 朝 場 ったようです。 本 鮮 に 語 か 移 5 L 0 カコ 来 てい た 話 労 せ きま ま 働 そ せ 者 いしたが、 のうち W  $\mathcal{O}$ でし 方 Þ 半島 た が そ が 1  $\mathcal{O}$ 労 ま 後 務 4 L は 者 W 共  $\mathcal{O}$ な 方 <u>\\ \</u> 裕 ほ 高 た

やられ ど) やフィリ イリピン帰 きたそうです。 その てしま 他 0 り 従業員に ʰ 0  $\mathcal{O}$ 兵隊 ン 帰 た 0 で、 たち ŋ は、  $\hat{O}$ は、 輸 兵 現 送機 隊 役  $\mathcal{O}$ 現  $\mathcal{O}$ で浜 地 グ 兵 ル で 隊  $\mathcal{O}$ ] 松  $\mathcal{O}$ 戦 プ (新兵、 飛 闘 t 中 行 11 場 ま に 航 船 L た。 帰 が 技 全 兵 0 7 部 フ な

普 方 1 えると、 人 11  $\mathcal{O}$ んは、 まし なの 通 た 人たちに もうすぐ か に で敬礼 た。 숲 Ł 戦 争 話 し 「もう兵 が が は れ 変なことを言う 伍 £ ま . もう終 よく できま 長に せ 何も ん。 隊 面 任 わ L せず気楽でした。 倒  $\sim$ 官する人や を見 は た。 ŋ 行 12 なと思 ても 近 かなくて済 自 づ 分 5 7  $\mathcal{O}$ 技 てい 年 1 0 術 て 齢 ま 将 いした。 偉 む 校 ることが 1 を ぶっ ま ね 聞 ŧ L か い た た れ 我 ま と 言 分 が り た Þ L た。 か  $\mathcal{O}$ Ł は で せ 民 0 0 7 答 ず  $\mathcal{O}$ 間

う 名 W 名 称 ŧ  $\mathcal{O}$ 称 ŧ 第 頃 12 配 変  $\mathcal{O}$ 属さ 中 軍 わ 0 需 島 れ 7 工  $\mathcal{O}$ 7 廠 工 1 7 場 ま 第 たと思い + は、 L た。 製 玉 そ 造  $\mathcal{O}$ ・ます。  $\mathcal{O}$ 廠 管 よう 理 皇 国 工 場 な 八 理 に な 一 三 工 由 0 て 場とい 軍 お

いうと、 中へ を探し 長ぐら 、 握り どこか てくれました。 飯を持ってきてくれたこともありました。 に なると、 、飯上げ (食事当番) ろ 私たちが ろと 融 に行って、 腹 通 がきくようで、 が 減った~」と 鉄か 3

### 仲間との記念写真

りま カ所 れてしまいました。 に 時  $\mathcal{O}$ た。 あり 青年学校は、 職場 まし たが が変わっ 私 現 たころに、 は、 在 0 武蔵 几 中に 野 四中 夜間 あ 0 と千 の爆撃で建 た青年学 jit 小 لح 校  $\mathcal{O}$ 移 が 2

争中の 思い も厳 った を背景にして皆で写真を撮ろうという話になりまし 勤 横で写真を撮りまし この写真 に そ ・ます。 な明 の 時 ものですが なって 仲 間というのは、 は 0 日 たっ 離 が 我 特に工場の中で撮るというの ないと思って生きていた時代ですか れ 々 4 た 1 ば は 月 爆弹 2 日 なれになるので、 枚だけ た。 どうせ兵隊に行くか 0)  $\mathcal{O}$ すごい団結力がありました。 戦 夜 直 撃 間 時 残 中 空襲で被害を受けた後に撮 で倒れた大きなイチョ 0 てい に写 真を 空襲でやら る  $\mathcal{O}$ は珍 がこの 福島 撮ることはとて や大谷に転 L かっ れ 写 真です。 た 建 た。 たと ウ 戦 物  $\mathcal{O}$ 

そ

のことを警察に言うと、

憲兵隊

が

許

可

してくれ

たそ

わずか

1枚でしたが、

この貴

重

一な写真が

が残りま

した。

用道路 だめだと言われました。 たところ、 くに防空壕を掘ろうということになっ 青年学校に だから、 軍  $\mathcal{O}$ いたとき、 作戦上こんなところに防空壕は掘 人が 来てひどく怒られ 今の成蹊大学 ま た  $\mathcal{O}$ 高 L  $\mathcal{O}$ た。 で、 射 砲 実 陣 0 地 5 は 掘  $\mathcal{O}$ 軍 近



青年学校前での記念写真(昭和 20 年 4 月ごろ)

#### 0

亜専 私 は 境 の 結局 門学校 月 三六工場に行きました。 0 空襲 月 工員 島 現 で 鉄 たち 亜 工 工 細 所と一三六 場 は 亜大学)  $\mathcal{O}$ 電 各 工 気 場 系 の 3 統 (イザ  $\sim$ 分散することに に 力 大きな被害を受け 所に <u>ک</u> 工場、 分 カ れ ま そ な L れ ŋ と興 ŧ たが た  $\mathcal{O}$ 

だとい そこへ した。 兵士 電信 見 思 を ンジンを積 その光景が てこないだろうなと思い 帰 興 小 振 重 って 最 ったら、 昭 で、 後 柱 専 井 和 に 菛 ゼ てい うことを 自 1 0 ま  $\mathcal{O}$ 20 学 分たち きまし 上ぐら 中 服装から見て 口 駅 年 まし た。 校に 島 W 戦  $\mathcal{O}$ 本当に何 頭 6 だ飛 が 月頃 ほ が  $\mathcal{O}$ 空襲 た。 中に た。 · 先 輩 周 が V) 飛 う 行 んできまし 新 ŋ 勉 0  $\mathcal{O}$ 型型 さ 機 高 逃げ 首 が لح 強 残 あ か 「大詔奉戴 ŧ にマ 言 れ が さ 来るということで待ってい 爆  $\mathcal{O}$ 6 0 た学校 たと て ながら見てい 弾 た 人 聞 低空で飛ん  $\mathcal{O}$ 0 フラー 8 7 は 超 11 11 た。 き、 月 ま V きっと死 て れから出 低空で、 が へ最 す。 1 日 広 8 11 をつ 今 日 島 か たの 爆 <u>\*</u> 分か でいたことに驚 弾 後 自  $\mathcal{O}$ けた 撃 で、 落 が 一三六工 んでしまうの  $\mathcal{O}$ 分たちの ました。 何 亜 回とない 5 り 別 細 し、二度と 1 落 ませ 最 後 れに た ち 20 亜大学周 歳ぐら に、 て 今で く飛 場 は 来  $\lambda$ 作 は たよう 知 < カコ で 皆 0 今 ました。 ŧ べきま した。 帰 た 辺 5 カュ 月 0  $\mathcal{O}$ で  $\lambda$ 1 東 と 手 エ で を 0  $\mathcal{O}$ を

> な た んて思 0 で、 いなが 5 これ が そ ました。  $\mathcal{O}$ 弾 だっ 5 ぬ

う

11

#### 火薬を盗 ŋ E

工場で て、 ケツを持って行って、火薬を盗みに行きました。 前 当 時 です 時 爆弾に引火でもしたらと思うと…。 考えたらぞっとし  $\mathcal{O}$ 0 が、 中 夜 不 勤 . 発 島 実際そ 飛を並 0) のグラウンド 時 に暖をとるため の火薬はよく て きょす 保 管し が、 現 7 在 燃えました。 誰  $\mathcal{O}$  $\mathcal{O}$ 11 まし 陸 カ 燃 上 が 料 爆薬だ た。 タバ 競 調 達 技 コ 場) 私 で カコ に 5 5 ŧ 夜 工 吸 0

バ

が

### 井の頭自然文化園への爆撃

n

てい 井 傷 に きました。 公 カコ 輸送隊だっ 0 袁 軍 井 4 0 ま  $\mathcal{O}$ 頭 月 馬 内 た松 頭  $\mathcal{O}$ を L 公 2 た。 遠 松 文 日 その 時 化 が に  $\mathcal{O}$  $\mathcal{O}$ たと 駐屯 もう一つ、 公 爆 袁 夜 木 時は 遠  $\mathcal{O}$ 弾 間 か 思い が落ち 内 させて 手  $\mathcal{O}$ 5 爆 空襲 松 前 残っているそうです。 発 ま 脂 に あ す。 たということを近所 が 自 を 11 なかったようです。 とっ る部 月 動 あ 車 24 木 0 炭 たときは自 て 隊  $\mathcal{O}$ 日 部 を燃 1 が 以 隊 て、 あ 降 料 が ŋ に、 ありま 今 ました。 に 宅 ŧ 文 L た車 化  $\mathcal{O}$ に L 11 人 を ま  $\mathcal{O}$ カコ ま  $\vdash$ L 近 作 5 た 確 聞

#### 浅草雷門<br /> にて

なと思 塔が t どの程度 0 なっており、 7 3 1 きまし . るお母 月 見 たイチョウ てい できてきちんとしてい 門 京大空襲 な 9 た。  $\mathcal{O}$ います。今、 カゝ 日 けさんの か ったことを思うと、 の空襲 るだけで手の 前 防空ずきん 3  $\mathcal{O}$ 0 0 コ Ш 月 木も何 の後、 あと、 姿が で浮 ンクリの塊が 20 日 浅草へ行ってみると、 1 1 過ぎに神田 本か残っていました。 まだに 浅草 てい 打ちようが をかぶって、 10 日以上 る死 が ますが、 <sup>2</sup>やられ、 記憶に あっただけでした。 **(**) かに 体 たってもまだ片づ と浅草を見に行きました。 な を見たときは 当時、 赤ちゃんをおぶ たというの 人手が無か 残ってい カゝ ったと思い 観音 観音 ・ます。 様 様 本当 を聞 0 黒くな け は は た ま ょ す。 6 警察 0 なく き、 五.  $\mathcal{O}$ に 重 れ て 驚 か

#### 終戦

した。 戦  $\mathcal{O}$ 工 争 私 と言っていました。 場 は、 が 多くの 雇さ 自 終 父 宅 8 わ が れ に 月 0 ラジ 工員が集まっていました。 てしまうの たらし 向 15 か 日 才 1 0 が まし い \_ 、 日 な は これから自分たちはどうな た。 かっ 夜 かという思い 動明けで家に帰って寝 父が帰ってくると、 たので、 日 本が 負けたんじ ラジオの で、 再 び 工場 あ Þ る近 て る な 何 1 戻  $\mathcal{O}$ カコ < ま 1

> そうです。 IJ 11 20 うことです。 カのボー 年 7 戦 後 に 月 知ったことです 頃 イン 向こうには あ · グ 社 戦 る新聞 争 が  $\mathcal{O}$ 余裕 従業 嫌 記 が、 で 事 かと があったということでしょう。 員 が が、 掲 戦 思 争が 載 され 0 ストライキを始 たら 終 わ たそうです。 る少 理 由 は L 賃 前 上 め  $\mathcal{O}$ げ たと ア 昭 メ 和

### 中島飛行機を退職

ないか ると、 とです。 に のときに言わ てしまったという人もい な 終 戦 ってい 5 進 を迎えたあとの 工場で働い 駐 要らない る場所で退 軍 れた 占 0 領 てい もの が 軍) 職 8 たようです。 た証 に 月 は捨てたほう おまえたち中 金 をも 1 23 一拠書類など ろい 日 ららつ に、 ろと言 て 今の が 島 解 は 1 わ に 散 都 い れ 1 L <u>\f\</u> 全部 ま た る 小 というこ  $\mathcal{O}$ L カゝ 金 た。 燃 が 井 ŧ Þ 分 工 か そ n

※ご本人からの聞き取りにより作成しました。

## 1 大詔奉戴日 (たいしょうほうたいび)

太平 兀 から終戦まで実施された国 -洋戦争完遂の 年十二月八 毎月 八八日 月 に設定された。 ため に 0) 「宣戦 大政翼賛の一環として一 民運 0 動。 詔 勅 太平洋戦 が 公布されたことにちな 争 開 戦 九 0 兀 日 九 月

### 五 戦時中の思い出

### **幡町 臼井 具子**

し た。 蚕を営む家が多く、 学・高等学校の近くです。 階までは普通の建て方でした。 は3階建でした。 寺 私 大久保と新宿 町 は 戦後に今の場 大連生まれです。 4丁目に引っ越してきました。 3 の 階は 間の線路の脇に 桑畑が広がり、 所に引っ越してきました。 3 歳 蚕を飼うため天井が低くて、 でも当時は、 のとき (昭和7年)、 養蚕をやっている家 あった小さな 今 現 7在の位 の吉祥女子中 周 IJ 建 置 吉祥 物 は に 2 養 な で

下水 年 うど駐在所 袁 の年には吉祥寺東町で洪水が発生して、 あ に か りまし つかり、 (\*1)ということで、 太平洋戦争が始まる直前の昭和 へたちが らボー ポンプ場が逆流して、 小学校まで汚い 助 があるあたりまで、 トを持ってきたことがあ けられ 余談ですが、 まし た。 大変な洪水となり、 吉祥寺東町では 街 水の中を泳い 一が ボ ー お 15 年は、 祭り りました。 1 を持ってきて多く 腰ぐらい で通ったことが 騒ぎでし 昭和 紀 元 2 今、 井 33 まで水 た。 の 年 6 ちょ 頭 に 0 そ は 公 0

中島飛行機の工場が武蔵野にきたときのことは、よく

が、 え 時 覚 つ ろが西荻窪 強 窪 のことは分かりませ て、 たです。 の吉祥寺駅は え 制送還で帰国させられてしまいました。 から電車で吉祥寺に行き、 戦争の始まる前の昭和 7 三鷹台にある立教女学院まで通っ しし ま 立 せ に 教女学院はアメリカ 近いところなので、三鷹  $h_{\!\scriptscriptstyle Q}$ 乗り降りするお客は どちらかというと私 んでした。 15 そこから帝 年にはアメリ 私は学校 人の しし 建 まと違 の の てい ほうに 都電 に通 住 てた学校でした カ人の先 hίį うの ま 鉄 で L あ に 61 た。 少 乗 に る た な IJ 西 I 換 か

が、 U 布 醤油やさん、 知ってい 11 える通り」と言われ せ ١١ 込 た。 我々の か んできました。 ました。 団を持って行けば んでした。 全く知らない どの家も戦争が始まってもあまり 戦争が激しく る会社の 家あたり 都 酒屋さ 家にピアノが 心で空襲があると、 ば 人 周 人 を泊 んが家 てい 比 を家に 井 お米を5升とか、 なると物々交換をしました。 較的 の ん の て ました。 家 入れることも は大きい に御用聞きでよく訪ね あ 裕福な人たちが 61 ıΣ まし 焼け 八百屋· た。 家 ピアノ が 出 お でき され 多 餅 さ 食糧には <u>^</u>かった んや魚 に換えてもら が 住 な た 鳴 h る で が の 例 て p の 困 L١ 逃げ えば きま さん 聞 IJ た ま せ

松籟荘(しょうらいそう・今の松籟公園)のあたりに爆弾

私が疎開 ました。 ませんでし 5 が落ちたことが か . < 爆弾は をしてい 闘機による機銃掃射を受けたことがありました。 た。 弾は ただ、 20 不発で、 ありました。 たときに、 5 30 土がパーッと散って、砂埃になり 年前に掘り起こされました。 そのまま土に入ったきり出 家の2階の階段のところに、 そこは 大根畑で、 地 面 また、 て 来 が 柔

聞

送

米軍

の

戦

月 27 作ってい す。 して の あ 油 ij 昭 ١J がなくなりガサガサになってしまいました。 私の一級上は、 の工場に通い ま 和 日に空襲を受け、 ましたが、 20 まし たが、 年、 た。 16 Ш 歳の女学校3年生のとき、 糊で風 私は1ヶ ました。 崎 有楽町の日劇で風船爆弾 (\*2)を まで勤労動員で東急機械 疎開をすることが決まったからで 船 そこでナットのやすりがけを 月で休んでしまい の 紙をつけるから、 学校は ま み Ū  $\overline{\phantom{a}}$ 現トキ んな手 た。 麹 町 5 اتا

所、 で た の の 軍 が 校に入校しました。 昼夜か で 隊に入り、 兵隊にやりたくないということで、 三菱製錬所というところで働いてい 開先は岡山県の玉野市宇野でした。 す् 玉野には三井造 かりました。 そのあと三菱鉱業という会社 工場では月に1日と15 兄が、 船 の 瀬戸内海 工場 の学校が の島に 3 日間 東京から たからで 日し あ に就職させ だけ ij あ か休 す。 る製 岡 その 丸亀 Ш 4 母 錬 ま

> が あ ij ぜ んでした

て。 うことが決まり、工場にあるものは何を持って帰っても ろ持ち帰りましたが、 いいということになりました。 と言うのです。 からないまま工場の主任が、 たら大変よ。」と言い を聞 き取ることができませんでした。 8 」と言ったので、私は「おじさん、そんなこと言っ 月 L١ 15 たのですが、 日 の終戦の日は、 隣のおじさんが「もう負けたん 音声 ました。 私はヤスリー本持っ 学校の庭に集められラジオ放 がグヮングヮンという感じ 「今日は仕事をやらん。 要 領 そのうち工場を壊すとい 何が起こったのかわ の ١J L١ て帰り 人達 は まし しし だっ 3 で 11

ご本人からの聞 き取りにより 作 成し まし

#### \* 1 紀元2600

された。 元2600 初代天皇とされる神武天皇即位を紀元 ( 年となっ た昭和15年には全国で盛大な式典が開 皇紀) 元年とする。

#### \* 2 風船爆弾

撘

た兵器

太平洋戦争におい 陸軍 が 密裡に開発し た気球に爆弾を

#### 六 学 徒 動 員 の思い

立 杉 八 日 東 杉 王子 大 の 和 出 区 市 区 市 町 市 小 <sup>こ 野</sup>の 竹 <sup>た</sup>けう 山 ま **ロ** ち 内 ち 宇だがが 白らかわ 川ゎ み よ 子 <sup>-</sup> マ リ 子= 文 ஃ 江 ぇ 静 <sup>し</sup> 節 <sup>せっ</sup> 江 <sup>え</sup> 文 <sup>ふ</sup> 子 こ 子 こ

体 験 談 は、 当 時、 杉 並 区 一天沼に あっ た 敷 島高等女学校 2 年

学校 年学: 生だった ŧ ス 私 の ഗ た時の思い出について語り合っていただいたものをまとめ たち <u>\\</u> 2 場 です。 正 でで 年 での 6 行 生 が 敷 **平** 名の 出来事に 中 島 島 . 成 ま  $\mathcal{O}$ 14 方に 0 飛行 使 L 5 23 4 た。 い 年 15 お 校が 方 つ 機に学徒 12 集まりい そのときには、 歳)だった昭和 V 0 月 治緒 て 8 練 日 習 に入校 ただき、 を 動 武 員され 蔵野 Ļ 市 19 中 桜 たの ほど行ったうえで、 役所にて) 年で、 島 その後、 陰、 飛行機 は、 武 入 校 蔵野 敷 旋 、学徒動 島 7女子学 式を青 盤 高 マシノ 等 た 員 女

> 終 国 職 か 人 月 5 戦を は ま 立 場 。で、 東工場 配  $\mathcal{O}$ 迎 は 工 属 日 え 武 場 に 後に です。 ました。 蔵 な  $\sim$ りま 野 行 にい В 0 私たちが中島 L 29 た人も 配属先は2人だけ た。 て、 0) 偵 私た それから 察が 1 ・まし ちの あり 飛行機 た。 学校 八 É 王 私たち した。 武蔵 は 西 子 1 工  $\mathcal{O}$ 製 学 場 浅 は 作 年 で、 川に 昭 2 所 あと 和 クラ 行 入 20 って、 、スで、 0 年 4 3

だと思 5 L 地 原 た。 は地 下 則 私 道 は 終 1 下 か 通 吉 、ます。 戦 -道を通 祥 5 勤  $\mathcal{O}$ 職 寺に  $\mathcal{O}$ 直 場 仕 前 5 方 住 な ず、 向 は  $\lambda$ 0 で カュ 自 地上から直 で、 0 由 11 たとおっ でし たので、 いろいろめちゃくちゃだっ た。 歩い ぐ階段を上がって行 L 工員の方は やってい て中島に ますが、私 ほとんどが 通 ました。 た きま た

か L か 1 ました た。 2 ったです。工場では部品 工 たの 場 敷島 で で、 が、  $\mathcal{O}$ は 仕 家政だったので、 主に私たち子どもにやら 英語表記に苦労しました 事 は、 旋 盤 Þ などの 検 査、 口 ] 名称に英語 板 金 7 字 の担 せ るの L 当 か 勉強 表記 12 は、 な が L 検 0 7 あ 査 た りま が 多 な

るところが 7 戦 あ 後 り、 £ 残っ 鉄 あり 筋 て 4 まし 1 階 た、 建 た。ここ  $\mathcal{O}$ N 建 TT2号 物 は の 3 工 ンジ 階に 館だけ 最 0 終 は、 部  $\mathcal{O}$ 修正 当 品 時 が 集 検 ŧ ま 査 工 ると を 場 す

\_ \*

1

1

力

月

から3 姉 ました。皆さんすごく仲が良くて年上の方たち 現 でしたが、 通 部 ころで、 さんぶりを発揮して、よく可愛が 在 ると、 品 とを符合 菊華 名、 すぐ裏で 私 途 <u>\f</u> は (杉並 中で配置: 正から2名、 台 Ļ 車 学院)になっている学校か 組 位 に 置 立 乗ってくる 換え 立に入り B 数 計 が  $\mathcal{O}$ 9名 あ ま 検 りました。 す。 部 査を  $\mathcal{O}$ 品 この 学 して と つてい 徒動 職 帳 V 。そこの 員 場 簿に ま ただきました。 ら 4 は  $\mathcal{O}$ L 女生 割 もとてもお た。 載 職場に、 合と平 0 徒 検 て 敷島 が 査 11 は、 11 穏 が る

な砂鉄 傷 する仕事でした。 ま そ  $\mathcal{O}$ が 工 イ の当時 があ 持 は、 員 ルに手を入れる必要が その まし 重 ちでい 0 大きな太い鉄に 部署の 方が を入入 1 ると砂 部 です た。私たちは 品品 ま 「自分でやるからい ħ 以 した カ 鉄が 仕事 ておき、そこに電 外 5 は 作業は単純でしたが、 は、 付着して確認できるというも 検 手伝 査を 傷 完成した部品に傷がないかチェック 折 が入っていたことがあ れ 1 あ なけ 通 まし り、 過 れ た。 L いよ」と言ってくれまし 汚くなる仕 磁 ば 7 石をつけ 組 11 番印 1 立 オ  $\mathcal{O}$  $\mathcal{O}$ にとい 象に イル 方まで行 た部 事だった 残って ŋ  $\mathcal{O}$ のです。オ 品を入れ、 中に細 ŧ うような いしたが、 ってし こので、 1 る た か

弁当 糧 お 事 は コ 情 毎 メ は 日 が 結 お 少 構 に ĺ 良かっ にぎり で、 で、 その たと思い お 中にこげ か ず 、ます。 は 大根 茶色 を煮 し  $\mathcal{O}$ カュ たも 3 L セ 別  $\mathcal{O}$ チぐ  $\mathcal{O}$ で 部 L

> を食べ に、 そ 帰 時 ŧ ところには 各家庭に れ お 5 れか 期も た場 ŋ 0 魚 1 これ だっ たの な 0 た記 5 あ 所  $\lambda$ 乾 ý, 食べ です 中 E 7 たかと思い はもう小豆 燥 · 島 よって違 あ 憶 出 麺 てとい 支給されたお弁当は るん が が、 たこと が が あ ほとんどダメだと分かった時点で、 入 寮生活の方が大勢い だなあと感じ ります。すごく甘くて美味しかったです。 0 ます。 もお砂糖なんて全然ないときに、 ったら喜んで食べ 0 が 7 た な 11 ようです。 て、 いという 鰯 ま  $\mathcal{O}$ 食べ L 話 3 お弁当を持参 た。 ŧ 0 な て たので、 聞 切 お V) ください きまし り · 赤 で、 が 飯を炊 ほ その 最 た。 とん して 初 ま 方 お 1 は 配 ある たち た 持 属 ち た 0 粉

ので、 を 番 学校の帰り たとき支給されまし  $\mathcal{O}$ 歌 星 カコ 通 見えた、 なと、 勤 って帰る、 丈を詰め  $\mathcal{O}$ ときは 今にして思えば思い は、 2 その 番星 後ろ もう夜空に ラッパ ようなことがささやかな にゴ 見えた たが、 服 ムを入れ をも 丈も お星 0 て 歌 5 様 長い 出 1 を さ が 直 ま 歌 見えます。 L Ļ れ L えます。 て 0 た。青年学 た 通 ブダ り、 11 楽 ま ブ 帰 そ L ī 4  $\mathcal{O}$ 校 ŋ れ た。 É に 洋 0 軍 青 服 入 た 歌 1 年 な 0

### 工場疎開について

武 蔵 野  $\mathcal{O}$ 工 場 が 爆 撃 で破壊され たあと、 時、 荻 窪  $\mathcal{O}$ 工

を カモフラージュをするため した。もう部 は を覚えてい 担い 毎 に 朝 移 駅に で、 b, 学徒動 、ます。 そ 集合をして、 品というの  $\mathcal{O}$ あと八王子 員 0 歌を歌 駅に置い は あまり  $\mathcal{O}$ 浅 ったりして、 カボ ĴΠ なかったように思い て に チ あ 疎 る鎌 t 開 を植えて歩 しま 工 P 一場へ向 鍬 L Þ た。 ス (V) か コ 浅 、ます。 ツ た *\* \ Ш  $\mathcal{O}$ ま プ で

の顔が見えるような低空の状態で飛んで来ます。吉祥寺から浅川まで通うとき、艦載機グラマンが操縦士

終 サ 戦 Ź  $\mathcal{O}$ ガニ 日 Ł を 浅 捕 Ш 0 で迎えました。 たりしていました。 最 後  $\mathcal{O}$ 頃 は もう 仕 事 が な

事 が 持 1  $\mathcal{O}$ 9 つて 人に ŧ っぱ が 分からなくなったこともありました。 浅 な 余 Ш 帰 ŧ 計 に  $\mathcal{O}$ あ 0 可 行 に たの で、 愛が ŧ り、 った時 5 それを採って歩い 5 を覚えてい 職場でもうるさく言われませんでした。 11 まし は、 ħ て、いつもおにぎり お た。 昼 私 一は職 、ます。 が小さかっ 場で食べ たりし 浅 川 は て、 たから、 をもらってうちに まし Щ しかし、あまり なので、 帰ってくる道 たが、 すごく 木苺 私 職 は が 場 1

### 空襲のときの思い出

ます。 て、「 で、 に 5 怖くて、上司のところへ行くと「まだ警戒警報だ」って怒 いう 込みました。空襲警報 が掘ってあるだけで、階段も なると飛び出すというようなことをやっていました。 れるんです。 襲の 北の方へ逃げ 経験もあります。 助けて、助けて」と叫 私たちは、 ときは、 怖いのでドラム缶の陰に隠れ ・逃げるとい 防 ましたが、ただ塹壕 空壕の場 それからはもう、 が 解除になっても穴から出 んでやっと助けてもらっ 何もない 所を知ら っても バ Ź ンバ ようなところ 警戒警報 \* 2 れ 7 ン攻 1 て、空襲警 みた な へ撃さ が 5 カゝ に 鳴 れ 0 11 れ ると たと に穴 た なく 飛

を隠そうとしていたのでしょうか 外 引きずって歩いていたのが印象的 引込み線 出たときに、靴を履いたままの兵隊さ のところで空襲が あり、警戒解 でし た。 そ 除  $\lambda$ 0)  $\mathcal{O}$ に 足 な 方 は 首 0 7 を 発 犬 動 か 機 が 5

人が 所 番 6  $\mathcal{O}$ 避 虚遠くはす 敷 指 難 げ 地 獐 は こして る 職  $\mathcal{O}$ 東 場全体でしますか た 北 久 おり、働い 8  $\mathcal{O}$ 留米まで行ったこともありまし 端 畑 をジ に ありま グザグに走りました。2~3 てい した た建 ら、上 か 物 , 5 が  $\mathcal{O}$ 中 組 青 島 長 梅街 飛 とかそうい 行 道 機 た。艦 を 武 過 載 0 作 た

逃げ てい でも爆弾 7) まし 0 ていう思い か分からない たの の落ちる音は で、 いまでは良く頑張れたなあと思います。 はなかったですが、畑の道やぬかるみを たい ものすごい音で、何と言って表現 へんな怖さは今でも残っていま

たときはとてもショックでした。しかし、何人の が なったとかいう情報は一切ありませんでした。 燃えて、工員さんがあそこで焼け死んだという話 私 が いた建物は爆弾が落ちませんでしたが、 西 方が亡く 工 [を 聞 場  $\mathcal{O}$ 棟

心境はどのようなものだったかと思うと、今の時代に子ど した。そのような状況で毎日子どもを工場 ば戦争に負けちゃうと思っていたので、毎日休 ことがありますが、 を育てられて良かったと思います。 母 がもう工場 へは行かないでくれと、泣いて私に 軍国少女でしたから、 私が へ送り出 行 まず行きま カュ ロす親の なけ 頼 W れ だ

#### 1 ノギス

長さを 100 外側測定・内側測定・深さ測定・段差測定ができる。 分の 5ミリ  $\vdash$ 単 位まで 精 密 測 定 する測 定器

#### \* 2 塹 壕 (ざんごう)

なものはタコツボとも呼ばれる。 戦争で歩兵が砲撃や銃撃から身を守るために使う穴または 本陸軍では散兵壕 (さんぺいごう) と呼んだ。個 戦闘陣地の一つ。 |人用 0 小さ

日



座談会の様子

### 七 戦時中の武蔵野市

### 吉祥寺北町 真田 具子

寺北町に住んでいます。 私は、昭和8年生まれで、生まれてからほとんど吉祥

#### 周辺の様子

耳 学園祭で打ち上げられる花火の音に、 来る 防空壕の で 照らすの を 成 塞い たびに 蹊学園 でい 中からおそるおそる見上げ ·高射砲· ですが、 の中に高射 ます。 を打ち上げました。 光が交差した中に飛行機が入るのを、 ?砲陣地 があり、 ました。 そこから、 その時を思い 夜はサー チライ 今でも秋 敵 機 出 の **|** が L

の の 訓 練 ま ょた、 派兵場が. 練をしていました。 現在吉祥寺北 あり、 陸軍 が 町にある」 銃を持つ て 匍 R の社宅は、 匐(ほふく) 当時 前 陸 進 軍

ては 在 場に関することについては一 な らな には L 知っ L١ か け L١ な て 所 でし 中島飛行機武蔵製作 L١ い事でした。 ま らすが、 たから、 鉄条網で囲 戦争中、 戦 発中は 切秘密だったからです。 所のことは、 ゎ 近くの住民でさえも工 工 場 れ の方へは行ったこ て Ñ て近寄っ 知ろうとし ては

とがありませんでした。

していましたが、子どもには話さないようにしていまし戦局が悪くなるにつれ大人たちは、ひそひそと会話を

た。

でした。 がどんどん悪くなっても、 会なので、 それと、 情報統 ラジオも良いことしか言いませんでしたの 制 当 時 若い人に伝 が敷か も何でも情 れてい わりにくい 報が 本当のことは報道されませ て、 うあっ そのころはテレビも のですが、 たと思われがちです 今、 で、 戦況 な 報 61 社

良ければ攻撃目 秘 密でした。 それから、 天気予報 標が定まりますので、 も今のようにあり 天気 ま の せ 情報  $h_{\circ}$ ば 天気 が

### 食糧事情について

芋づるやスベ 当時のすいとんはまずいものでした。だし汁などなくて の hもっと食べるもの は 敗戦記念日には、 食 糧 シイタケを入れたりしておい 事 情については、 リヒユなどの野草を入れてい があり すい ませんでした。 とんを作りますが、 戦争中はもちろん、 しくなります。 今でも8月 ました。 今の 戦 後 す の でも、 15 方 لح

とにかくお米がありませ

んし、

農業をする男性は

み

h

どは、 まし する過程で栄養が足りなかっ 顔が た も 後 な ij ō Ē た。 Ú でし 食糧 むくんでくるというものです。 争 神経 ますが、 昭和一 行 た。 が 痛 きまし アメリ があり 栄養失調でお腹が大きい子どもの写真を見 桁生まれは体が弱いといわれています。 私 が 見 力 た うます。 から入ってくる の た で、 光景 戦後にビタミンの注射 農 たせい ば 業の 体 担 ゕੑ 私自身も身体が成 は ま L١ ガリ 手が ではとても 今でも雨 ガ L١ リです ま せ に通 の日な ひどい h が、 長 戦 L١

### 小学校での思い出について

の教 で言いよどむと、 ح お は  $\bar{h}$ でこを突かれることが 授業で歴代天皇の 私 育は、 は、 ど覚えていない 今の 戦後には役に立た 市立第四 列に 名前 有様です。 小学校に 並ばされ を覚えさせられ U ば な しば 通っ L١ て、 あり も て のも多く、 男はびんた、 まし 61 ましたが、 ましたが、 た。 今で 終戦 は 女は 途中 当 まで ほ 時

返し が 落 ていきました。 そ で落ちて ഗ れと、 ち 角 L まし まし の 側 ιÌ た。 た。 教科書が足りない 溝 たそうです。 ビ お あ 私も教 る日、 私 そらく爆 の名前 科書 教 科 そ の 風 が 「を お 書 の のせ 書を借り 方の家から四小まで約 で上 L١ 借り Ū て あ で の る教 しょうか、 た方のうち して 人から下の 科 年経っ 書 が 兀 人へ貸 泥 に 爆 ま 小 て 800 み 弾 の お

> かっ 姿で写真だけ撮りました。 ていません。 で走らされ、 り主も持ち物には名前を書くことになっ に汚して捨てた!」といって怒られました。 メー 空襲が激しくなり、 ま ょた、 た 1 の ル 校庭 ですが、 離 れ 薄い 足 には石炭殻を て の L١ 紙 裏がとても痛 先生に「 ま 心の卒業に L 疎開 た。 いっぱ 証 何で大切 私 し Ŕ 書 た かっ 人も を丸めて持って、 その ١J ١J 敷き詰めて、 な たのを覚えて 教科書 る の ことを てい で卒業 まし 持 をこん ち主 然 は た。 も 式 ١J 知 ます。 も な 5 所 な

### 機銃掃射について

帰 ば た 学校はすぐ下校させますの へ行くと警戒警報がよく鳴ります。 しし 水 ん後、 道道 まし りました。 の夏休み 兀 小 と路をひ た。 人っ子一人歩いていないところを、 を卒業してから、 まで、 4月に入学してから、 たすら歩い なぎなたなどを習っ 三鷹台にある私 て帰りました。 で、 電車 体育の授業では7月半 が 警戒警報 動 て 空襲警 L١ 11 立 皆ば て ました。 の女子校 が しし らば 報が 鳴 な ħ l١ らに 鳴 中 学校 ば 诵

とに 61 まし 7 月の夏休 かく早く た。 防空ずきんをかぶって暑い 家に み 前のことです。 帰 1) たい とい その日 うそ の 日射し 思 も警戒警報 11 だ け の 中 で が 鳴 L١ 1) て

とし が、 がしたので、 ぐそばの茅葺屋根 今考えると本当に偶然ですが、 いると、 家は土間などあけ たので、 げますと、 協 向 議 L١ て、 会前 敵機が一機だけ浮い て 歩い そこへ走り込み そのお宅 の 銃をこちらへ向 おそらく工場 五日 τ その・ L١ まし 市 .放しで. 街道かり 家 の若い奥さんが出ていらして、「 の 農家 た。 の 土間に逃げ込みました。 現 U ていました。 ました。その後にパパパッと音 の け を襲った帰りだったと思い 5 たので、そこでうずくまって てい 北へ 手前にケヤキの 在 苝 ます。 何気なくふっと上を見上 伸びる道へ入ったとき、 町一丁目に びっくりして、 機銃掃射をしよう ある社 木が2本あっ 当 会福 時 ます の 農 祉

も 銃 言い 掃 敵 銃 射 機が去ったあと、 掃 ませ に遭った事は、 射に遭っていることがわかりました。 んでした。 恐怖 とぼとぼと家 でも何十年か経つうちに多くの方 のあまり親 ^ 帰り に 1. も姉. ま U にも友達 たが、 に 機

そこにいました。

にしばらくいらっ

しゃ

い」と言ってくださり、

しばらく

知ったことが多いのです。蔵製作所のことや空襲のことについても、書かれた本で当時できなかった勉強を今しています。中島飛行機武

機銃掃射より我を守りし欅は今

大樹となりて空を覆へり

|発の爆弾落ちし我が家の路

六十七年は穏しく過ぎぬ

語り部となりてゆかなん我が生れ

育ちて老いを迎えし町に

ご本人からの聞き取りにより作成しました。

#### 八 袋と

#### 渡邉なべ 子:

は

ラ

す。 興 ク 鼻 線 が  $\mathcal{O}$ 本 に 大 を に 住 口 ズ 小 町 私 うきな それ 用 ラ ウ 0 僧 宅  $\mathcal{O}$ は が ま 昭 ま ツ さ 地 五 巣 ま لح は れ  $\lambda$ だ 日 和 を 淋 T た 並 が れ 0 市 カゝ 丰 7 近  $\lambda$ 沢 た 街 で活 11 け 0 ŧ 所 道  $\mathcal{O}$ 山 ŧ て 木 九二七) わ は で 沿 11  $\mathcal{O}$ 畳 が カュ 街 気 11 ま 11 でした。 て夜に、 あ 5 が 灯  $\mathcal{O}$  $\mathcal{O}$ <u></u> 是 た。 ŋ な が 注 あ ŧ 少 ŋ 年生まれ 文も多く、 11 くらい です。 した。 ま なると なくて、 店  $\mathcal{O}$ L た。 前 です。 ホウ そ 真 そ に  $\mathcal{O}$ 0 夜 五 は 職  $\mathcal{O}$ 木 に 人さん 暗 日 仕 頃 洞 なると 実家 でし ウと鳴 市 事  $\mathcal{O}$ ほ 吉 街 用 た。 <u>ら</u> Þ 祥 は 道  $\mathcal{O}$ 誰 لح 自 見 寺 吉 < に 習 中  $\mathcal{O}$ 近 カン 転 は 祥 フ < に で 央 車 新 寺 11

5

0

れ

千  $\mathcal{O}$ 教 を う 入 た 室 代 武 小 紙 8 学 部 n  $\mathcal{O}$ 蔵 窓 野 なると千 で 校 ま 折 を 兀 で 町 母 慰問 開 立 0 慰 年 と中央線 第三尋 た 間 生 け 民袋を三 ると、 人針 鶴 袋 やタ とき を を 常 届 に 小学校 肥 お友達と刺して送りまし オ 個 け 乗  $\neg$ 支 B 作 に行きまし ル って四 ij 那 L 平 ま 事  $\mathcal{O}$ 0 変で 仮 L 臭 周 ツ た。 名 1 ŋ 谷 た。 戦 ば が は  $\mathcal{O}$ カコ 丰 プ 麦 0 陸 りで 7 畑 お t 軍 ラ لح 裁 1 ば 省 書 る兵 漂 縫 メ カ た。 恤 う が 1 ル ŋ 隊 で 兵 た B  $\mathcal{O}$ で した。 です。 きる 丰 手 飴 \* 紙

> と文 とても ってくると絵 てし 無事 せ 7 る X 通 ま が 1 ル まうん でに あ するの 喜 12 ると『南方で戦死 な 0 届 ば W たりしました。 れ 11 腐 カン です。 で や 詩 たら は楽 ま 0 は L 7 日 た。 を冊子 持 L L か < ま 5 J 0 戦 お 2 が L に ば 争 礼 たですよ。 た らく ま して送り が  $\mathcal{O}$ لح ま 思 L  $\mathcal{O}$ 返 せ どくな た ·返 事 事 11 W が ま カコ が É 来 で って親御さん す ら、 来 ŧ L ま 0 が た。 て物 な 兵 た。 隊 11 そ 折 な のうち 兵隊 資 さ ŋ が 紙 タ W さ な か 0 才 Þ  $\mathcal{O}$ < 5 W ル 手 7 途  $\Box$ 思 知 切 達 な は 紙 に

写真はこれきりです。 年 席 を 小 学 組 同 です。 校の U ゆ うせず』とい 卒業遠足で善福 男子とは教 室 う 寺に 時 t 代 別 でしたから六年生 行きま で す。 した。  $\neg$ 男女 七 私 歳 は に 女 員 L 子  $\mathcal{O}$ 7 六



第三小学校卒業遠足善福寺水道施設前



東京府立高等家政女学校耐久遠足記録

は 津 ŋ L ま ま 省 田 す。 電 沼 L 強 た。 が \* 飯 春 好 2 そこ 能 に き だ 蕨 や小 ま で 保 0 で は た 土 田 ケ 毎  $\mathcal{O}$ 急 谷 七 で 年 に キ 東 乗 青 口 五 京 梅、 ŋ 月 府 논 \_ \_ ま 秋 立. 春 は 高 L た 八 等 日 が 部 王 月 家 子 に 政 行 座 まで三七 耐 女 学 間 き 久 には、 遠 校 に 足 帰 丰 が 進 n 口 あ 学

当

な

 $\mathcal{O}$ 

あ

三  $\bigcirc$ キ 口 は 歩 Ś  $\mathcal{O}$ で 大 変でし た。

見 飛 行 た で ŧ 道 お 0 W 0 ま たの で来 た、 を 友 で お す 達 知 稲 まし で 女学校 が、 6 荷 す。 そ さ な 1  $\mathcal{O}$ W こっ では す ŧ 合  $\mathcal{O}$ ると 0) 宿 宿 坊 ち で 修  $\mathcal{O}$ 練とい で す 力 帰  $\mathcal{O}$ 合 方 カコ ŋ 5 が 0) 丰 宿 う を 色 ことで 近 科  $\mathcal{O}$ 道 練 L て 馬 ょ 目 軍 す。 区 心 服 が と 言 0 身 あ を 着 を 関 私 り た う 町 は 鍛 ま 吉 兵  $\mathcal{O}$ に え L 祥 る た。 隊 で 住 寺 لح さ W 0  $\lambda$ 1 で な 11 東 て う 伏 が  $\mathcal{O}$ 11

 $\mathcal{O}$ 

 $\lambda$ 

で た 中 0) すごい 島 「そこを でし 飛 行 剣 ょ 機 う。 通 幕 製 0 作 で 7 怒ら そ 所 は  $\mathcal{O}$ n れ 11 以 出 け て、 来 入 な  $\Box$ \ \ \ だ とても 中 0 島 さ た  $\mathcal{O}$ 0  $\mathcal{O}$ 怖 周 さと行 で ŋ 1 す。 思い 12 は け を 沂 軍 事 寄 L ŋ 機 ま L ま 密 た。 せ だ 0 W

慰 問 (学校二 幸 袋を送っ 走 前 に で 年 な 待 た ŋ ち 生 ま 合 兵 隊 わ さ せ 兀 歳 を W が L  $\mathcal{O}$ て 訪 初 ね 美 夏 7 0 好 こと 野 来 てく と で 1 す。 う れ 店 ま で L た。 あ 番 最 W 4 新 初 0 宿 に

> 箱 1 印 る 女学 内 刷  $\mathcal{O}$  $\mathcal{O}$ 中 で を 閣 校 ま す 手 印 が で 伝 が 刷 夏 調 1 局 休 ベ 夕 ま で 4 5 方 L  $\mathcal{O}$ れま 畄 た。 円 間 ると は、 札 じた。 朝 き 勤 軍 は 印 票 労 身 刷 奉 体 局 潚 仕 に 検 州 を 入 玉 査 が る  $\mathcal{O}$ ま لح あ 通 し き 0 貨 て は  $\mathcal{O}$ 王 何 員 に な 子 お 弁 تلح に

友達 十六 か カ 昭 な 長 近 と 和 付 参 官 と不 八 け 列  $\mathcal{O}$ ŧ L 玉 安になっ ま 葬 L 九 な L が 四三 た。 日 11 比  $\mathcal{O}$ たことを覚えてい で 沢 谷 す。 年六 Щ 公  $\mathcal{O}$ 袁 人 で 月 が あ 五 れ ŋ 出 日 . て ま に、 カ 5 Щ L ます。 どう た。 本 連 長 合 女学 な 官 艦  $\mathcal{O}$ 隊 0 校 ち 棺 Щ に B  $\mathcal{O}$ 本 う な お 五.

る 戦 て 範 家は 争 教 教 員 学 師 に とら 期 少 養 に なくなっ で 成 な 中 ŋ れ 所 て 退 12 たくて 入学 L L てきたのです。 ま ま らうし、 じた。 しました。 女学校卒業 畳替 職 人 水後に、 さ え L をす んや カコ し、 る 小 東 ょ 僧 家 久 ささ j  $\mathcal{O}$ 留 な W 事 米 情 余 が  $\mathcal{O}$ 裕 次 青 ŧ 年  $\mathcal{O}$ Þ あ あ に 0 師

父が さ 的 は 日 れ 物 飛 産 父 が とて 資 た 厚 行 合 生 畳 が 機 £ 成 豊 袁  $\mathcal{O}$  $\mathcal{O}$ 喜 酒 か エ 付 注 文を ん で、 近 を ン でく ジ 飯 受け 盒 で事 お ン れ を造 酒 つ は ć ま B 務 L んごう 1 鮭 る  $\mathcal{O}$ た。 た三 軍 缶 仕  $\mathcal{O}$ 需 事 配 に 鷹 工. 場 就 航 に 給 き で が 空 0 す。 ま  $\otimes$ あ て ŋ L 現 そ た。 ま 在 持 0 L  $\mathcal{O}$  $\mathcal{O}$ た。 7 た 鷹 帰 8 比 航 る 配 市 給 較 旧

昭 九 九 兀 四 年 月 に 中 島 飛 行 機 に 空 が

な な 島  $\mathcal{O}$ 1 味 あ 29  $\mathcal{O}$  $\lambda$ カ ま 方 大 公 0) 勝 7 詳 に ケヤ 嵐 ŧ 方 たこ で せ  $\mathcal{O}$ 0 あ は た、 でブランコに乗って遊んだりしていました。 で 0 高 1 届 で で 丰 ح よう。 きませ 射 ま した。 ラバ すから、 勝  $\mathcal{O}$ 砲 は せ 向 な 0 は 知 ん。 こうか た ラと 仕 ん。 わ W 0 事をし 空襲 カン ラジ か 7 どこに とし 爆 年も 下 り 1 ま  $\mathcal{O}$ 弾 ま オ 若 方で В せん なくても済む 報 を か す  $\mathcal{O}$ 爆 落とし が、 が 29 言 カコ 大本営発表 弾 ポ わ 鳴 でした。 が 0 たの ない ンポ が 0 わ 落 7 て  $\mathcal{O}$ ŧ 5 で  $\mathcal{O}$ < 11 0 って井 です。 被 空襲 7 そ L < て飛んできて、 6 は れ て 害  $\mathcal{O}$ 1 毎 t 状 る 以 7) は  $\mathcal{O}$ るだけ 見えま ただ、 日 況  $\mathcal{O}$  $\mathcal{O}$ 上 怖  $\mathcal{O}$ 頭 カュ  $\mathcal{O}$  $\mathcal{O}$ 11 情 لح ょ 報 だ  $\mathcal{O}$ わ 近か 報 は で 本 う 道 0 た。 中 思 В に < 5 が 宿 な た

じ 警 私 け 1 新 あ に 聞 報 Þ 0 れ 昭 和二〇 を知 深 で が な が が 部 4 Ł 読 屋 あ 11 あ な 付 洮 カュ は 6  $\lambda$ 0 るく げ て、 な 1 な とガ 階 L 空 7 5 か 九 四 襲 れ 5 窓 0 屋  $\mathcal{O}$ たら だっ 根 ま るように タ を 東 ガ 開 が 向 五 L  $\mathcal{O}$ た。 タ 東 た 明 け き 震え るさ 京に 年三月一 5 た で 5 オ L 家 入 た。 て 東 住 な 0  $\mathcal{O}$ ]  $\mathcal{O}$ V) 中 て んです。 庭 バ  $\mathcal{O}$ ん  $\bigcirc$ 三 まし 空 でい で ŧ に 1 日の東京大空襲 防 『こ つ が 月 助 を た。 すご たとは 着 か 空 九 だ 壕 日 V) 5 В か ま は 靴 11  $\mathcal{O}$ まで 言 29 明 夜 5 せ あ を え 履 るさです。 中 爆 ん。 ŋ が 来るん 弾 ま 来 に ま 11 空襲 せ は が た て た 窓  $\lambda$ た

> ました。 7 家 火 が 0 11 た 5 井  $\mathcal{O}$ 頭 公 袁 で Ł 逃 げ ょ う 7

ち

ツ 庁 女学校の に プで片づ 勤  $\Diamond$ お友 7 け 11 てリヤカ 達 ま か た。 6 戦 に 後 大 空 に 乗せて運んだそうです。 聞 襲  $\mathcal{O}$ 11 た 話 翌 日 で す。 焼 け た 彼 死 女 は 体 東 を ス 京

都

コ

連隊に は 二 〇 る て つをご馳 そ  $\mathcal{O}$ 1 ね 、う気持  $\mathcal{O}$ 黒 に 入 隊 歳 焦 年 げ 走 私 上 で  $\mathcal{O}$ 陸 は 5 五.  $\mathcal{O}$ 陸 てくれ ま 軍 月 人 は 平 が 第三 に 戦 L な ·気で死: た。 闘 カ たくさん転 師 八 中 た 0 歳 た に 九 寸 体を片付けていたの で結婚 わ。 歩 顔 力 歳年上 月 兵 面 (第二九 後 が 自 に ってい 分の しまし 被 に  $\mathcal{O}$ 弾 中 気持ち 玉 旅 人 るの。 で た。 ま 上 寸 L 海 静 た。 新 ŧ  $\mathcal{O}$ 出 よ。 でもど 宿で 呉 夫の お 歩 鼻 淞 兵 カン 繁 あ 0 第 L ゚゙ヷ 手 太 < W 11 兀 前 4 な 0



慰問袋の返礼に届いた写真

す。 問 で W 袋 で 弾 を送 返 L が 事 た。 <u>لے</u> が 0 来 ま 7 私 ると <  $\mathcal{O}$ ŋ れ 慰 貫 ま た 間 通 た 人 袋 L 手 に は な 紙 は か を 全  $\mathcal{O}$ 0 書い 員 頃 た に 12  $\mathcal{O}$ て : お 届 で 礼 1 命 ・筆まめ 状 た に を  $\mathcal{O}$ 別 書 で 状 な す。 11 は 人です。 たそう あ 夫 ŋ は ま で 慰 せ

今で 行 協 7 振 は 7 3 宿 に 全 です。 勤 1 Ŋ 泊 夫 和 たと あ 服 7 換 が 0 は  $\Diamond$ は 配 召 るところに 算 ょ 涂 伊 7 き す 装 集 \* 給 か 豆 4 る 解 制 0  $\mathcal{O}$ ま 0  $\mathcal{O}$ だ لح 月 た 仕 帝 L 除 た。 月 給 ょ に 0 事 山 ううで なっ た は 私 収 は を 閣 あ  $\mathcal{O}$ 請 大 は 五. 休 す。 7  $\bigcirc$ 仁 暇 干 る に  $\bigcirc$ け  $\lambda$ 円 負 ホ 満 ン  $\bigcirc$ を で لح <u>~</u>° だ テ 私 州 お 万 0 姿 な す。 て 膳 円 が ル 0 12 でし て ぐら  $\equiv$ あ あ に 11  $\mathcal{O}$ 鷹 は た 離 新 る 夫 لح 5 婚 た 沢 は 航 満 11 n が 思 Щ で 八 空 で 旅 州 L  $\bigcirc$ < す。 塗装 う  $\mathcal{O}$ 行 料 1 L に れ ま 理 ょ  $\bigcirc$ 事 たい 行 が う 円 務 関 牡 L L た。 で . 丹 員 き 並 カュ 東 11 そ 江 L を 軍 ま 新 W くう |支店 た。 婚 夫 で 物 ゃ L た。 は 0 派 \* 資 旅 11

見 島 ま し わ た。 え 二人 せ カ ま 5 7 で 飛 L  $\neg$ どう た。 ホ 自  $\lambda$ で テ 分 ば か 来 ル  $\neg$ あ、 た  $\mathcal{O}$ 0 カン В 庭 4 り を W 東 29 贅 散 な 京 が 無 沢 が 歩 富 事 空 L 士 L で 襲 て 7 Ш さ 1 11 を 1 ると て ま れ 右 す る 11 12 こきに、 7 ょ 旋 らうにし 0  $\mathcal{O}$ 口 て、 カュ L 7 な 7 لح 両 行 IJ لح 祈 手 < ア 思 1) を  $\mathcal{O}$ ナ ま が 諸 い 合

れ か 5 夫 は 故 郷  $\mathcal{O}$ 静 尚 県 沼 津 カ 5 汽 車 に 乗 長 崎

> 丹 務 県 江 を 仙 12 引 崎 着 き カン 11 継 6 た VI 船  $\mathcal{O}$ だ で は六 5 韓 東 玉 京  $\mathcal{O}$ で に 釜 L 戻るこ Щ に 渡 لح り ま な L た。 0 7 満 11 ま 州 L 塗 装  $\mathcal{O}$

> > 牡 事

月

えて よ た。 め、 歳 が 八 と 島 そ 投 中 に 月 П なる 根 央  $\mathcal{O}$ 下 止  $\equiv$ 線 カゝ さ 課 5 8 娘 鷹 で れ 長 名古 して教えてくれ 広 さ ま 航 さ 島に んと 空 L W 一で上 屋 た。 が ま 出たそうで 生  $\begin{bmatrix} \ \ \ \ \end{bmatrix}$ 司 で ま 課 出 だ 長 れ れ た さ 0 7 ま は ば た 京 W 誰 す。 都 カン は 課 た に り 長 カ 故 ŧ さ 幸 5  $\mathcal{O}$ 郷 言 息 1 Щ 12  $\lambda$ 0 家 陰 子 残  $\mathcal{O}$ 7 族 さ 故 本 L は  $\lambda$ は 線 た 郷 11 を 無 に 奥 に け 事 探 さ 乗 新 型 な で n す W L 換 た 爆

七

弾

弾 た Ł ル ょ。  $\mathcal{O}$  $\mathcal{O}$ は 広 ところで爆 人 7 が ツ 島 チ 駅 死 箱 ん に ごぐら 降 で 発し ŋ L たとき ま 1 たんだそうだ。 0  $\mathcal{O}$ た:。 大きさで、 は ね : そりや、 足 広 が そ 島 す 恐ろ れ <  $\mathcal{O}$ だけ 上  $\lambda$ 空 だ で 何 ょ こと 何 百 + メ 新 型 万 人  $\vdash$ 爆

そ 澄 L ス 空 れ \* た ま が 同 じ で 5 が L あ 戦 ま 月 で る 死 は 続 L 0 争 た。 と W が 解 1 1 で 終 除 7 五. L わ さ T 雑 うことだ 日 ま ナ れ 0 音  $\mathcal{O}$ る ウ 0 た が 朝 シ 多 た  $\lambda$ カコ لح スさ くて 5 人 だ 0 ラジ た たの 0 1 内 5 う n 7 で、 に わ 内 た 容 才 で は 容 は カン  $\neg$ 今 悪 家 り は ょ  $\neg$ ま 聴 夜 < に 正 11 L き か わ 1 午 思 た。 に 6 取 カン 7 れ は り 放 重 11 ま 送 ま 遠 ま 灯 大 12 L 火 せ た た 管 耳 戦  $\lambda$ ユ が 地 制 で 1

戦 争 今 が 夜 か 安 れ ば 心 夫 t 7 満 眠 州 ること カコ 5 帰 が で 0 `きる、 7 来 てく 命 れ が る 助 か لح 0 た。

ま

L

た。

です。 員 う に 7 八 ベ  $\mathcal{O}$ 六 口 入り くソ シ 降 日 噂 ソ 師 夫 と大書きさせ ア 伏 午 連 は が 寸 まで ま 語 連 終 あ す 前 軍 歩 り、 る 兵 が 軍  $\mathcal{O}$ 戦 〇時 戻り、 た。 まで できる部 宣 間  $\mathcal{O}$ 七 部 戦 戦 際  $\stackrel{\cdot}{\equiv}$ 戦 車 布 九 下 日  $\mathcal{O}$ て、 を 本 闘 部 告 連 奉 八 軍 率 天 は 分 隊 後 隊 月 下 堂 لح 八  $\mathcal{O}$ が 11 を 続 に 戦 満 々 11 7 参 牡 シ 11 召 日 لح べ 謀 集 に た たそうで 丹 州 収 0 街 O容 リアに送 長 7 江 3 塗 道 で 方 牡 装 所 が 11 れ 本 を 4 を 日 た 7 丹 面 す。 歩 シ 脱 章 社  $\mathcal{O}$ 1 江 に 1 口 走 ŋ 旗 で  $\mathcal{O}$ ま 省 労働さ でと白 て吟 そ す。 L 進 辿 旗 L 八 に り たそうで れ 軍 た 面 着 爾 旗 カコ 終 を 通  $\neg$ 浜 せ とを 遅 満 5 戦 九 11  $\mathcal{O}$ ると 鉄 後 5 日 た 収 第 にそう す。 従 ハ 容 挙  $\mathcal{O}$ せ 未 ル 業 11 所 げ る 明

n

込 ま 止 せ 引 揚 L ま 7  $\mathcal{O}$ 昭 た 5 陸 げ 和 弾 0 軍 が な ま 第 心 た。 労が た 弾 W 弾 病 傷 で す。 は 九 院 端  $\mathcal{O}$ 町 初 兀 畫 を 正 六 が 紹 吉 な 医 年 者 祥 顔 兵 脳 介 年 寺 が  $\mathcal{O}$ に L で 八 7 は  $\mathcal{O}$ 腫 لح 口 きに t 治 宇 れ 月 0 て せ 都 に ら 上 な 被 助 宮 が 舞 11 か ま 耳 0 弾 鶴 1 て目 لح 鼻 港 5 L L な た。 科 た いう に B で 古 復 と言 診 に 傷 員 放 と鼻 置 7 を L ŧ 悪 ま わ L n て 5 水 化 L た。 牛 ま が さ お 11

> んで L た。 す。 で 戦 t 後 手  $\mathcal{O}$ 術 食糧  $\mathcal{O}$ た 難 め で に 米なん 入 院 す カゝ る に は 賄 ŧ あ 用 ŋ  $\mathcal{O}$ ŧ 米 せ が ん る

まし 5 止 5 仕 た。 Ó 方  $\emptyset$ 1 農 5 ま が れ L 家で な 闍 た。 て、 米 1 頭を下げてな  $\mathcal{O}$ お米は押 Þ で \* れ 私 6 やれと思っ  $\mathcal{O}$ を手 着物を持って夫と東北 収されてしまったのです。 んと に 入れ て帰るな か るた 着物とお 途  $\emptyset$ です。 米 穴を交換 本線 察 あ 官 に 2 ち 乗 に 呼

ŧ

0

び

です てし らった俺を、 て、 夫は ま か 俺 すごい らお 敵 は 弾 お 上り . 米 国 が 貴 剣幕 は 入  $\mathcal{O}$ の汽車 様、 0 た 返してく たま で  $\Diamond$ 罪 に ま も終わってしま 歩 人扱いする気かっ 満 ŧ 戦 州 れ ま 引きませ ってたんだ。 で戦ってきたんだ。 せ ん。 そ ん。 のうち まし 警 金 察 鵄 た。 勲 に  $\mathcal{O}$ 顔 日 人 を が Ł ま 打 仕 で n 事 た

夫 住 7 れ ところが 11 せ てく は 職 11 た 途  $\lambda$ 方に ま で さ 頑 です。 す。 固 れ  $\lambda$ L 暮 た。 ない た が で ん ħ す ر کی なら、 です。 とて てい カコ 5 れ 晚 Ł た 泊  $\neg$ うち 本当 持 立 5 あ 8 近 n 7 0 派 て に ŧ が 12 所 な 来なさ 行きなさ らつ  $\mathcal{O}$ とうござ 有 お 寺 ŋ お て、 · で境 難 寺 1  $\mathcal{O}$ <u>こ</u>と Ċ 住 内 11 翌 ま 朝 0 に 職 す で 2 帰 大 て さ て き L ろうと 声 W た。 な を が  $\mathcal{O}$ お 米 碑 か Ū を 言 で が け 泊 たら ŧ 持 建 7 ま 0 る

ず とあ とに な 0 7 調 べ ま L た ら、 雲巖 寺 う 松 尾

岜 蕉 木 が 奥  $\mathcal{O}$ 細 道 で 77. 5 寄 0 た お 寺 だ 0 た  $\lambda$ で す。

啄 き 0 0 き 庵 V お は やぶらず 夏木立

ろう が で きた 意 L 味  $\mathcal{O}$ な は 啄 11 有 木 り こうし 鳥 難 £ 徳 ことだ。 7  $\mathcal{O}$ 和 高 尚 11  $\mathcal{O}$ 和 尚 修  $\mathcal{O}$ 行 結 L た  $\lambda$ だ 庵 山 を 訪 居 だ ね 松尾 け ること 世 は 蕉 破

12

な

物

ぎ

仕

任 頭 た あ せ  $\mathcal{O}$ き 7 V) か 0 ڪ لح ま ŧ と 警 せ L いうことだっ n 察 W カゝ ま  $\mathcal{O}$ 5 せ 人 ん。 ŧ 復  $\neg$ 。ここは 員 で たか 兵 Ŕ  $\mathcal{O}$ Ł 徳 境 夫 L 遇  $\mathcal{O}$ は れ 高 怒 を ま 気 11 9 せ お た  $\mathcal{O}$ 寺 き 毒  $\mathcal{O}$ り に 謝 思 住 職 0 る さ 気 て は < W 毛 れ に

さん た が 陸 駄 が 軍 目 執 第 で 刀 L 病 た。 てく 院 で中 れ 回 ま 国 目 戦 L は た 線 鼻に カゝ 6 メ 復 口 ス 員 目 を入れ、 は L 右 てきたとい 頬 まし を 切 た。 開 う L ま 軍 医 L

> B る

n

経

大

きま 体 燃 ら 兵 ま 隊 皮 中 え 横 陸 さ 夫 が 7 に 膚 軍 た は 焼 な を 病 1 ん 移 け る 院 0 奉 た て 植 腕  $\mathcal{O}$ 口 だだ 目 安 11 す が 傷 殿 る n 病  $\mathcal{O}$ る な た 手 兵 者 た 11 **\*** 若 隊 術 は 8 むご 7 鼻 で さ 鼻 11 や耳 上 兵 ん Þ 隊 耳 か に 唇 さ 学 が 0  $\mathcal{O}$ 飛 に たで 裏  $\lambda$  $\mathcal{U}$ 自 校 な カゝ は 込 が 11 分 す。 空 5 兵  $\lambda$  $\mathcal{O}$ B 本 で 襲 隊 腕 当 さ 御 12 0 膝  $\mathcal{O}$ 12 真 な 肉 W か 影 5 弾 気 0 を を  $\mathcal{O}$ を た 付 下 摘 毒 守 لح け  $\mathcal{O}$ が 出 で き た 腕 な 0 に ま て か で VI

そ れ か 5 夫  $\mathcal{O}$ 故 郷  $\mathcal{O}$ 静 出 で 煮干 B 鰹 節 な ど  $\mathcal{O}$ 乾 物 を

> 恵  $\lambda$ 屋 屋 入 ま と を を n れ か 開 L て、 て、 な き ま ると ま L 東 孫 た。 L 海 思 は た。 道 九 夫 11 線 人 無 ま 婦 で L で 運 曾 た。 文 働  $\lambda$ 孫は七人です。 か で V お 5 7 東 資 京 カン  $\mathcal{O}$ げ 出 金  $\mathcal{O}$ Ź を 発 商 ま 貯 で 店 で L  $\Diamond$ に た 兀 7 卸 吉 人 が す 祥  $\mathcal{O}$ 頏 張 寺 子 تلح で う れ ば 乾 担

変 な  $\mathcal{O}$ で 験 あ だ ŧ カコ は を  $\mathcal{O}$ 若 0 う 楽 時 0 た れ た 代 L 11 0 に か 人 わ て 12 け 生 11 0 思えます。 ľ き で た 継 す。 青 B た げ 春 な な 人 自 時 11 は 11 代 4 分 で  $\mathcal{O}$ をこう  $\mathcal{O}$ で W L す。 な苦労し 八 ょ う。 五. 年 け L 0 7 辛 れ ま تلح 伝 か 生 え 0 4 L ŧ ることが た。 た戦  $\lambda$ ま な んざ そう 争 私 や だ で け そ き う が



摘出被弾と金鵄勲章



お正月、吉祥寺本町の渡邉乾物店前

※ご本人からの聞き取りにより作成しました。

### \*1 恤兵(じっぺい)

物品や金銭を寄贈し戦地の兵を慰めること。

#### \* 2 省電

「省線電車」の略。 戦前、東京近郊の通勤電車の愛称として使

#### \* 3 関東軍

われた。

中国遼東半島は関東州と呼ばれており、満州に駐屯する日本陸

## の独立守備隊の呼称となった。

軍

4

協和服

戦前の国民服に似た服。首から紐をさげ、その先端は満州国の

# \*5 灯火管制(とうかかんせい)

象徴である5色

(黄色、

紅、

藍、

白、

黒

の房になっていた。

米軍機の空襲時、地上の明かりが標的にならないように家々の

灯に黒い袋をかぶせた。

電

### 6 闇米 (やみごめ)

終戦前後、食料や物資は配給制となった。公式なルートではな

、米等の取引は犯罪行為だった。

11

## 7 奉安殿(ほうあんでん)

天皇・皇后の写真を保管してある場所。戦前は各学校にあった。

#### 九 飛 行 武 友

#### (王子市 清 水 ず 正 さゆき

どし はる なごやか 実 感 づ 係 が を結 業 多 戦 時 て な カゝ り 務 < 過 中 んでで 1 0 が に 語 ことや ぎ な た。 ら、 0 携 6 雰囲 去 軍 0 れ きた会であ 需 武 0 ょ た 7 た当 気 家 < 私 工 蔵 場  $\mathcal{O}$ が 達 る。 野 族 P 勤 給 な 時  $\lambda$ は 友会は 務  $\mathcal{O}$ カゝ 交友関係 ば 中 は ことを で 0 男 島 た。 大変 語 女 飛 そうし ŋ を 行 合つ 問 厳 私 ま 機 遠 た、 武 達 わ L たり た は 1 ず 蔵 仲 S 同 野 L 常 L る 時 0 間 ば 製 た。 5 に 里 に L 作 達 なっ 0 明 ば 1  $\mathcal{O}$ 所 こと こうし こと る 半  $\mathcal{O}$ 希 望 か 1 徹 給 など、 が し 職 夜 与  $\mathcal{O}$ < た 場 関 な 4

#### 戦 時 体 制 の 道

中 年七 は 本 忽 軍 が 昭 月、 と中 に 5 戦 和  $\mathcal{O}$ 中 入学 + 時 昭 支 玉 体 玉 和 全 那 制 軍 L 年 十三 地 た。 が 大 . 四 と突 に 陸 衝 月、 年 拡 勉学 突、 中 入 が に 私 り、 国 は 12 VI は 玉 第 7 わ 東 全 家 Ф  $\mathcal{O}$ 京 面 歩 北 0 総 る 府 戦争と変わって を踏 た。 動 蘆 京 <u>\f</u> 郊 員 溝 第二 外、 法 4 欧 橋 州 が 事 出 商 でも 蘆 施 件 L 業学 行 が 溝 7 され、 間 日 お 橋 V き、 校 本 付 £ 0  $\mathcal{O}$ 近 な た。 戦 八 同 日 で い 盟 本 火 王 日 口

> に 出 玉 L て、 た。 戦 F 時 イ 色 玉 ツ 日 が 民 本 が 濃  $\mathcal{O}$ で ポ 日 は なってきた。 常 支 ラ 生活 那 ン F 大 陸 で  $\sim$ ŧ 侵 に 種 お 攻 々 け L る  $\mathcal{O}$ 第二 戦 制 闘 約 次 が で 行 多 世 < 界 わ れ  $\mathcal{O}$ 大 犠 戦 牲 が 日 者 勃 が 発

<

境 私 は 戦 達 に 0 時 学 は 色 軍 校 に . 厳 生 カコ しく 活 5 ŧ 配 勉学や体育 影響を受け 属 将 校 が 派 るように 遣 に され 励 む な なっ カゝ 軍 で、 事 教 練 周 が 用 行  $\mathcal{O}$ わ 環

ŧ 作 で れ  $\mathcal{O}$  $\mathcal{O}$ 学 校 中で るよ 業手 とに 1 たと思う。 層 うに Ŕ 伝 近  $\mathcal{O}$ 隣 充 1 な 実 私 に 0 農 が 0 達 ŧ た。 は 動 家 は 学 カ 0 員 \_ z 徒 手 5 商 伝 本 れ れ た。 で 来 るように 11 は  $\mathcal{O}$ 教 勉学に、 官 ま 公署 た 練 なっ 同 振 施 時 興 た。 設 に 隊 所  $\mathcal{O}$ 勤 を 懸 そう 労 清 結 命 奉 掃 成 取 L 仕 た ŋ 工  $\mathcal{O}$ 多 場 名 訓 忙  $\mathcal{O}$  $\mathcal{O}$ 練

 $\mathcal{O}$ が 生 戦 ぜ 活 政 街 争 策 中 1 は は たく に 12 その 沿 目 層 に って突き進 は 厳 後、 敵だ」 つくようになった。 L さ 中 を増し など、 玉 全土に  $\lambda$ で てきた。 行っ 志気高 拡 た。 大 3 揚 玉 れ、 中  $\mathcal{O}$ 撃ち が た 私 時  $\Diamond$ て 達  $\mathcal{O}$  $\mathcal{O}$ L 政 ス 玉 B 府 口 民 Þ ま 1  $\mathcal{O}$ ガ  $\lambda$ 日 軍 部 常

需 年 カコ 戦 毎 な 工 争 ŋ に 拡 早  $\mathcal{O}$ 拡 L < 大 カ 大 強 化 5 化 に伴う国 中 さ れ 多 島 摩 飛 7 地 行 1 家 区 機 0 総 た。 に (株) 動 武 軍 員 そ 需 蔵 体  $\mathcal{O}$ 産 野 製 制 最 業 が 作 大  $\mathcal{O}$ 所  $\mathcal{O}$ 進 強 化 航 出  $\mathcal{O}$ さ 進 空 が 機 れ 出 は 関 を か る 中 5 係 4 で 軍 れ

のであった。

### 中島飛行機㈱へ入社

軍 あ たような  $\mathcal{O}$ 他 · 需 ま 昭 玉 和 12 ŋ 民 産 同 業最大手 疑 十 総 六 窓 問 Ł 動 の三名も同 員 年 を  $\mathcal{O}$ で に 1 のご時 だった中 だく者も あ 入 ŋ 0 た。 じく入社が決まっていた。 世 私 島 とあ 達 な 殆 飛行 んどの カュ 五. って、 つ 年 機(株) たような 生 者  $\mathcal{O}$ ごく 入 が 就 社 軍 職 が決まっ 気 需 自 は 然 が 産 戦 業 す 時 に る。 を 決 体 た。 指 8 制 私 5 名 私 は れ L 色

と思っていた矢先、誰しも予期しないことが起きた。ところがいよいよ来年(昭和十七年)三月には卒業だ

昭和十六年十二月八日、大本営陸海軍部から

帝国陸海軍は今八日未明、西太平洋において米英軍と

戦闘状態に入れり」

り、  $\mathcal{O}$ 発 表 米 がが あ 英 打 0 た。 0 べ し ! たちまち  $\mathcal{O}$ 声がとび 日 本中 か か 5 った。 興 奮 0 渦 が 巻 き起

あ + ったが 日 私 達  $\mathcal{O}$ 卒 卒 業 業 式 4 いがとり は W 急 な再 遽 会を 繰 行 上 わ げ 約 れ た。 と決 てなっ り、 私の 昭 同 か 和 級 L 十六 生  $\mathcal{O}$ 母校 は 年 丁 をあ 度 + 百 とに 月二 名 で

そ 年 月 で あ 私 が た 中 島 飛 行 機 (株) 入 社 L た 0 は 꽢 昭 和 + した。

員との 二十名 た。 間 憶 があ 校 は 尞に 社 0) 私 る。 は第二 式 連 で、 グ ラ が 絡 宿 行 通 役 泊 をすることに 班 勤 K わ L だ 者 れ 0 て لح 班 0 た 般 寮生 たよう 長  $\mathcal{O}$ を命 は、 教 養 活 なっ ぜら 者半 と な 武 気 か 蔵 た れ、 が 野 実習を受け Þ 位 が 製 す だっつ る。 会社担 作 結 所 た。 構 新 東 忙 当者と新 る 方 入 こと 最 社 に L か 当 初 員 に る 0 は  $\mathcal{O}$ 入 社 た な 約 青 凋 0 百 年

ことの たあ 実習の旋 ر ک な 何 7 私 盤 口 は、 カゝ 0 . 社 歌 取 とまどうこと 扱 0 1 練習をしたこともあ に は、 機 が 械 多か など一 0 た。 度も 0 実 取 習 ŋ が 扱 0 た

光燦(さん)たる旭日の

朝雲高く 射すところ

躍進日本の前衛と

文化の翼 鍛えゆく

われ等ぞ 武蔵野製作所(以下省略)

この社歌は今でもよくおぼえている。

養 系男子) を対象とした精 あ また会社ではこうした実習 団 1 に という会の く小雪のちらつく東伏見道場 主導で実施 神 され 修 0 養 他に、  $\mathcal{O}$ 私 研 修  $\mathcal{O}$ 場 全 ŧ 社 合 行 員 は 0 て 主 月 1 た。 に 事 務 修

愛なき人生は暗黒なり… 人よ醒(さ)めよ 醒めて愛に歸れ



### 給与課

給与 配属され 澤 屋 半月の 1給与係1 課) Ł かなり広く、 であ 実習等が 長とい 私 0 た。  $\mathcal{O}$ う 配 終って、 編成 戸 場 属 先は 田 所 であった。 [労務課 は 東 総 新入社 門 務 長、 部 12 労務 近 員 V) 松 んはそ 浦 事 課 れぞれ 勤 務 給 労 与 棟  $\mathcal{O}$ 長そ 各職  $\mathcal{O}$ 階 れに ち 場 Ē

であ 給 与係 って、 は 人員も多く、 何 万 人 ŧ 0) 従 五十名位だったと思う。 業員 の給与 計 :算を担 す る け

黒

部

Ł  $\mathcal{O}$ 井 が 両 ピ IJ 澤係 印 班 ピリ 象 長 的 はとても 長 は で (あった。 た感じが 仕事にはきわめ ソ フ 1 L 7 な 感じ 11 て厳格 た が、、 で 仕 事 その な方で、 を きり 反 面 周 廻 小 ŋ 7 林 は 11 11 た 柚 0

った。 すぐ後、 張 ら 毎 切 は 私 ってやった姿が目に浮 日 t 体  $\mathcal{O}$ 朝 4 指名さ 操 礼に  $\lambda$  $\mathcal{O}$ リー な は全課 れ カコ た ダ 5 が 1 1 員 は 学校 各 が ボ カコ 係 体 参 \$ 時 操 か 加 代 らの لح L 陸 11 交替 上 わ 伝 部 れ 達 だっ 制 た 事 で、 項 柔 た今井 軟  $\mathcal{O}$ 給与 体 お 操 話 係 を L カコ B  $\mathcal{O}$ 

工 給 際 であ  $\mathcal{O}$ 仕 与 用 事 発 係 動機 をな 語 0  $\mathcal{O}$ な 主 ま なぜ な どの け そ 仕 る  $\mathcal{O}$ · 事 か た 人 各 は 「怠」 8 は 職 場 11 月 末近 数 に行 な が 万 11 人 < が  $\mathcal{O}$ に て呼ばれていた) 従 なると タ 工 業 イ 員 員  $\Delta$ 機 力 さ  $\mathcal{O}$ 械 給 W 与 ド  $\mathcal{O}$ 勤 焼 計 を 調 怠 入 算 لح 調 ベ る 支 査



給与課の人たちと西工場の屋上にて(昭和18年10月)左端が清水氏

れ

5

れ

ない

歌で、

·ある。

こうした連

日

の緊張

0

な

か、

百

数

+

名と

いう

大

世

帯

 $\mathcal{O}$ 

藤

隼

中戦闘隊

みくにの

子

供…」

など、

何

+

年

たっても

忘

<

まれ

に

は小

さな声

なが

5

軍

歌

を歌ったり

したこと

t

各

人

が

仕

事のことや趣味、

ふる里のことを話

したり、

۳)

あ

0

た。

5

なみに当時

 $\mathcal{O}$ 

歌

とい

えば

勝

利

 $\mathcal{O}$ 

日

ま

で・

加

ぎまで残業することが

珍しくなかった。

夜の夕

食のとき

そ

の後、

実

働

給

奨

励

金

残

業

**米手当等** 

 $\mathcal{O}$ 

計

[算と控

除

金

等

人

毎

に

出

勤

欠

勤

残

業

時

間

等

 $\mathcal{O}$ 

伝

票

を

作

成

L

た。

向

1

て支払

いをしていたが、

常に多忙であっ

た。

そ

のため一

か

月

のうち何

日も残業した。女子も八

時

過

 $\mathcal{O}$ 

差引をして、

最後に賃

金

 $\mathcal{O}$ 

袋詰めを行

V.

各

職

場

に

出

労務課 周 であろう。 **今**の 囲 出として参 0 は 頃、 関 杉 による鎌 東バス) 林 中央線三 がつづき、 加 者 倉 が吉祥寺駅から北裏まで通じてい 0  $\sim$ 鷹 0) 心 駅 行  $\mathcal{O}$ 農 楽が からエ 奥深くきざみこまれ 家が 催 点 場 されたが 在 してい 通う道 た。 楽 は てい 砂 L 進 か 利 運 ること 道 0 たが バ た思 で、 ス

と合併 昭 和 十 八 武 年 蔵製作 + 月、 所となっ 武 蔵 野 製 た。 作 所 所長も澤守源重 は 西 隣 ŋ  $\mathcal{O}$ 多 摩 郎 製 所 所 利

用

者

は

少なかった。



工場から三鷹駅への帰り道での給与課の人たち。周囲は一面の杉林でし た。 (昭和 19 年春) 後列中央が清水氏

て

は

大助

か

り

で

あ

0

た。

隊員

*Ø* 

村学

遠

か

5

き

た女

性

社

員

3

 $\lambda$ 

は

大変目

<u>\frac{1}{1}</u>

0

存

在

で、

仕

事 Ш

のことや

同

僚

課

 $\mathcal{O}$ 

事

務室も

西

工

場

での

業務は

短かる

やがて元

0

東

工 与

戻っ

た。

隊

員

 $\mathcal{O}$ 

世話などして

7)

たことが今でも目にうか

*\$*;

給

皆さん

は

仕

事

 $\mathcal{O}$ 

覚えもよく、

すぐに戦力となり給与

課

た。

やが

て近

隣

 $\mathcal{O}$ 

女学校

から

女子

挺

身

隊

とし

7

派 が

遣

さ

n

そして、

翌 昭

和十

·九年四

月

に

は

学

徒

勤

労

動

員

始

ま

0

事

務員

ŧ

若

11

人

が

多かっ

た

が、

そ

れでも現役生徒

 $\mathcal{O}$ 

配

属

で

職

場

 $\mathcal{O}$ 

空

気

ŧ

段

と明

るく活

気

づ

**(** )

たような気

が

L

た。

た女子生徒が

数名、

給与

課

に

配

属となった。

先

輩

 $\mathcal{O}$ 

女

たが 行 最初  $\mathcal{O}$ 保険会社 頃、 の 新 空襲 徴 用 1 職場で などの管理 で 何 精 名 カュ 11 0 職  $\mathcal{O}$ ぱ 方 や自 11 が 勤務され 1営業の 配 属 とな れ 方 ていた。 が 0 殆 んどで 皆さ  $\lambda$ 銀

島 局 が 陥 は 落 段と 深 月 に 刻 は کے な V り、 1 テ 沖 昭 海 和 戦 で 九 海 年 軍 七 は 月 大 に 打 は 撃 サ

課と 西 工 行 5 な 場 佐 わ り、  $\mathcal{O}$ れ 久 間 階 黒 郎 移転した。 所 長 か わ 0 同 時 12 業 務 組 織  $\mathcal{O}$ 改 正

が

カコ

け、 冝 機 が 日 本 本 土  $\mathcal{O}$ 各 地 を 空襲 す るよう な 0 た。

ン・ きな 者 五. そ 機 テ + 0 Š 七 7  $\stackrel{'}{=}$ 名、 私 Ś ア 昭 達 ン 和 より 負 中 + 傷 + 島 九 者 発 兀 飛 年十 進 七 機 行 + L 機 が たア 五. 従 武 月二十 名 業 蔵  $\mathcal{O}$ メ 員 製 犠 IJ E 作 匹 牲 とつ 所 力 者を出し 空 日 を て忘 空  $\mathcal{O}$ 軍 大 薨 В ?空襲。 29 れ た。 ることの 工 爆 場 擊 サ 内 機 1 で 百 で 死 + パ

さな た。 が 11 1 7 1 退 た。 0 避 運 0 1 襲 かっ ぱ た。 唯 び 女 L ろ が 子 込 地 11 たことで ま 始 私 ! 0 下 事 12 ま 救 道 れ 務 達 爆 0 わ る に 員  $\mathcal{O}$ 発 لح な 事 0 た れ が  $\mathcal{O}$ 1 あ たこと 0 指 + 音 る 務 0 は 私 名 が 所 示 た。 とて で な 丁 達 以  $\mathcal{O}$ しは、 度 上 真 ŋ  $\mathcal{O}$ ŧ 斉に 響 昼 南 目 「き、 頃 給 焼 に 11  $\mathcal{O}$ 地 で 与 た 前 夷 あ ま 弾 る 課 4 に 下 空空 道 防 L 火 W か  $\mathcal{O}$ 一襲だ! 傷 犠 空 な 5 11  $\sim$ 退 を 壕 恐 体 牲 負 で、 避 名 験 に 怖 4  $\mathcal{O}$ を 0 な に L さら た。 た 犠 0 タ  $\lambda$ L 怪 た 1 な 牲 11 لح Ē 工  $\mathcal{L}^{\circ}$ 5 我 早 Ł 聞 場 < n 人 ス れ 出

害 ら 動 1を受け たことも 翌昭 員学 に 十· 二 和 生 <u>一</u> 十 た。 12 月三 あ 多 Ź 0 空 年 た 襲 に  $\mathcal{O}$ 日 に  $\mathcal{O}$ 入 犠 2 牲 は 際 第二 7 者 私 か が 達 6 出 口 t た。 目 は  $\mathcal{O}$ 井 あ り、 そ 空  $\mathcal{O}$ 襲 頭  $\mathcal{O}$ そ 後 が 公 粛  $\mathcal{O}$ Ł あ り、 近 都 空 襲 < 度 ま 多 は 主 で < 年 に 避  $\mathcal{O}$ 末 勤 難 被 労 カュ

歌 昭 山 和 市 に + あ 年 る 暁 三 部 月 隊 八 日 陸 軍 私 は、 に 入営 軍 隊 することになった。 入 営  $\mathcal{O}$ 命 を 受 け、 和

> 大空襲 族に のご ま た 挨 は ま 日 一拶に そ 12 に 大 東 変 遭  $\mathcal{O}$ 伺 京 夜 心 0 V. 配 7 王 を L 東 在 か ま 京 子 職 け 0 下  $\mathcal{O}$ 中 て た。 町 親 0 L が 戚 お 幸 ま に 大 礼 被 0 1 を申 た。 無 害 لح 事 を ま L でに帰 受 + あ け 七 VI げ 宅 た に 日 た。 で VI 行 きた わ 0 社 ゆ た る に が が 帝 入 営 家 都 た

たが 合、 꽢 三 任 厳 日 月二十 とな 瀬 カン L 合格 戸 5 VI 内 0 t 和 することがで た。  $\mathcal{O}$  $\mathcal{O}$ 歌 日 小 で Щ 島 に P あ 城 Ř が は 0 佐 た。 予 て 浜 木 定 幹 辺 島で きた。 通 部 L で り、 訓 候 か 続 補 L 練 け そ 暁 生 が 5 部  $\mathcal{O}$  $\mathcal{O}$ 六 は れ 隊 後 選 月 ľ た。 12 に  $\mathcal{O}$ 抜 8 訓 試 は 5 入 隊 験 広 れ 練 が 島 は た L た。 実 県 が 尾 施 尾 道 さ 道 か 早  $\mathcal{O}$ 沖 n な 速

転 n

玉音 王 はそ つづ そし 子 放 け  $\mathcal{O}$  $\mathcal{O}$ 7 てきた 送 我 後 運 が に ょ 家 命 除 太平 ŋ  $\mathcal{O}$ 隊 帰 終 日 手 続 戦 還 洋 きも となっ 昭 戦 争 和 終 は + た。 ŋ 終 年 わ 永 八 ŋ 九 月 を告 1 月 こと苦 + 七 げ 五. 日 た 日 難  $\mathcal{O}$ 家 で 族  $\mathcal{O}$ 天 あ 道 0 皇 る。 待 を 陛 歩 0 下 私 4  $\mathcal{O}$ 

#### 武 蔵 野 給 友 会 0 発 足

給 新 仕 戦 聞 事 友 会 時 を  $\mathcal{O}$ 投 L 中 は て 稿 中 U 欄 VI まり 島 た ょ 飛 び 仲 で 間 行 カュ あ 機 け  $\mathcal{O}$ 武 蔵 人 が が 野 切 製 0 掛 昭 作 け 所 和 に لح 兀 + 勤 な 0 六  $\otimes$ 年 7 集 給 月 0 与 関 た  $\mathcal{O}$ 読 0 係 が 売  $\mathcal{O}$ 

に 無 駅 同 事 年 前 国土を荒廃させた未 再 会できた悦びで、 月 男女 八 H + 最 兀 初 人 が  $\mathcal{O}$ 集 曾 顔 話 まり を 有 は尽きなかっ 揃  $\mathcal{O}$ 戦争を乗り えた。 が 工 場 多くの  $\mathcal{O}$ 至 た。 越 近 犠 え、 駅 牲 今元 者 つ た三 を 気 出

 $\mathcal{O}$ け  $\mathcal{O}$ 友 を始め 会 懇 あ 今後毎年、 親 0 た社員 と決まった。 ₽ — た。 層深めら 会合を開くことが その結果、 (約百名) れて 年 1  $\mathcal{O}$ -毎に参 0 住 所、 た。 決 り、 加 会 氏 名等 者  $\mathcal{O}$ 早 名 t 増 速、  $\mathcal{O}$ 前 え、 調 Ł 給 査 武 会 Þ 与 蔵 員 呼 課 同 野 U 12 給 志 掛 籍

神 盛 席 布 況 者 会合は三 戸 ぶり ŧ 高 富山 尾 毎 で Ш̈ 口 鷹、 あ 麓 等 0 からは + など、 た。 · 名 か 吉祥寺をはじ ら三十 そ るばる参加される方も  $\mathcal{O}$ 都度場 · 名 位 め、 所を変えて 新 な 宿 カン には遠く京都 鎌 催 倉、 あ さ れ 横 大変な た。 浜 出 調

また 会を最後に、 でてきた。 つき合いでは かし会員 死去された方 こうした事 £ あ 戦 高齢 時 0 た ŧ 中 が 者 か あ が 5 情 0 ?多く、 数え て カュ 武 蔵 5 参 去 野 れ 加 ば六十 る平 給友 者も 健 康 会 成 問 次 は 年 + 第 題 以上 六 Þ に 解 転 散 年 減 12 居 五 少 さ た ŧ 月  $\mathcal{O}$ 及ぶ 0  $\mathcal{O}$ 傾 れ た方、 で 懇 向 あ 親 が お

れ る方もあっ 0) 後、 年 口 は 五. 皆さ 月  $\mathcal{O}$  $\lambda$ 第 お 日 話 曜 日 を を 給友 た 11 会の لح 日 希 望 さ

> め、 人 数 な 集 が 合 5 場 懇 所 親会が を 新 宿 つづけられた。 駅 西  $\Box$ 午 前 時

決

少

出  $\mathcal{O}$ 戦 として生きつづけることでしょう。 中 集 ŋ · の 中 島 は 飛 行機 給 与課 武 蔵  $\mathcal{O}$ 野 皆さんにとっ  $\mathcal{O}$ 日 々」 て 戦 生 後 涯  $\mathcal{O}$ 忘 武 れ 蔵 え 野 め 給 思 友

会

11



旧給与課の方たちと三鷹駅北口レストラン前にて (昭和 46 年 8 月) 後列左が清水氏

### 後 の

#### 時中 Ò 食 糧難

私 Ιţ 小学校に 昭和8年7月に東京の浜松町で生まれ、 入る頃、 家 族と一緒に小 金井 市に 引っ 昭 和 越 14 L

丸焼けになってしまい ら浜松町まで電車で通っていまし 父親は浜 松町で地 金問屋をやってい ました。 たが、 たので小 そ の店も空襲 金井市 で か

ない パラパラと落ちていく様子がとても綺麗で印象に を下の妹たちに話しても皆小さかっ います。 が見えました。 時、 ようです。 私は七人きょうだいの一番上ですが、 小 金井から東の空を見ると爆弾が落ちてい 親子焼夷弾というのでしょうか。 たのでよく覚えてい そのこと それが !残って く の

頃 か ませ 切り ら配 争が始まってか の 身が一 給制となりまし カ h ボ チャ そ のわずかなおかずを 人一切 です。 らは食糧事 れ、 そ た。 れ それと八人家族 も何日 配給品 情 が悪く ずば、 家族 か に 、なり、 鱈ば 全員で食 に四分 回 かり L 昭 か 和 で、 配 の 17 給 が 玉 年

た。

当時砂利道だった今の農工大通りで、 た記憶も残っています。 大きな木の下や、 の やジャ 近くにある雑炊屋 然、 ガイ 配給品だけ · モ の 近 買 では 所 2 L١ 出し の h 食糧が足りな 家 への買い の軒下などに妹と一 にも行きまし 出し 機銃 ゃ ŀ١ の た。 で、 掃 農 そ 射 家 緒に に 小 の に 狙 力 金 われ ボ 井 IJ 道 駅 チ

ヤ

ど少し 飯に混 食べたりしました。 ボロになってしまいました。 野 Ш ぜて焼いて食べまし U のほとりでは、 か採れませ また、 んでしたが、 のびるやなずな、 たが、 ふすま おかゆ **\*** なかなかくっつか 1 はこべ、 や雑炊に入 はお団子やご せ ず IJ ボ て な

し た。 れて遊びました。 女の子は石けりやゴムまり、 時の子どもたちの遊びといえば、 お手玉は、 小豆がなかったので数珠玉(\*2)を入 ゴム縄 跳 男の び 子は馬乗 お手玉などで ij

ま ている「戦争」や「 を行ってい t 終戦 h 後、 まし 学校では 軍艦」 勉強もせず、 戦争に関する話も学校ではあまりし などの文字を墨消し 毎日教科書に する 記 載 され

## 6風呂屋さんでの思い出

くら 作ってく 11 中でも、 上 の 服 ᄀ まで全部 で交代で見張ってい の きませんでした。 風 で順番に見張りをして ( S E L١ 番をしてい クス が 家 し 手 5 'n か入って (石炭 の ぬぐい 持って行かれることもあ んに行きました。 ましたが、 お 風 (カス) 呂は、 な や石鹸 L١ L١ Ļ な ました。 などの 当時燃やすものとして使っ 父が立派 しし 他 11 が持って行 の ました。 で の人に持っ 肩まで お風呂屋 燃 そ れ やす なタイル お風呂 ij 浸 か で も て行 れる まし さん かるなんてことは も の 妹 が 貼 「のお湯 では、 なく、 た。 の服 かれ りの のできょ てし お は 風 3毛半分 脱 て 風 下 呂 家 うだ まう 呂 から 11 族 L١ 釜 の だ で た を

### 段糧疎開について

はお った 弟 父方の曽祖父の田舎に たちの 腹が大きかっ 窓ガラスを叩 京駅で の 京では大家族が食べていくだけ で、 手をつ 終戦後 は 分たちの 一人でも多くの な ぎなが たの き割って乗ってこようとします。 の 席 昭 の で、 和 食糧疎 ら家族 窓ガラスも割 20 私が一番下の妹をお 年 12 開 全 人が電車に乗り 月 蒷 U 26 で電 の まし 日に 食糧 5 ħ 車 た。 東京 たり 確 に 乗っ 保が んぶ Ú を た て大変 発っ て ١J 難 U 母 61 た ζ 親 め て か ま

な思いをしました。

るもの うち ご飯 反ぐらい 遠 は が 11 に困るようになりました。 白いご飯 食べられるよと言われた 親 作っていましたが、そのうちにだん 戚 の おばあちゃ を食べることができまし Ь ビ の 田 舎へ で行きまし 帰ってく た。 た。 だ 田 れ h h ぼ ع 初 ば 食 は 白 の

が の ない 農 私 作 の 業を一 のに、 母 親は 生懸命していました。 子どもたちを育てるため 浅草の歯医者の娘で、 畑 Ę 仕事 などしたこと 草むしり

### 主人の戦争体験

きてい 自分が逃げるので精 からがら逃げ たと話してい しし ました。 私 の 主人は るので倒 そこで四月十一日に ました。 東京の-だしたそうで れている人を助けたくても 本 郷生まれ 杯だった す。 たので、 背 中 で、 東京の空襲を体 ŧ 赤門の で 人 火の をまた 近くに 助けられ 手が 験 L١ 迫 住 で な つ て h て げ い で

襲 ました か 労したようです。 の 5 そ ر ص ため行わ ん後、 学校出てい が、 主人は、 疎 れ 開 ず 先 ない 元では、 通っ \_ 兄弟と一 てい んだよ。 自分 着 た東京 は るも 緒 卒業証書 の に と言ってい の も 栃 小 食 木 を 学 ベ の もらっ 校の 方 物 も ます。 卒業式 な 集 て < 4 大 11 疎 も空 変苦 開 L١

の情景と重なったのでしょうか、その後、少しずつ話し てくれるようになりました。 しませんでしたが、3・1の震災があってから、 主人はこれまで私にも子どもたちにも戦争の話は一 戦 時 中 切

父母には感謝してもしきれません。 あのような大変な時代の中、私を丈夫に育ててくれた

ご本人からの聞き取りにより作成しました。

2 水辺に生息する大型のイネ科植物。 数珠玉 (じゅずだま) 実は熟すと固くなる。

分

小麦の糠(穀物を精白した際に出る果皮、

種皮、

胚芽などの部

1

ふすま



さまざまな端切れを使って作った お手玉 (ご本人作成)



数珠玉の実

# 十一 戦争とともに歩んだ

# 都立五商一期生の思い出

一鷹市田村禮二

ら ٦ ħ の た文章 体 験 談 の は 部 都 を抜粋 立 第五 したものです。 商業高等 学校 創 立 70 周 年 記 念に 寄 ŧ

課 せ を が (当 境に せら 5 で 時 きな れ 学 学 れ て 直 は ま 1 校 後 11 した。 ま 中 太  $\mathcal{O}$  $\mathcal{O}$ · 学 した。 平 昭 授 校 業 洋 和 以 ŧ + 戦 六 上 軍 争  $\mathcal{O}$ に 事 年 が 指 は、 + 色 勃 揮 が 発  $\mathcal{O}$ 急速 現 月 L £ 役軍 ま 八 ٤ 日 に L 人 た。 強 厳 で ま 生 L り、 そ 将 涯 1 校 Ū 忘 軍 てこ 配 事 が れ 配 属 訓 ること 将 練 属  $\mathcal{O}$ さ が 校 日

不 時 作 当 に 行 馴 間 所 時 は わ 軍 事 n フ 東 れ 派 関 洋 な ル 学 遣 緊 連 作 操 さ  $\mathcal{O}$ 徒 張 施 業 業 航 設 に せ 勤 L 6 空 労 た  $\mathcal{O}$ 言 私 たち れ 機 動 見 11 毎 学、 ま 員 日 尽 工 場 令 < Ł L で た。 と言 せ 交 L 勤 替 が た。 労 な 広 わ 報 勤 発 1 令さ さまざ 大 務 れ 戦 玉 な 隊 を た 争 中 伴 軍 れ 末  $\mathcal{O}$ ま う 需 島 期 校 外 な 作 工 飛 同  $\mathcal{O}$ 場 年 昭 活 木 行 業 でニ 難 に 機 六 和 動 が 就 月 武 + な + き、 あ 蔵 に 九 ど は、 兀 製 年 が 0

> たに 力 高 シみ は <続け 0 ŧ 戦 動 与 カコ た原 えら 後 員 カン 作 わ  $\mathcal{O}$ 点に 業で れ 厳 5 た使 ず、 L ŧ 身に 1 なっていると考えています。 苦難 命を全うしたと自 お つけ 互. を経 い た 助 我 7 け 現 合 在 慢 11 ま 負し 忍 で 同 耐 期  $\mathcal{O}$ 7 長 生 V  $\mathcal{O}$ 11 ま 人 精 同 生 神 誇 を n

じ た。 隊 応募 況 別 ば 0 フ ス なら 生 攻 L 勤  $\mathcal{O}$ 還を 労動 撃 ŧ タ た 学 ま L とで ン 隊 た 小 た 窓 な 果た 北  $\mathcal{O}$ Щ  $\mathcal{O}$ 員 入 か 1 ことは、 ととも 重 T 隊 は 朝 保 5 L 労 ル 鮮 清 五. 軍  $\mathcal{O}$ ま 働 斉 7 で 君 兵 隊 L に、 テ 藤 終 は 科 を  $\sim$ た。 戦 勇 入 学 課 に イ 道 ここで特別 躍 ] 及 せ 夫 を 南 太平洋 君 迎 び 志  $\mathcal{O}$ ら 市 え、 は、 直 近 願 れ た 郊 لح 後 L に . で 散 り た 遥 か に ソ 5 同 に t 抑 カン 連 わ 語 留 中 軍 華 期 カコ け 時 か さ 央 に 少 生 0 ア \* 年 代 て わ n 抑 のこと ジ 1 お 留 航 0 6 ず、 空兵 ア 要 か さ 酷 で  $\mathcal{O}$ L 請 れ な 厳  $\mathcal{O}$ 力 た ま に け 奇 に 状 ザ 跡 特 入 応 れ

月二 及 戦 直 爆 せ 5 接 撃 75 が 中 れ 開 + 機 島 日 几 本 飛 始  $\mathcal{O}$  $\mathcal{O}$ さ 本 発 行 日 進 機 徹 れ 土  $\mathcal{O}$ 基 底 ま 第 地  $\mathcal{O}$ L L 飛 た。 来 が 動 た 口 す 員 目 7 爆 IJ 撃 るように カゝ  $\mathcal{O}$ ア 5 集 に  $\mathcal{O}$ 中 ナ ょ 攻 五. と 爆 0 擊 カ な 撃 な 月 7 は り、 り、 中 以 を 計 過 島 九 来 ここか ぎ 昭 飛 口 Τ. た 和 行 場 + 頃 機 五. 6 九 は 百  $\mathcal{O}$ В 壊 年 消 五 米 滅 + 29 機 滅 戦 さ 作 が 略

す。 察 先 がするに 空爆 生 とくに この 方に で 余り 与 同 最 生 私 えたご心 徒 期 た ŧ あることでし  $\mathcal{O}$ 生 衝 ち + 殉 擊 同 名 的 職 期 労 が だ 生 ご苦 避 B 負 0 傷 難 た そ が  $\mathcal{O}$ L  $\mathcal{O}$ 悩 私 た は 付 たち が 防 き 如 空 昭 添 壕 何 は 和 11 ば t + に で ち カ 殉 カ な ろ ŋ 職 年 0 た  $\lambda$ です 0 たことで 諸 た 月 先 か、 が、 生 日 に

した。 され とは 夜 11 な 線 場 毎 初 た 冬の 私 で、 年 1 香 ま ま た  $\mathcal{O}$ を 供 私 ち 寒 ま 同 窓 た。 え、 たち 0 カコ 0 講 期 会 た当日 堂 生 例 今 寂 は 会で で  $\mathcal{O}$ 思 L 灯 卒 形 火 11 VI 文字 管 業  $\mathcal{O}$ ば  $\bigcirc$ 返 夜 式 思 制 か L は、 で 7 سلح り 下 11 も辛く す。 出 お 0  $\mathcal{O}$ 卒 話 ŋ 東 Ł · 業 کے 校  $\mathcal{O}$ 伏  $\mathcal{O}$ 式 悲 で 舎 な 見 L か 野 許 稲 L 階 で、 さ 辺 カゝ 11 荷 出 が 出  $\mathcal{O}$ れ 神 送 た、 空 来 来 印 社 (h) 爆 事 ま 象 横 せ 的 で で  $\mathcal{O}$ を なこ L  $\lambda$ 破 仮 た。 壊 お 短 で 通

す。 個 類 た 撮 ち + 影 卒 Þ . とっ 業写 E 六  $\mathcal{O}$ L 歳 たフ は 間 7 真  $\mathcal{O}$ 儚 を  $\mathcal{O}$ イ に 卒 撮 最 1 業 ル 青 t 0 A 0 た 春」 て は 残 思 写 酷 焼 11 لح 失 真 で 出 愚 屋 最 1 に さん う てしま カ Ł な L べ 耐 る きで は え 1 物 難 出 は 来 L ま 自 11 傷 事 ょ 宅 切 う た。 跡 で が あ を あ カュ 戦 ŋ るとと そ 災 ま す 戦  $\mathcal{O}$ に t 争 せ た 遭 Ł ん。  $\mathcal{O}$ は 8 11 で 私 人

五 商 慰 霊  $\mathcal{O}$ 日  $\mathcal{O}$ 十二月三 日 母 校 在 校 生 有 志  $\mathcal{O}$ 方 々

> ます。 ことを最後に述べ は、 今でも 私たち 殉 を祈る行 期生 て 日 おきたいと思い 事 <u>寸</u> 同 لح 航 はこ 慰 空 霊 機 のことに 碑 で 殉  $\mathcal{O}$ 職 ・ます。 献 深 た三 花 を続 感 年 謝 け 生 7 7 お 含 5  $\Diamond$ n

十

#### 1 (さんげ

撃 死 争 一隊に を美 K て日 による戦 化す 本 ,る表現 軍 死に 0 兵 お で 士 あ 1 が る玉砕 戦 7 は 死 この す کے ることを ほ 表 現 ぼ が 同 美 用 義 に 11 化 使 5 L て わ れ ることが 散 n 華 る が、 う。 特 别

戦

攻

戦



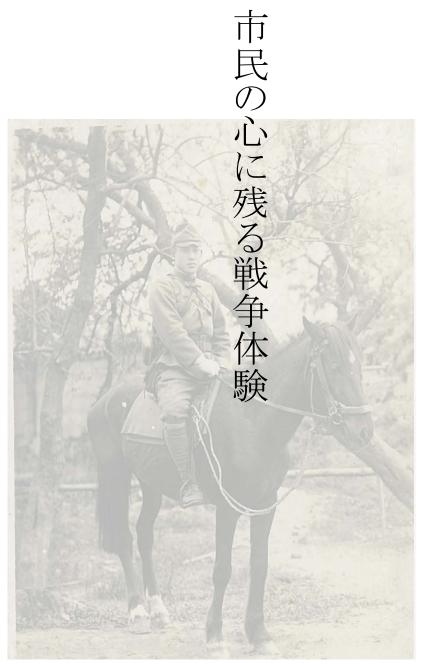
#### 都立第五商業学校慰霊碑

1944 (昭和19) 年12月3日の空襲により、東伏見早稲田ク ランドにつづく台地に造られた横穴防空壕が被弾し、退避中の 同校 4 学年の井上隆行、西田栄次、川崎鴻、武内良臣、中村常 春、大河原豆、山口博司、水野昭三、杉浦辰雄、鈴村光男さん たち計10名が殉職されました。また、昭和20年4月19日に は同校3学年の中込歴夫さんが自立航空機株式会社立川発動 機製作所に於いて殉職されました

昭和31年、同校同窓会が慰霊碑を建立しました。

五商内に建立されている慰霊碑

# 第二部 市民の



中国戦線にて(提供 渡邉とし子氏)

## 十二 戦中・戦後の思い

出

# 吉祥寺北町 生方 ゆき子

Щ の家でしたので、戦災で焼け残ってからのことですが んでした。駅まで20分ぐらい歩くのは常識でした。 いました。 込におりました。昔は今のJRのことを省線電車と言 結 へ立ちますと海岸のほうまで見えました。 婚するまでは、 生まれは、三田で、 交通機関は鉄道しかなく、バスも走っていませ 昔は 昔は 大森区と言いまし 同 朋町といいました。 たが、大森区 5 歳 Щ の馬 って か 小 側 5

#### 空襲について

ときには、 たくたにくたびれて、 できません。よく父が、「神経戦だなあ」って言っていま いて、すぐ飛び出せるような態勢でした。 つも寝るときは、上着も全部着て、防空頭巾だけ枕元に置 空壕まで行くだけの時間がありません。空襲警報が りました。寝巻を着て寝ていたのでは、とても着がえて防 した。こういう日が続くと、朝起きると疲れが抜けず、 空襲があった夜は、3回ぐらい空襲警報のサイレ B 29 は、すぐ上へ来ていました。 やる気をなくしています。 安眠などとても だから、い 鴻った ンが 鳴

です。の町工場がいっぱいあったので、空襲の標的となったようの町工場がいっぱいあったので、空襲の標的となったよう空襲で海岸沿いの建物は、全部やられました。軍需工場れていましたが、家は焼けることはありませんでした。よく「悪運強いな」なんてその当時の同僚から冷やかさ

空壕が掘ってありました。 す。だから、 トがあり、 てあるだけのものなので、爆風を避けるためだけの 空襲があると防空壕に逃げ込みましたが、 穴が掘れないの 飛行機からは丸見えです。 で、 街路樹の 道 路 あっちこっちに防 はコン ただ穴を掘 クリー Ł ので

### 食糧事情について

日が極限状態です。 戦時中、食糧事情がだんだん悪くなった影響で、父が、 戦時中、食糧事情がだんだん悪くなった影響で、父が、

ていけません。そこで、四方八方駆けずりまわって大豆や直接は分かりませんが、お米が無くて会社へお弁当を持っ私はまだ娘で、台所のほうは母がやっていましたので、

そうし べてい には 治りますけど、 して、日にそれを2回も食べます。毎日毎日これが いやになっちゃうし、 米をか が無くなり、 いかないのです。おなかを壊しながら、 ました。 ないとお弁当の半分も埋まりません。 : き 集 め 他に食べるものがないから、 大豆 ました。豆を入れて弁当の量を増やしま  $\mathcal{O}$ おなかも壊しました。 配給になると、大豆を煮るか炒るか 食べないわけ 薬を飲んで食 食べなけれ 次第に米の 続くと、 す。 ば 配

である程度おなかがいっぱいになったのです。ったです。これだけいっぱいあるなと思えるから、目だけ刻んでご飯に入れて、見た目が茶碗いっぱいある方が良かお茶わんに半分のご飯をもらうより、母親が大根の葉を

け。 月ですが、まだその頃は、食糧事情は余りよくなかったで月ですが、まだその頃、食糧事情は余りよくなかったで、武蔵野市に来たのは、結婚してからなので、昭和24年11

失調 におい 通帳 お米とパンは配給制で切符によってもらっており、米 で死んでしまいます。 (米穀配 しくないパンでしたが、 通でした。 給されるものだけ食べていたら、それこそ栄養 給通帳)というものがありました。 闇米がなかったら、 だから、 口へ入ればよかったです。 闇米(やみごめ)を買 私たちも恐らく食 今の よう 穀

> てこっちへ移すということでした。 結婚するときも、住民票のように米穀通 でした。 糧難で生きていなかったでしょう。でも値 米穀通帳 は、は、 昭 和 30年頃 まで 使ってい 一帳でこっちを消 段 が 高 ました。 くて大変

れました。業を営んでいて、その実家からお米を持ってきて分けてく業を営んでいて、その実家からお米を持ってきて分けてく闇米は、ご近所の顔見知りの方の実家が川越と所沢で農

うとか 持 若い人の着物が特に喜ばれるのでそれを持って行きます。 枚はがし した。着ているものをその場で、タケノコみ きた」と言い あったでしょうけど、私たちには何にもありませ 屋さんみたいな商売をしている人はいろいろストックが されていました。私の父はサラリーマンでしたので、呉服 いますから、買出しに来たことは誰が見ても、一 何持ってきた?」なんです。 何にもない」と答えると、「どこそこのだれは 農家に直接買いに行く場合は、着物を持っていきました。 っていけませんから、この次は、この着物を持っ リュックを背負い そのとき、農家の人が一番先に言う言葉が「みやげ、 "、 こ の ていって、 ます。だから「タケノコ生活」と呼んでい 羽織を持っていこうとか。 最後は芯だけになる。 もんぺをはいており、汚い格好をして 今から考えると完全に見透か もちろん、 たいに 物 は、 目瞭 何持 んでした。 ていこ つて

ほかにお金も持っていくわけです。

で、亡くなった方がいたのを覚えています。し、餓死したという新聞記事が出ていました。他に裁判官正々堂々と法律を守り、配給だけで食べていくことを主張正々党をと法律を守り、配給だけで食べていくことを主張戦後、 ある大学の先生が、自分は闇米は絶対に食べず、

人には手を出さなかったです。

0

ていました。コレートをくれる方もいたけど、私は、もらわないで逃げコレートをくれる方もいたけど、私は、もらわないで逃げあと、チョコレートなんか憧れのまとでした。でもチョ

※ご本人からの聞き取りにより作成しました。

#### 米兵について

ったアメリカの人は親切でした。人は、特に戦争中は威張っていました。反対に戦後に出会日本の男の人の前で言うのは悪いのですが、日本の男の

にはやさしかったです。
にはやさしかったです。
品川駅で、またいで歩けないくらい通路にいっぱい水があり、通れないで困っていると、突然、解まっていたことがあり、通れないで困っていると、突然、温川駅で、またいで歩けないくらい通路にいっぱい水が

リカ兵は、統制がとれていたのでしょう。絶対、素人の女思っていましたが、そんなことはありませんでした。アメ持っていたので怖かったです。何かされるのではないかと電車の中でも、アメリカ兵が乗っていると、ピストルを

### 十三 技術部兵とし

### **境 大野田 武** おおのだ たけし

きく 平 等 帰 砲 11 弾 砲 え に (V る を 青 射 を、 私 0 廠 均 0 て あ 縫 は 等 砲 行 擊 内 棒 堀 か 療 合 0  $\mathcal{O}$ に 身 海 を 0 遠 ŋ 7 小 養 幻 病 岸 ょ が 賀 倉 院 し た 聴 0 動 で 7 Ш 脳 11 7 た。 陸 が 傷 に て カゝ 機 河 病 1 搬 弾 な 軍 起 院 日 能 П  $\Box$ た。 送さ 造 り、 き < <u>\\</u> に は 昭  $\mathcal{O}$ に 飛 な 転送さ 兵 製 近 癒 和 確 れ 着 廠 医 ば 0 + 作 認 1 7 さ た 芦 で 師 し 八 所 を 応 た 0 製 高 年 す 屋 れ れ  $\mathcal{O}$ 急 で、 勧 が 九 る 海 射 た。  $\mathcal{O}$ 月、 措 作 岸 機  $\otimes$ 前 同 で、 置 玄 型 業 か 関 額 日 海 5 砲  $\mathcal{O}$ 部 れ 機 P が 小 うえ、 私 灘 を 倉 関 玄  $\mathcal{O}$ 経 を 修 で 結 千 は 打 砲  $\mathcal{O}$ 海 つ に 造 郷 荒 5 理  $\mathcal{O}$ 葉 灘 合 県 ことそ 試 里 郊 割 操 波 5 に 0 り、 長  $\mathcal{O}$ れ 外 作 れ 君 向 射 野 音 0) 中 7 た 津 0  $\mathcal{O}$ 日 て 機 県 が 直 に 機 検 に に 聞 大 明 5 関 収 実 関 近 を受け、

金 沢 そ  $\mathcal{O}$ L て、 東 部 第 꽢 十 兀 + 九 九 年 部  $\mathcal{O}$ 隊 徴 に 兵 入 検 隊 査 した で 「第三乙 このであ 種 لح な ŋ

現 ら に 派 金 役 B 沢 兵 0 遣 で さ 7  $\mathcal{O}$ は れ 中 11 るこ て  $\mathcal{O}$ 第三 技 は とに 術 次 者を 到 な 技 底 術 集 時 0 部 た  $\otimes$ 局 短 が  $\mathcal{O}$ 期  $\equiv$ 要 教育兵として大 請 か れ 月 に は は  $\mathcal{O}$ 間 兵 特 器 に 訓 合  $\mathcal{O}$ 教 基 育 わ 阪 な 礎 で 教 教 第 11  $\mathcal{O}$ 育 育 で、 線 カコ 隊

> わ  $\mathcal{O}$ t 部 1 青  $\mathcal{O}$ 隊 が 木  $\mathcal{O}$ に 軍 送 0 魚 7 曹 V) £ Š は 潤 出 沢 れ す で、 お Ł ここで 前  $\mathcal{O}$ 5 食 で 俺 事 あ 五.  $\mathcal{O}$ £ 0 息子 た。 + 割 日 合 と同 ほ 恵 金 ど兵 ま 沢 年 れ は ع だ 空 て L 1 襲 等 た。 7 ŧ لح  $\mathcal{O}$ な 言 基 七 礎 尾 0 7 出 訓 近 練 カン 身 海

た後

大阪に

出

発

L

た。

が、 を 行 な 戦 避 意高 打 機 1 難 燈 ŧ, って 現 火 途 L 中、 管 実 揚 て 喜 落ち で 来 制 ば び あ 泣 か る 下 合 て る。 人 き ŋ  $\mathcal{O}$ 0 大阪 0) な 来 0 た。 るの が = 列 ま た、 を 5 に ユ 見 半 着 は 火 7 焼 敵 ス 11 だる 機 映 た け だ 画 大  $\mathcal{O}$  $\mathcal{O}$ とい ま B 変 布 は に 新 な 寸 夜 う な K 聞 シ P 先 等 0 彐 な 鍋 入 7 で ツ 0 落 感 は ク 7 釜 . 見た ちて を カュ 等 か 受け 5, を 5 こと 持 来 で た。 皆 る 0 あ ŧ 7 手 る

違  $\otimes$ し 1 薄 12 暗 に 言 1 葉 玉 教 葱を ŧ 育隊 な 採 カコ  $\mathcal{O}$ 食事 0 0 た。 た は、 後  $\mathcal{O}$ 茎 ぼ ろ  $\mathcal{O}$ ぼ 塩 ろの 汁 高 金 粱 沢 飯 لح  $\mathcal{O}$ (こうり あ ま ŋ Þ  $\mathcal{O}$ 

とし 濡 銃 英 わ 霊 れ 掃 れ 大 を見 て た。 阪 射 当 七 大阪 を受け 教 番 ツ たり、 空 プ 育 で で 襲 城 傷 隊 警 吅 た 12  $\mathcal{O}$  $\Box$ 様 り、 隊 き 報 近 に 々なことが 舎 消 ピ ŧ 1 鳴ら 音 は 大 L 彐 た 阪 ŧ 城 ン り、 な 陸 東 な ピ < 1 軍 区 彐 あ 関 そ 降  $\mathcal{O}$ 造 ン に、 目  $\mathcal{O}$ 0 兵 飛 た て 直 廠 に び 来 穾 擊 あ  $\mathcal{O}$ は る 然 で 兵 0 ね 即 焼 器 た る 死 夷 製 が 屋 蛆 弾 L 根 造 虫 た を を 現 教 ~ う 夢 貫 場 同 育 中 僚 < は U で  $\mathcal{O}$ 機 行 主 JP.

す 出 試 すると半 4 ŧ L れ OŹ 万 ま 天 来 作 爆 か そ 新 での 地 戦 れ メ 品 弾  $\mathcal{O}$ 鋭 を ] 頃、 爆 ば 0) と大 Ū よう 径 高 連 焼 高 新  $\vdash$ 射 合 0 入 五. 鋭 射 注 ル な 砲 < 1  $\mathcal{O}$ れ + 高 位 砲 目 ŧ り返す 大 に 前 を 弾 さ t メ 射 遂に · 士 来襲 編 ]  $\mathcal{O}$ 砲 は れ 一気を で、 隊 弾 を 1 た 日 ような甚大な被害を受けて、 す 井 高  $\mathcal{O}$ ル は  $\mathcal{O}$ 高  $\mathcal{O}$ る 空 日 几 度 が W 高 目 襲 め 本 方 В 七 で 度 た。 を見ることはなかった。 は街街 に 説 に 29 ( 最 は 明 弾 万 八 に 新 三門 千 L を受け、 を焼き尽く 丸 メ 鋭 は か ] が 対 メ  $\mathcal{O}$ Ļ だ 応で 飛 高 1 けだというその び 1 射 ル 皆、 を超 В きな 散るクラ ル 砲 29 L L で これ え、 か を主 カ あ る。 造 0 届 兵廠 さえ 体 Ź いず、 た。 心 炸 خ タ 裂 頼

(八月十四日の大空襲の一端は、前回の「戦争体験記」に記載)

〇空 L  $\bigcirc$ 焼き尽 る 7 覆 1 L 圧 (お) ゆるも L 来る艦 0) なき街 載 行くに背 機 В 29 見 つつ (せな) 寒さは背筋を走 に火は着く空気熱 る

 $\bigcirc$ 兀 人 4 な 征 カュ L 8 L 父 「時 Þ 便 リリリレ 給 と書きて来 め は

B

 $\bigcirc$  $\bigcirc$ 夜 弾 Ł け たる花・ す が ら空を焦して焼き 火のごとく降りて来る焼夷弾赤 つくす炎は 夜明 け 々と夜空を染めて 西 [に移 れ

敗 戦 後、 営 庭 に 集め 5 れ た 我 わ れ は、 教 育 隊  $\mathcal{O}$ 幹 部 か

> 裹返 る。 名 ょ 相 5 を率 0 ぎ、 し と言 男 女 で は は 1 中 は わ T 皆 営 に な n メ 去 門 は た IJ 勢 か さ カコ 将 が 0 力 5 校服 兵 た れ 堂 カコ が を 々と脱走する者さえあった。 れ 連 奴 盗 隷 は れ L とし 着 幹 カ 去 る Ļ し、 部 ので、 等 てどこ 佩刀 その が 経 私 為 験 カコ \_ \* カコ L 物 自 <u>1</u>し て は 連 来た 決、 n 切 て こと 7 脱 処 行 + 走 分 か が 余 せ n

時 作 業に L 代 金 0) 沢 11 姿に 焼 従  $\mathcal{O}$ 夷 事 原 弾 戻 L 隊 0 た す 12 殻を見 後 た 復 帰 8 九  $\mathcal{O}$ L な て 月 取 が 壊 か 中 . ら ら二十月 旬 L 郷 ゃ 里 富 に 多量 Щ 向 ば を 0 焼  $\mathcal{O}$ カン 資 b, き 尽 材 兵 L 0 舎 た 焼 を お 却 大 び 等  $\mathcal{O}$ 正

○小さくなり還り来しよと秋の蚕(こ)を桑づけゐたる母驚けり

とは な ない。 お 私  $\mathcal{O}$ 前 額 部  $\mathcal{O}$ 傷 は 七 + 年 経 0 た 今も消 えるこ

### \*1 佩刀(はいとう)

刀を腰におびること。また、その刀。帯刀。

\* 筆 承 諾 者 をい は 故 ただい 人で、 てい 本 文 ま 0 掲 載 に 0 1 7 は 遺 族 0 方

## 十四 私の戦争体験談

### 八幡町 後藤 シヅヨ

は全滅 放送され する兵 月頃 る団 ラジ 和十 5 Ł 縁 で 出 あ あ 昭 オで 体 九 のことでした。 来ずラジオで戦 0 V) ŋ 和 があ て 昭 ょ。 年 Í 十六 士をお見送りし 所 <del>·</del>六月 てくるニュー は  $\mathcal{O}$ し ŋ た。 進 和 年十二 人で農家は と、こっそりささやいて教えてくれまし に女の ました。その婦 軍、 + 当 八年 時二 進 月八 当時、 軍と放 子が 況 应 十三歳 たり、 月に を知 日太平洋戦争勃 スと異 7 生ま .やだと思っていました。 玉 東 ŋ 人会 銃後 防婦人会という、 É  $\mathcal{O}$ なり、 れ 京 私 じた。 に ま な、  $\mathcal{O}$  $\mathcal{O}$ ました。 住 L ニュ 守 幹部の方が「ラジ た。 む人と一 昭 結 ŋ 発、 当 ーギニアの 和 婚 **\*** 昭 + 時 日  $\mathcal{O}$ 凣 新 中 1 相 和 緒 戦 年 聞 戦 + 手 に 争 を 頃 ŧ 九 は 争 そ な 堅くす くまでは 見る事 日 12  $\dot{O}$ 年 雪 た。 り  $\overline{\mathcal{O}}$ オで 出 本兵 . つ 最  $\mathcal{O}$ 後、 征 昭 降 中

几 れ 空 し メ ば 地 が 1 家 爆 ル は 位 弾  $\mathcal{O}$ 帖の 品品 離 が 中 落 n Ш . О 家に親子七人で住 5 た  $\mathcal{O}$ 畳をはがしてささやかな防空壕を作 たとい 所 荏原区にある二軒長屋の一軒で、 に 旧 うこと 皇 族  $\mathcal{O}$ で、 御 んでいました。 屋 家に 一敷が 防 あり、空襲 空壕を掘 近く でその 5 り な  $\mathcal{O}$ 帖 ま け 百

> 連 争 に お に義弟に スで んぶして 行されるよ。」 が して、 は 聞 げ 1 「シー、 度 た時、 くな 防 空壕 々  $\mathcal{O}$ ŋ といましめら 姉さん、そんな事を口 空襲 もう日本はだめだ、 硫黄  $\sim$ かくれたり  $\mathcal{O}$ 島までも敵軍 サイ レ れました。 ンが Ш́ たり 鳴る が と思わ  $\mathcal{O}$ 北 度に ば 毎 上したとニュ 日でし ると ず 乳 乢 吞 警察 んだ み子 た。 時 を

大空の半分ほどがまっ赤に染っていました。それから間もなく三月十日の夜、浅草下町の大空襲で

雪国 存し 屋 根 時 た 食  $\mathcal{O}$ 1 物 だん は本当に感極まり 階段を降りて入ったほどです。 て 置 ないと大きな鉄鍋 が  $\mathcal{O}$  $\mathcal{O}$ 逼 だんひどくなる戦 生 高さと同 まれ 7 迫 た長ねぎの枯れて黄色くなった葉まで  $\widehat{\mathcal{U}}$ 故 っぱ 郷 じくら 0 3 É 実家 L でオジヤを煮てくれました。 11 して義 た。 · 雪が · 、 疎開 況の為、 積 姉 b, L は 疎開先で ました。 私は 冬中の 家の 子供を背負 中 食料とし へ入る 三月末 ŧ だ なの W  $\mathcal{O}$ だん そ ŧ て は て、 保 0

捧 れ 多 病 況 大 ま 院 が 沖 げ 7 な 激 縄 で た。 動 しく る功 は、 り 員されました。 私は 、なる中 ŧ 績 米 L をたたえた立 十年 た。 軍 が で、 そして八月九 遂に 前  $\mathcal{O}$ 沖縄旅  $\Diamond$ 四月に嘉手納 多くは命を落 ゆ 派 ŋ な 行に行ったときに 学 S 徒 日 8 隊 ゆ 海岸に上 が しま り 連 結  $\mathcal{O}$ が 成 L 官 塔 É た。 が 陸 、黙祷 布 <u>77.</u> Ļ 戦 告 7 戦 軍

五日に天皇陛下の玉音を拝して戦争は終結しました。て来ました。日本は敵軍の前に降参する事になり、八月十

# 1 銃後の守り (じゅうごのまもり)

考え方。戦場の後方であるため「銃後」と表現した。供給を支えることによって戦争の遂行と勝利を支援するという隊に参加するのではなく、それら軍隊が消費する資源・物資の軍隊などで直接戦闘に参加したり、戦闘部隊を支援する輸送部

# T五 陸軍特別幹部候補生を志願して

### 境南町 邊見 憲一

もよ 或 な 潮 期 たことも ŧ らある」 る ぜ 部 そ 生 < 私 軍  $\mathcal{O}$ 隊 は とし 理 に 歌 は 昭 というくだりがあ 端として、 の 一 解することができず多少 自 入 和二十 つ 隊 て、 5 節に「人の 0 志 L 原 た。 年 願 Ш 六 因であっ ĺ 入隊時 県 月  $\mathcal{T}$ 般的に冗談としてよく唄われ 小 軍 + 嫌  $\overline{\Box}$ 日 日 人 が ŋ, 島 た 12  $\mathcal{O}$ る軍 陸 淵 年  $\mathcal{O}$ な 私 﨑 軍 カュ 2 齢 隊に  $\mathcal{O}$ 船 村 ŧ 0) た は 頭のどこか しれ のか 不安もあったと思う。 十 五 舶 志願ででてくる馬 現 特 土 、その 別 な 歳 庄 幹  $\mathcal{O}$ 町 少年で 部 時 12 候 残 は自  $\mathcal{O}$ 補 てい 0 陸 生 L て 分で 軍 た。 回 鹿 た 若 11

が、 幹 三  $\mathcal{O}$ 役 せ ず、 期 法 臨 部 実 は、 生 時 律 満 候 昭 に 基 が、 特例という法律により新設された制度であ  $\mathcal{O}$ 補 陸軍 和 て同 者で、 生 十 そして同  $\mathcal{O}$ 八年 年九月に二期 て、 特別幹部候補生という制度は、今まで 年 兵 齢 昭 科 十二月十 は 和十 年 は 前 飛行 六 述 九年四1 ) 月 !と船  $\mathcal{O}$ 厄 に我 生 法 日 が 律 月に 舶 陸 Þ に 0) 軍 兀 ま 特別幹 二兵科につい ょ 現 た、 期 り 役下 生 満 昭 が -部候補 和二十. +士 入隊 五 官 補 歳 L · て募 以 年二 た。 生 充 · 上 は 及 た。 月 実 期 び に 別 生 服 在

以

上

0

 $\mathcal{O}$ 

中

隊

で

兀

期

生

は

約二千

百

名

で

あ

私

は

七

験 お む ね 体 中 5 検 等 は 査 す お べ 校 7 ょ 学 志 び  $\Box$ 年 願 頭 程 に よる 試 度 問  $\mathcal{O}$ をもっ 学 ŧ 力  $\mathcal{O}$ ح  $\mathcal{O}$ 7 者を対 な 選抜 0 --象と さ V た。 れ L 学 力 は 試 お

隊) 役 準 ŧ 特 -ずるも に 0 私 下 採 て、 に 達 用 実 士 入隊 官に 践 船 さ 小  $\mathcal{O}$ 舶 的 れ で、 L 豆 兵科 任 な た 島 た。 (候 ず 訓 中 0 ると 12 補 練 私達 陸 隊 採 に 生 編 軍 が用され 1 重 は 教 若 うも 成 点 軍 潮 育 を置 **(候** 隊に 部 た候 部  $\mathcal{O}$ 補 隊 隊 で き、 お 生  $\mathcal{O}$ あ ( 陸 補 お 特色 1 隊 生 0 おむ 軍 7 七 た。 は、 基 船 9 は 本教育をおこ  $\mathcal{O}$ 舶 ね 合 陸 特 中 年六ヶ 隊 別 軍 教  $\mathcal{O}$ 幹 育 を基 諸 部  $\mathcal{O}$ 月 学 候 目 な 本 校 補 的 に 生 を 現 11

Ļ れ 区 名 ず 隊 7 いた。 っに 中 武 股 振 御  $\mathcal{O}$ 七 不 人員 隊 撓隊 生 烈 肱 武 盾 誠 分  $\mathcal{O}$ 隊 隊 隊 隊 隊 隊 若潮 は六 下 れ しち (V)  $\widehat{\ddot{\mathcal{Z}}}$ (ふとうたい (しんぶた (ここうた (みたてたい 部 7 部隊 れ 0 組 十名となっ 1 せい せ 0 た。 織 いた た に  $\mathcal{O}$ たい 1 総 中 区 · · 二中 1 員 三中 隊 隊 六 五. 兀 は て  $\mathcal{O}$ 七 中 中 五 中 約二千 下 中 中 隊 隊 隊 隊 隊 1 · 隊 0 隊 に た。 は  $\mathcal{O}$ 各 百 区 名 隊) 区 区 区 で、 区 X. 区 X X 隊 をも 隊 隊 隊 隊 隊 隊 隊 が 各 中 カュ カン 五. か カン カン カン か <u>つ</u> 0 5 5 5 6 5 5 5 隊 五. て 五 あ 五 五 五. 五 五 構 は三 ý, 区 区 区 区 区 X 区 成 隊 隊 隊 隊 隊 隊 百 さ

陸 隊 軍 五. と 区 Ū 隊 て に  $\mathcal{O}$ 所 属 心 構 L え 7 を 11 体 た。 得 入 す 隊 る事 L た で あ 候 補 0 生 た。 は、 先 ず、 帝 玉

のれ カゝ 5 修 に 学ん 加 得 補 に、 え 生 だ て、 が 基 Ł 中 船 · 等 0 礎 とも力 舶 的 学校 兵として な 訓  $\mathcal{O}$ をそそ 練 教  $\mathcal{O}$ 練 の海上が 技  $\mathcal{O}$ 能 11 授 だ を、 業 作業、 0 時 更に一 であ 間 特 に る。 お 12 段 1 舟 کے て 艇 向 配 操 上 縦 属 Ļ 技 将 能 校

みやか 5 中心とし 容は は れ 予 迫 に親し 定 年 L 少の候補  $\mathcal{O}$ た た 精 戦 年六 むことを眼目とし、 時 神 態 訓 カ月 生ということで、 話 勢下との から 陸 軍 約 礼式 理 兀 由 令、 ケ か 特に 月 5 軍 刑 لح 法などの 隊内 候補 軍 短 縮 入勅 0 生 され 隊 日常生  $\mathcal{O}$ 諭 講  $\mathcal{O}$ た。 **\*** 義 教 教育 活 t  $\underbrace{1}$ 育 加 に 期 を す 内 え 間

9

地  $\mathcal{O}$  $\mathcal{O}$ に ほ 操 慣 教 ま 育とし た、 れることが カゝ 縦 法、 船 実 舶兵として必 技 手 て教え込まれ 旗 に あ 訓 たっ ま 練 ゔず、 て モ 須 は、 第 た。 0 ル 候 基 で ス 礎 補 あ 通 事 生 った。 信 一が海 項が学科と並 内 こ の を 燃機 知 り、 ため 関 船 行 に、 水 泳 舟 て実 舟艇 など 艇)

隊 我 島 る 話 Þ  $\mathcal{O}$ 話 0 我 を は 聞 大 変 員 が 先輩 る 部 くことが 隊 が、 で に 7 基 遊 あ 転 礎 びに 属 る で きた。 訓 さ ここら 期生 練 れ 中  $\mathcal{O}$ 水  $\mathcal{O}$ れ 話 上 或 た、 大  $\mathcal{O}$ る 特 部 内 その 攻要員とし 日 容は 分  $\mathcal{O}$ 先輩 先 人達 次 輩  $\mathcal{O}$ 達  $\mathcal{O}$ が لح カコ て、 おり 海 期 5 フ 上 極 生 Ć が 挺 秘 イ あ IJ 進 小 る。 F° 戦 或 豆

> うことで 台 湾 あ 沖 0 た。 縄  $\mathcal{O}$ 戦 場 に 出 擊 千 人 以 上 が 戦 死 た

絡 艇 は は 艇、 な 入 が 念 隊 カゝ あるそうだが  $\mathcal{O}$ 為 略 0 L た。 て間 称 海軍 0 ŧ 艇) な 12 11 という水上特 は 我 頃であっ が 震 陸 洋 軍  $\widehat{\iota}$ 12 たの ŧ  $\lambda$ 文艇 四型 で、 よう)」と が 未だ実: 肉 あるようだ 1.迫攻撃 物 1 . う を 艇 見 水 が 通 上 た 私 称 特 達 連 攻

水 上 た。 何れ 特 攻 に にせよ、 7要員 とならざるを得な 私 達 兀 期 生 も時 期 1 が Ł <  $\mathcal{O}$ れ と考えるよ ば 先 輩 達 う と 同 な 様

戦 場で戦 おそら Ę 戦 大 先 死 z 輩 れ た 期 ŧ 生  $\mathcal{O}$ は と思  $\sum_{}$  $\mathcal{O}$ わ 0 れ 艇 る。 に 乗 n 太 平 洋  $\mathcal{O}$ 各

八月 に広 子 あ そうい る。 爆 弾 六 島 が 日  $\mathcal{O}$ 落 え 船 市 ち、 舶 ば 内 通 我  $\mathcal{O}$ <u>二</u> 十 信 Þ 千 兀 田 補 数名が被爆 期 充隊 玉 生二千 民 に転 学 校 属 百 で べして戦 L 名 朝 た  $\mathcal{O}$ 礼 中 百 点 死 五 で、 呼 L + てし 中 昭 名 和二十  $\mathcal{O}$ がい ま 同 0 期 た。 生 年 た に 同  $\mathcal{O}$ 七 で 原 月

故い 郷 半 私 ば 達 に 帰 に 几 0 L 期 た て 生  $\mathcal{O}$ 訓 は で 練 昭 あ 期 和 る。 間 + 未 了 年  $\mathcal{O}$ 八 ま 月 ま + 除 五. 隊 日 とな  $\mathcal{O}$ 終 ŋ 戦 止 日 む を 迎

生 達 そ はれ か 戦 5 死 数  $\tilde{+}$ L た 年 先 0 年 が 同 流 僚 れ、  $\mathcal{O}$ 生き 魂 を 慰 残 0 8 る た た 期 8 生 東 か 京 5 を 几 期

る供養を実施しております。しかしながら我々の年齢も超殿に集合し、本殿に昇殿し戦死した先輩同僚の英霊に対す 心に若 会を開催する毎年十一月の第二日曜日には、靖国神社参集 会長を主力として、 れるところであります。 高 でも年二回、 齢 に達しており、今後いつまで続けてゆけるかが心 潮 会 (陸軍船 毎年七月十三日の「みたま祭り」と若潮 船隊) 戦死した先輩 を結成 同僚の皆様に対し、 Ĺ 会長を選出、 そして 配さ 会総

# 1 軍人勅諭(ぐんじんちょくゆ)

人勅諭は、一八八二年(明治十五年)一月四日に明治天皇が

陸 軍

海軍

の軍人に下賜した勅諭である。

## 十六 父から聞いたこと

## 吉祥寺南町 芝 綾子

教育を受けそこで兵士 兵 にして来た人でした。 を 志 は 軍 願 隊 し て に入営 衛 戌 L ( え た頃ガリガリに痩せ *\* \ 0) じ 生死と家族 ゆ 病 院  $\mathcal{O}$ 陸 思いを目 軍病 て居たので 院 の当 お 衛 て、 生

襲の爆 にさせ 海軍 力に 仕 備 子の様に甘えていた男の子が 「高 事の 隊 父 戦争は終盤になり、 人は京浜 0 0 長 射 いて身 関 7 将 (撃を工場敷地内で受けて九死に一生を得、 [として着任しました。]と突然尋ねて来たそうです。 砲 ?係で、 は 校に詳しく説 では 工 とても太 けない。」 を以って体験したので、 業 毎日各工場を廻ってい 地帯  $\mathcal{O}$ 父の 明して、兵士の家族の悲しみを思い 八刀打ち と強く意見をしたそうです。 主立った軍需工場へ石炭を納める 新 婚 「今度、 出 時代に毎日 来な いから部 中 その話を尋 たので、 島 飛行 遊び 第 機 下 に来 を 爆 ね 工場の守 て来た 無 弾 口 て、 駄 の空  $\mathcal{O}$ 威 息 死

将校 々は が 島 こうし 現 飛 包帯 行 機 でグ て無 そ 工 場 のまわりに部 ル 事に生きてい が グ 爆撃された翌日、 ル 巻きにされ 下が集まって来て 5 れます。」と父に 松 父が現 葉杖 を 場 つい に見 「お た 向 知 舞 蔭 人の って 11 で に

> 見張 私と見 た。」 報が出ると全員各部署に就いたので、多くの 安全な場 L 涙 がを流 たと聞いたそうです。 おじさんに り の 部 と礼と報告を受けたそうです。 張 L り役 所 な が へ移動させたの 下 5  $\mathcal{O}$ 言 を死なせてしま 部 わ  $\Box$ 下 れ Þ 一人だけ部署に た に 0) お礼 で、 で私 警 を言 は 警 0 可 け 報が出ると責任 たそうです。 残 愛相 が 陸 で L 軍 て、 済みまし な事を  $\mathcal{O}$ 他 死 守 傷 備 の ししま 者を 隊 部 知 は 下は 者 人 は

密か を予 外国 例 は ていたので、 5 日 です。 V) 本を再生する為に有能 の情報により、 父は仕事柄、日中戦争の頃 けな ,測し、 航 に短波放送で海外の情報を収集してい 路 の航 と強い信念を持って行動した中 更に心ある軍 日本の敗戦は遠くないと予測し 員 介から生 当時  $\mathcal{O}$ 一の海外 日 の上層部 な特に若者や人材を 本 の現状を相 から既に 事 情  $\mathcal{O}$ を 人の 聞 軍 1 当正 需 集まりの て 工  $\mathcal{O}$ た友 戦 場の てい 確 に 争 死 人等 現場 まし 把握 な 0) れ せて 拡 は た カン 大 で

7 射 瓦 吉祥寺  $\mathcal{O}$ が 弾 丸 割 れたそうです。 が二発発 南 町  $\mathcal{O}$ 我家 射さ  $\mathcal{O}$ れ 前  $\mathcal{O}$ 道を歩  $\overline{\mathcal{O}}$ 中  $\dot{O}$ 1 て 発 ١, が た人に 屋 根 瓦

式 が が 小 あ 学校に入学する前 入学した年 から 年、 国民学校と名 紀 元二千 六 百 年の が 変り、 大きな

年余でしたが学童集団疎開も経験しました。制度が変る毎に二通り受けた特異な経験をしています。半一期生として新制高校へと、戦前と戦後の全く違う教育をの年の十二月に太平洋戦争に突入しました。新制中学の第

#### メ 私 IJ の カ 頭 1= В 落 29 ち の た日 爆弾 焼 5 夷弾 孫たち が の 証

#### 殿 正まされ

言~

本土 学生 で片足 戦 皇 0 車 ·徒 場 争に 決 が サ 勤  $\mathcal{O}$ に に 九 戦 録音 整 を 兀 1 工 労 1 だとい ンジン . 負 負 た。 動 列 レ 五 傷し け 放 員 年 L ン た 送 に 7 が 県 八 って 鳴ると、 た。 を積 作 は ょ 立 月 と誰 り、 業 膳 + 1 小 意 正  $\lambda$ 所 五. 中学二 るときに 味 午 で 夏休 屋 カゝ 日 が 裏 倉 か 不  $\bigcirc$ 庫 4 言 5 明 Ш 重 私 **7**う。 であ 大放 を返 年 0 に カゝ は ラジ 避 5 に 滋 送 倉 上 0 難 疎 冗 賀 才音 た。 庫 談だろう、 を す L 開 県 うる。 へと運 聞 転 大 中学生 声 け 入学 雑役 津 を とい 女学 市 聞 Š 夫 L  $\mathcal{O}$ と高 う。 生 لح てす 海 11 てい れ が 敵 L 軍 昭 て大 等 カゝ 機 爆 魚 る。 弾 空 5 女 和 雷

襲

八

天

学

工

11 磨 いく手を な 後 は、 止 女学校 8 á. もう魚 生徒 はは仕 雷 事をし を作 : る 材 な 料 11 0 が ジ な ユ ラ 熟 ル 練 3 ン 工 ŧ を

が が 野 逃 原 が家 W げ 遅 化 ぶ は、 L れ た。 て て 逃 六 死 体で げ 神 月 る。 五. 戸 掘り 市 日 に とい 郊 出 焼 外 され 夷 、ったら 御 弾 影 た。  $\mathcal{O}$ 町 集中  $\mathcal{O}$ 「お 住 わ ·投 じ 宅 L 下に 街 は V) ち で、 足 ょ が Þ り、 悪 袓 W 父 さか ぼ 焼 鶴 < 吉 け

> 栄二 叔 ここに 父宅 に 居 泊 る。  $\Diamond$ て お t 前 ららう。 5 逃 げ え。 そ 0 夜 は 焼 け 残 0

> > た

だ。 お) ける。 父米一 7 9 姉 た。 美佐 そし 11 滋 た。 は、 賀県 て六 子と私 (よね 姉 兄良夫は、二月に 姫路  $\mathcal{O}$ 草 夫久 月 津 連隊  $\mathcal{O}$ 1 三人が 、 ち ) 駅から徒 徳 姉 茂 富 学徒 は大阪 雄 貴子 は 歩三十 の嫁入 姉 動員 病 転  $\mathcal{O}$ 死  $\mathcal{O}$ 親 嫁 に 職 L · 分 の 入り てい より入営 戚宅に下宿 り  $\mathcal{O}$ ため 先 治 先 た。 田 名  $\mathcal{O}$ (it 兄甲子 古 離 中 だ。 れ して仕 家 屋 るた) に カ は 世 雄 5 母 転 帰 話 タカと 事 かか 村 げ に を 京 込 ず な W

ンネル 当 車 カン 朝  $\mathcal{O}$ は、 · で 通 義弟 ŋ 七 この だ、 時 を通 三十 白 修 勤 米 す Ł 戦 有 飯 過 る。 学徒 争 難 分 する にジ Ď カゝ は から、 動 軍 満 間、 員 閥 ヤ 員 工 場 中。 と財 ガイモだ。 0) 熱く真っ黒な煤が鼻の穴をふさぐ。 蒸 閥とが 気 内 私 で は、 機 関 時間 農家だから食えるも 弁当を作 始 車 8 12 た 授 やっと乗  $\lambda$ 業を受ける。 だ。 0 ても れ لح 7 5 う。 昼  $\mathcal{O}$ 汽 姉 ば 弁 1

ょ = 生 れ لح 0 コ  $\mathcal{O}$ 転 校 渡 癖 生ち す。 に生 ŋ コ L て、 意 度と返してくれなか ょ 地 気 0 下 べだとい 「そうか貸してくれる ح 鉄 サ 来 کے 11 う。 とい 栄二 わ 私 叔 は れ 父に 0 親 分にこの 倉 頂 庫 1 W 裏に か。」とい た 本だ。 本 行 お 親 t . う。 分 L 転

 $\mathcal{O}$ 2 滋 私 十 久 たが、 たち 賀県で 田 月 徳 に、 争に 畑  $\mathcal{O}$ を体 はそこに住んだ。 親 初 稲 戚 負 と復 験し めて農家の暮らしを体験 松 け 麦、 原 7 員 た。 春 ŧ した兄が、焼け 馬 男という同 鈴 琵 薯 琶 焼け跡に、 (i 湖 干 れ 級 拓 7) 跡 生 工 し が 事 野 に ょ し 菜 居 バ  $\mathcal{O}$ た。 を作 ラッ た。 じ 勤 労 Þ が 僅か三ヶ ク 体 奉 0 いも)、 て を 格 仕 食 建 が に ベ 7 い行 月 大豆 た。 て、 < だ

する。 そし き 備 を  $\mathcal{O}$ 爆 起 カゝ できた。 こ 返 だ。 噴 弾 な 油 る。 て六 が 襲 11 1 脂 て 落 体 母 油 焼 月 脂 5 い 夷 が 何 西 験 だか を 持 る。 弾を 黒 は、 ミシンをそこに 五  $\bigcirc$ 空が 日 煙 ら水で 三月、 硝 投 朝 が 0 T 燃え 煙 下 上 逃 が で、 L 神 た。 て赤 げ は る。 神 戸 市 暗 消 戸 る 埋  $\overline{\langle}$ え 郊 < が  $\mathcal{O}$ 我 立めた。 かない 発が 外 焼 な が 連 り、 に三 家 夜、 け 花 は 空中で三十六 7 空襲 息 後 壇 鉄 百 1 でこ る。  $\mathcal{O}$ 苦 筋 五 ガ 整警 ラス 防 校 + L 舎も 機 のミシン 空 1 五. 報 壕 が 月、 で、 が 窓 発 は、 逃 三 割 げ カゝ 12 千 n 近 夜 無防 5 た。 半 は る 分  $\vdash$ 所 火 解 に に 生

0

壕 動 6 走 か か 逃 る。 5 げても な  $\mathcal{O}$ 掘 11 0 肥 腕 ŋ 塚の 出 逃 に お 母 げ 火 L お父さん 7 傷 て逃げた。 さんと女学生と幼 Ł L た В のだ。 29 は防  $\mathcal{O}$ 女学生 編 空壕で 金持 隊 が ち は 児 繰 **直撃弾** ŋ 痛 を  $\mathcal{O}$ 親 生 11 返 駒 痛 戚 L を 家 1  $\mathcal{O}$ 焼 頭に受けて、 と 泣 男  $\mathcal{O}$ 夷 が き を な 防 が 空

> 踏 敷 W に で 居 れ 走ろうとし ず、 石 屋 7 ||ŧ 12 足 体 が を ŧ 沈  $^{\circ}$  $\Diamond$ れ 7 1  $\Box$ た。 が 渇 道 路  $\mathcal{O}$ 油  $\mathcal{O}$ 炎 を

と炎 だ 2 市  $\mathcal{O}$ ようと、 L た。 た た市 民 0 家 T そ を 戦 は メ が  $\mathcal{O}$ ル 夜、 IJ 民 もう 焼 争 消 くことだ。 力 は ア 地 は え 本 戦 メ 上 な 土 軍 リカ 決戦 ゼ まだ戦えると思 え  $\mathcal{O}$ 11 わ で、 叔 な 戦 口 が ع 軍 略 メ 町 父 11 と思っ 私を 庶 Ì 1 が が  $\mathcal{O}$ 爆 三階 う 民 調 擊 1 戦  $\mathcal{O}$ 場 追 掛 ル 査  $\mathcal{O}$ 戦 で、 た。 け 目 に 0 で L 意を 0 た てくる。 寝よ な 声 標 7 結 は、 る、 だ に 這 殲 7 が ŧ, 果、 11 うと たと 滅 木 口 残 直 ŧ ること を竹 虐 L 接 (せ わ 被 は が な 兀 7 んめ う。 Þ 町 で 空 ŧ 害 歳 'を焼 で 出 を 反 爆 2  $\mathcal{O}$ あ 受け 来 私 応 か チ た 0 す L カン 5 が 口 た。 る 逃 チ れ 市 体 た 事 民 カン げ 験

## 十八 黒板は木の枝に

### 吉祥寺東町 竹山 悠紀子 たけやま ゆきこ

飛ば だ!私はここに ゆ ん L 年 を たの 前、 訪 だが れ 六 十 年 住 遠 振 W 陽 りに でい くから空気は しん 、たのだ。 遼寧省 よう 撫 順 石炭の臭いが 旧 奉天) (りょうねい からタクシー しょうぶじ そう を

こでは 小学校、 ませ とのことで巡る場所も心得たものだ。 引 き揚 ん」と流暢な日 何 父が でもその げ 0 働 貨 物列車 11 てい まま残って 本語のガイド。 た満鉄 が 出 発した 病院、 V) る。 撫順 私 そして高 「当時と殆ど変って  $\mathcal{O}$ 駅、 様 な観 姉 台の た 5 光客が多 社.  $\mathcal{O}$ 通 宅 0 ک V) V) た

祖 寒い 母 隊 ぞ ルビンと移 父の 進。  $\mathcal{O}$ が 北 転勤は三年毎でブ 三人でト 満 兄 口 人で「女を出 州 風 シア兵がガタンとドアを開 シア兵が来たよ!」 育 0 制服 動し 5 吹い イレ  $\mathcal{O}$ を着た坊 私たち」 たとて 撫順 の奥にある隠れ部屋に入ったことも せ」とやってくるのだ。 ノハト、 で終戦を迎えたのだった。 主頭 何時 おじけるような子どもじ 遠くに兵隊を見つけて私 の母は押し入れに隠れる。 も歌っていた満 横道河 け 子(おうどうか F ィ わ たしと 内 州唱 を  $\bar{\mathcal{O}}$ 一歌だ。 ぞい 姉、  $\mathcal{O}$ な

> n 7 W な に る 怖 を 気 持 配 かったことだろう。 って立っ を今も覚えてい た。 当時 る。 十三歳 兄 は 父と夜 中 学 警 年 寸  $\mathcal{O}$  $\mathcal{O}$ 兄 員 は、 とな

て逃 たの いて ったという。 は戦後引っ張られて留置所に入れら 逃げることに  $\mathcal{O}$ が尋問 敗 だが、 で げ、 微戦とな 火をつけ、 既にいなか 内容だ。ソ連軍は終 命令を下すはずの れ 中 な ば、撫 その間に通化 国人を殺すつもりだった なってい 順 った。 の日本人は た。 青 戦 酸 関 (つうか) カリの の二週間 東 近く 軍 は れ、母は差し 管 0 というところ 我 前に攻め込ん 理 河に 0 責任 だろう、 Þ 民 ガソリン 間 者 入れ だっ を と言う で来 に た 棄 7 通 父

かれ、イー、アル、 ちに たパ せら 日本 味 車 つ越した家ではその後、 (ゲーペー は 座 れ、イー、アル、 我が家は社宅の中では上等 ] 人に 敬礼 12 れ 塩 なって白菜やネギ等の野菜と春雨 て 口 け 危 を返していた。 11 (八路軍 ゥ たと 害 な 0 を加 司令官 だが、これ 11 えては う 私は サン、スーと点呼で番号を言う兵 毛沢 以  $\mathcal{O}$ 内戦が 可愛がら 徳報 国民党・蒋介石 宿 東 なら がとてもお 舎に 軍) だ (怨)。 ない 始まり、 なり  $\mathcal{O}$ ったらしく、ソ れて朝 兵隊 という厳 兵 即、 隊 い たちとも同 代わ 軍 た 礼 追 豚 5 で . О い は連 連隊 L ってやっ 肉で鍋を作る。 は 出 V 連 「され 7 指 長と当 5 隊 軍 ||居し 令 8 長 G て 隊 Ρ 1 来 で た抱 引 U

は 戒 五.  $\mathcal{O}$ 心は ずも ツと入 上  $\mathcal{O}$ 12 全く な 私 は か に れ 米 な 0 事 を オ た。 か 情 ジ 詰 0 は Y 8 た。 生 何 に た にする。 ま 靴 £ れ 口 知 下 た土 らされ シア が 私 縛 は 人に対 地 ŋ 毎 柄、 てい 付 晩お け 私に外国 しても なかったし、 7 椀 あ ý, 持 参で 人に 洗 お わ 理 相 対 ず する警 解 伴 鍋 する L 12 た。 ザ

たない 子どもを失い 病院 は にしたという。 (麻 気 そ 袋) 小学校が収容 で働 0  $\mathcal{O}$ 毒 頃 だった、 き、 を身にまとってやっ 父 赤 北方から は 痢、 気が 逃げる途中で身ぐるみ剥が 院 所とな 長 と言 狂 疫痢その を降 った様 避難してきた日 1ってい いってい 格になって 他 な と撫 た。 人 病 たが 呆け 気 順にたどり 0 中 本人の )蔓延、 てしまって足 毎日 国 人院 悲惨. 、され、 それ 救 着い 長 な光景を目 護  $\mathcal{O}$ 7 を 下 た 腰 ] Ū 人人々、 それ  $\mathcal{O}$ タ て 同 立 1 じ VI

たと で 中 父より 玉 は 専 門職を 若 11 方 たち 持 つ日本人を帰国 は 八 年 以 Ĺ 一残され、 させなかった。 各地 を転 特 Þ とし に 医

持 所 兄 うさな黒 って なっ た 和 ち <u>二</u> 十 通 う、 板 7 は を を見 七 写 持 る 力 年 生 0 9  $\mathcal{O}$ 月  $\mathcal{O}$ スタ で、 間 け た先生に 春 先生 神 社 学校 学校 1 ル は が  $\mathcal{O}$ が  $\mathcal{O}$ 黒 0 境内 始 V 青 な 板 空学 カュ まり私は を掛 て歩く。 に 0 画 たそうだ。 けら 級 版と組み立 だ。 境内に 小 れ 学校に 朝 た。 礼 そこが 学 続 が 一て椅 校 入学 終 < 林 わ は ると  $\mathcal{O}$ 子を 収 L た 中 容

> ラスの 学芸会も 7  $\mathcal{O}$  $\mathcal{O}$ カ 1 様 1 るが う 友達が突然 な 人数 所 訳 が学校 開 我 は か どとん 々に 'n 寒くな た。 7) になった。 危険 どん減っ なくなる、 当時、 0 はな 7 来 集 かっ た頃、 そこにはオル 団 引き揚げ 1 登下校をしてい 0 坂 た。 ただ、 下  $\mathcal{O}$ が 暗 始 ガン 親 が 0 が た 知 た と 記 5 ア  $\mathcal{O}$ 台 せ あ 憶 ] な ŋ 11 L 1

て

た。 を沢 荷 0 た。 翌 年 物 甘 Ш は 水を ζ, 焼 リ  $\mathcal{O}$ ュ 夏、 きイ きれ 確保するため ツ クひ つい チゴやミカンの V) とつと決 に な色を思 我が家にも引き揚げ 0) 重要な任務だ。 め 1 6 出 形 す。 れ を て したド 1 た。  $\mathcal{O}$ 口 母 私 許 はビ ツ はヤカンを持 可 プ が を ス 下 用 ケ ŋ ット 意 た。

5 途 車だったが 7 井 L 転 き 海 止 て、 ま 中で度々 歩 は れ 手 医 我 師 け た場 って  $\mathcal{O}$ 九 Þ 中 兼引 は た + 日 国  $\mathcal{O}$ セ 所 7) 撫 か 三 ると 止 は は 率 順 ン 人に握ら 駅 私 ま 者 チ 船 日 だけ だっ う。 匪 2 般 に 位 底 たが、 で 集めら 賊  $\mathcal{O}$ で は コ せ動 たのでほとんど会うことはなかっ だった。 荷 無蓋 そ 口 \* 物 その とれ、 2 島  $\mathcal{O}$ 置 かしてもらっ 車 上 き場 に でも、 度に皆で腕 に 着き貨物 貨車に載 むが 襲 は わ A 他 11 もう安心、 シ れ L 人 や る危 せ が 口 船 たのだそうだ。 時 5 11 が に だ。 乗っ 険が 計 ħ る。 敷 他 た。 1 父は 皆は 家 あ 貴 7 た 金属 病 族 あ 0 が 軍 た。 病 で 人 ŋ 与え は を そ 什 天 0 渾 箱

遺 体 船 を海  $\mathcal{O}$ 中 に沈 で亡くなられ め、その 周 た方が り を一 7 周するのだ。 らして水中葬が ボーッという 行われ た。

汽笛、あの音を忘れない。

開 北 開 をいくつも見 多摩 したままだった。 面焼け野原 引き揚げの皆様、 郡 私 は 武 蔵 武 で所 ながら東 蔵 野町吉祥寺に住むことになり、父は林医 野 第三小学校二学年に転入した。 々バラックが建っている程度、親 別 の親 御苦労さまでした」という立て看板 京を目指し駒込の 類の世話になり、 親戚を訪 家探しをして ねたが、 脱戚は疎 院

### \*1 背嚢(はいのう)

軍隊で徒歩部隊の将兵が背負う袋

### \* 2 匪賊(ひぞく)

集団をなして、掠奪・暴行などを行う賊徒」を指す言

# 3 **DDT** (ディー・ディー・ティー)

見され、 になり、 るようになった。 有 機化学物質のひとつ。 第二次世界大戦前 日本では一九七一 後に自然環境 年に 後から殺虫剤として大量に用 九四〇年代に殺虫 使用が禁止された。  $\mathcal{O}$ 悪影響があることが 性 0 あることが 明 1 5 5 カュ れ 発

# 十九 戦争のない平和な世の中へ

## 八幡町 佐々木 由里子

ど

に

ち 家 5 L 族 せ Þ ま 昭 で  $\lambda$ て L 和 疎 が 行 +開 年 0 をし た 生 た は じ  $\mathcal{O}$ 事 ま ま で、 8 が れ じた。 思 7  $\mathcal{O}$ 早 私  $\mathcal{O}$ 1 は、 遠 目 出 に さ 足 れ 埼 大  $\mathcal{O}$ ま 日 玉 田 一県の す。 に 区 空 蒲 三 熊 襲 田 谷 年 が 0 に 生 あ 玉 民学 知  $\mathcal{O}$ ŋ 時 人 を 時 校 頼 間 に お 0 ば を 入 遅 学 7 あ

教 をし 跳 < は 暗 7 れ を あ び 体 記 科 ド 通 と音 L 書 り 0 箱 操 裸 を 7 ま 7 同 を B が 足 ま 教 レ でで L 階 使 出 ミファ…」 室 鉄 時 L V を読 た。 た学 棒 0 来 授 に に Þ 業 7 など苦手 な 行 校には を受け、 ったことを ١, 教 きま 1 科 ことに ま 人 などは l 書 は す。 た。 だ 奉 入 学 は、 女学 なり 安 0 中 覚 出 使えなく 授 に 殿 た 全 えていい ŧ 校 玉 は 私 来 業では、 が どこで 天皇 は な に L あ ŋ, た。 入 1 、なり、 と る ま と 放 す。 ŧ 課 71 12 特 教 皇 毎 に 育 同 後 日そこで わ は 后 また、 に れ 勉 体 「ハ 勅 ľ  $\mathcal{O}$ で 写 強 操 て 語 = あ 生 だ は لح 真 11 懸 ま け ホ 音 九 る が お 重 命 L で 視 楽 九 玉 飾 じ た。 ž  $\vdash$ 練 な で  $\mathcal{O}$ 定 ぎ 0

に 兵 0 隊 さ 7 行 W 0  $\mathcal{O}$ た 食 り、 糧 堆 す 肥 る 作  $\mathcal{O}$ だ り と  $\mathcal{O}$ ため 1 に ナ 草 ゴ を 取 ĮΙΚ り 0 を て干 て 学 草 校

> 画 ŋ W れ L ま ぼ ŧ  $\mathcal{O}$ 時 修 L  $\mathcal{O}$ た。 間 向うとこ 身 人 何  $\mathcal{O}$ に 学 飛 点 キ 校 行 数 口 ち 機 の授 12 لح を 5 な 1 しで る 描 業 う کے 向 目 11 Ł き合 た 1 戦 標 り、 争 わ で 学 れ 0 色と て、 た 校 お 習 0 に 字 な で 持 手 り、 で 旗 頑 0 信 張 は 7 号 女 ŋ 11 必. きま ま  $\mathcal{O}$  $\mathcal{O}$ 勝 子 練 L た。 習 で t

Þ

田

か図

本

土

決

戦

などと書きました。

と銃 < な うこと、 覚 敵 ま 香 が 授 科 (ちちは -練に、 <u></u> 空襲 命 ぼ L ま ŋ 業 悟  $\mathcal{O}$ 朝 た。 ま 紉  $\mathcal{O}$ くら カュ 本  $\mathcal{O}$ 礼 لح 時 が 切 れ L 0 土  $\mathcal{O}$  $\widehat{\mathbb{C}}$ は とかけがえに、 た。 少 時、 書 間 激 命 り ぼくは陸  $\mathcal{O}$ ゆうけん) を捨てて頑張る 込み隊」 11 が しくな 空 玉 0 足 7 花 昭 ガ 高 民 IJ 和 り あ  $\mathcal{O}$ < 9 なくな 軍、 熊 二十年 版 0 天 2 など、 た 刷 0 谷 皇 陛 日 授 切れ 若鷲に、 後に続い ŋ  $\mathcal{O}$ ŋ, 業 忘 百 0 八 下 丸 子ども 味知れ 月 中 んだと教え込 人 歌 大 れ 0 . (T) æ 詞 人 に 夏 £ くはぼくたち 御 旗 休 千 やがて大空とびこえ が せ 避  $\mathcal{O}$ は を立 為 た と敵 人切 くば め 4 難 人 に ぞ、 ず ち t が 敵 てる。 死 Ź 指 学 ってやる、 読 0 が 6 ねと などし · 令 部 お 飛 校  $\lambda$ 戦 れ  $\lambda$ ハで、 先 に 争  $\mathcal{O}$ で 行 が だし 教 行 に、 君 1 教 7 に 12 機 た きま 行 え くように え 静 は か た と た 7 勝 出 5 死 日 海 0 < て ピ め ぬ 本 か 父 ち 茶 軍 た。 闘 n  $\mathcal{O}$ を 刀 予 抜

八 月 + 兀 日  $\mathcal{O}$ 夜 11 0 もと違 う空襲 で L た。 外 に 出 7

ると、 ると 5 わ  $\lambda$  $\mathcal{O}$ 4 え 桑 ぼ 7 で る 上 畑 防 沂 上  $\mathcal{O}$ て つ 空 青 す 何 所 照 で て べ 壕 t 明 11  $\mathcal{O}$ 1 て 晚 稲 に 大 弾 持 ま 明 が 焼 た は 家 が L ず ż カン け 落 入 た こげ とさ チ に 5  $\lambda$ L ま 逃 彐 な  $\mathcal{O}$ お L 口 て げ 11 n た。 で、 チ ま ま じ 昼 ž 彐 0 間 L 黒 た。 す 口 W 前  $\mathcal{O}$ く柱 ぐ逃 لح が 方 ょ 燃 歩 う  $\mathcal{O}$ だ き げ 今 軍 え に て け な ようと 明 需 日 残 が は る 工 11 場 る 0 5 11 た ま ŧ  $\mathcal{O}$ 1 0 を見 家 ま わ わ ŧ 鷩 Ġ ŋ لح 0 れ 1 違 赤 な を 7 に が 見 あ う 田 VI

事

は

全

部

墨

で

め

り

つぶ

すよう

1

わ

れ

ま

L

た。

 $\mathcal{O}$ 

記 ま

11

そ 思 た 道 ほ 炊 11 れ ŧ 11 に くると لح き で  $\mathcal{O}$  $\mathcal{O}$  $\mathcal{O}$ 0 0 7 夜 だ す 出 は ま 出 11 W か L が 明 4 J. 行 ま لح ず W 7 ま  $\mathcal{O}$ L 忘 今 聞 き、 ま 4 中 あ 焼  $\mathcal{O}$ 0 け た。 きま で 三 おに ると て あ る れ け 夜 は た。 て、 た 布 る 11 L 大家さ ぎり + ŋ どこに ると ば L 事  $\mathcal{O}$ た。 らく 六 に は 何 私 が 発 開 を た 出 と  $\mathcal{O}$ L 食 切 来 t 泊 事  $\lambda$ ち 幸 が カュ 飛 ま ベ ま で て は 11 な れ 11  $\mathcal{O}$ 考 る 私 び な せ え 戻 お 知 か L どを えて た。 散 0  $\lambda$ な  $\mathcal{O}$ 0 じ n  $\mathcal{O}$ ž 7 で 合 た 1 通 ŋ カコ 焼 ک 拾  $\lambda$ 近 L 臭 来 11 11 0 た。 夷 ま  $\mathcal{O}$ 7 < 0 1 ま 街 が n 家 1  $\mathcal{O}$ 弾 て が L 様  $\mathcal{O}$ か L た学 家 き 焼 た。 た。 子 に 中 が らどう そ を 間 に ま け 11 を 飛 歩 校  $\mathcal{O}$ 4 見 借 L 跡 0 街 た。 き K は ま に ま L  $\lambda$ ŋ  $\lambda$  $\mathcal{O}$ さ 燃 で ま 行 で 中 な た な 行 やら 燃 落 き、 せ え 中 Ł は が 5 0 ち、 1 な え 5 て 7 Ш 鼻

思 議 な 事 今ま で 堂 Þ لح 習字 を 書 V 7 11 た  $\mathcal{O}$ に

> 焼 な け 0 出 X L n ま た 11 あ ま لح L は た 字 が ち ぢ ま り、 小 さ な L カン け

> > な

<

7

L た 敗 戦 と 1 を わ む か れ え、 教 科 先 生 書 か  $\mathcal{O}$ 中 5 今ま  $\mathcal{O}$ 戦 で 争  $\mathcal{O}$  $\mathcal{O}$ 事 戦 P 争 は 神 間 話 違 な 0 て

る な 7 0  $\mathcal{O}$ 1 戦 た を た 争 事 防 兵 が で ぐ 隊 終 す。 た さ わ 8 W 0 て 電 が 7 良 灯 なく に か 黒 0 たと思 な 1 布 0 た を か 事 0 たの ぶさ な 夜 は くな 学 明 ŋ カン 校 ŋ で 明 が 11 ば ŧ れ 0

記 間 に ま 1 出 で 新 は し た、 た。 来る を 題 ま 話 は 制 戦 教 育 争 L が が 中 等、 た。 う て 会 学 天 を  $\mathcal{O}$ 出 主 覚 (まく 皇 内 社 に L 権 る 今まで えまし 高 に な 容 か な は 在 まとま ると 民 5 校 人 は 入 1 ょ 社 間 入 事 た く覚 内 試 知 す を す に 民 が る時 5 5 な 憲 主 に 容 0 は な な が 法 え 0 主 か そ たこと 7 全 に り は 詳 カュ 11 義  $\mathcal{O}$ お 労 書 変 0 時 面 L 問 ŋ < < 講 た は 働 か 男 <u>.</u> 題 ま ように 和 事 協 書 n 女 が 教え た 同 が 冷 約 カュ L か 試 た。 事 却 を れ 権 験 結 لح て 期 た を 単 1 な どと 言 独 ろ 間 ぶ 社 Ł 教 憲 出 لح 会科 わ 法 講 1 を 5 わ ま 置 カコ ŋ 共 れ 和 ろ 11 t ŧ 書 た ま 教 か  $\mathcal{O}$ た。  $\mathcal{O}$ لح カュ 労 教 L L わ た。 で لح れ 使 科 り 11 日 が 本 ま 暗 う 7 間

て 障 分り 害 者 ま に とっ た。 て、 富 戦 玉 強 争 兵 中 とい は 大 変だっ う考え 方 たこと が 戦 争 大 人 行 に け な

った時、 ない さくなって暮らしていたと聞きました。 食糧 難で 障害者は、 障害をお持ちの方が、 配 給物を分ける時も、 家族共、 大変苦し ゴ クつぶしといわれ、小 **\**\ 思い ある集まりに行 をしたようです。

戸籍がありません。」
う理由から私の戸籍は抹消されてしまいました。私には「障害の子がいると分かると、まわりの目がつらいとい

とお話しをされていました。

したが、 来な 戦 戦 かっ 争では精神や身体に障害をきたす方がたくさんい 争  $\dot{o}$ 戦時中、 たの な 11 です。 平和な世 障害者の方は人間らしく生きる事 人権も守られないのです。 の中が続く事を願っています。 が ま 出

# 二十のの時私は十歳だった

| 中町 |     |
|----|-----|
| 岡  | おか  |
| 君代 | きみよ |

○歯の根ガクガク早春の空紅蓮の火

(三月十日東京大空襲を三鷹から見る)

○父丹精の青きトマトにかぶりつく

○燈火管制春灯とはほど遠く

○いもの蔓ゆでてひと日の食事とす

(戦争終われど飢える日々)

○空襲警報手早く服を春の闇(中島飛行機の空襲)

○卓袱台の藜のおひたし旨し旨し

○夏の畑

「ずんべら」という雑草喰ぶ

○上野駅地下道春宵人の群(富山県伏木へ疎開

○秋の校庭頭から DDT浴び皆ま白

○昼休みべんとうなくて野蒜喰む

○春燈やむさぼるように本を読む(明るい電燈が戻る)

○「じょう葉めし」木の芽とわずかのごはんつぶ

○焼野原棒杭ばかりの東京よ (三鷹に帰る)

○春浅し混血の「ディアナちゃん」今いづこ

○進駐軍

ハムのような顔に春陽さす

## 一十一 原爆の落ちた日

## 現南町 三浦 澄

離れた。 終了 局 0 た。 は 昭 また、 後、 悪 和 地 化 +、疎開 方に親戚 L 九 縁故の てい 年夏、昭 といって小学 た。 などの な 和 当 人は 十六年にはじまった太平 時、 あ 生は 集団 る人は縁故 私 は ]疎開 全員都会を離れることに 成 蹊 لح 小 11 疎開とい ·学校六年 って 集 団 って縁故 洋 生。 .戦 で都 争 学 会を  $\mathcal{O}$ 先 な 期 戦

は、 る。 た友達と離 母が生まれ って、家では親兄弟と、学校では一年生の時から机 原そうめ (ありえ) 私 平成二年に噴火した雲仙普賢岳の麓にあり、 は、 長 れ 育ったところであ 町という小 h 崎 離 O県 れ 生産地として少しば  $\mathcal{O}$ になるのが本当に辛かった。この 島 原 さな 半 島 田 に る。 舎町 あ る現 7)  $\mathcal{O}$ ざ 叔父の家に疎開 かり名 在は 疎 南 開するときに 前 島 が 原 最近では 売 市 育家町 を並 れ 0 した。 て 有 ベ な 家 い

報が 0  $\mathcal{O}$ 頃 鳴り響いた。 和二十 そのような小さ る横穴式 车、 太平洋 防 その度に防空頭巾 空壕 な -戦争の 《に避 田 舎 難 戦  $\mathcal{O}$ L 町 局 た。 に は 上空を米軍 Ł 更に を被り、 毎 悪化 晚  $\mathcal{O}$ 近 ように L くの  $\mathcal{O}$ てい 爆 山 墼 空 た。 一襲警 機 に 掘 В

> 期 う日本 崎 のような時 1 29 であ たのであろう。 市やそ  $\mathcal{O}$ 編 0  $\mathcal{O}$ 隊 た。 勝利を信じ  $\mathcal{O}$ が でも、 周 わ 辺 が  $\mathcal{O}$ t やがて 迎え撃つ日 軍  $\mathcal{O}$ てい 需工 顔 に 神風 た。 場 通 を爆 0 が吹く、 し 本の空軍の 7 カゝ 撃 1 し、 に行く通り く。 間 日 恐 違 本は必ず勝 姿は全くな 5 く上 なく戦争 道 に 海 うと な カ 5 0 そ 7 末 1

雷 などと大人達が呑気に話し合ってい 雷じゃなかろう。 11 た。 のような音がした。「こがんよか(こんないい) 八月九日、その日は晴 午前十一 時 過ぎ、 B29でもやっつけたんじゃなかろうか 天で暑い Щ の方で「ゴ 真夏の太陽 た。 口 ゴ 口 が 照 ŋ 天 0 気に け لح 7

時に な うかと話し合っていたが、何 所 空に太陽 11 うのに かった。 0 それから2~ .燻し 鶏 がなき出す。 空が が (いぶし) ガラスで太陽を見る時 くっきり見えるようになった。 暗くなって 3時間経 通りすがりの人達が何 きた。 った午後2時頃、まだ真っ が起きてい しかも黒く。 た 異様  $\mathcal{O}$ が のように、 起きたの まるで日 カン 誰 な光 12 昼 景に近 ŧ だろ 黒 分 間  $\mathcal{O}$ 

て 日 時 た。 広島 新 聞 に は 特 遅 殊 配 爆 してい 弾、 被 害甚 た。 偶 大」と 々 配 達 いうよう され てきた新 な 記 事 聞 が 載 に

無い空は、そのまま夕方の黒い闇に消えていった。その

のれいて  $\mathcal{O}$ 道 L 頃 人が た肌 るモ み であろう。 12  $\mathcal{O}$ 11 有家駅 という る。 なっ ンペ 降りてきた。 が 下 て、 あ ŋ 噂 が (今は 5 どこからともなく長 列 が ビリビリに裂け傷を負っている人、焼けただ わ 車か になっ 伝わってきた。 バスだけで鉄道 恐らく長崎市内で被爆した人達だ 5 てい 顔や手が真 る人など怪 野 次 崎 は 0 馬 市 诵 黒に 根 内 0 我をしている多数 性 て が に焦げた 相 で 1 近 な 当 「やら < () 人、  $\mathcal{O}$ 島 れ 行 0 着 原 た 7 0 鉄

が Щ 昼 を 間 越 0 えて流 黒い 空 れ  $\mathcal{O}$ てきてい 正 体 は 煙 たの だ 0 たの だ。 だ。 長 崎 市  $\mathcal{O}$ 被 爆  $\mathcal{O}$ 煙

され 本 あ は れ そ が た 敗 n . 特 れ か た。 . ら 六 殊爆弾は 原子爆弾」 後に、 日後、 原子爆弾 八月六日広島に、 八月十五 だったのだ。 だったことが分った。 月 長 11 八 戦 月 争 九日長崎に投下 は 終 わ 0 あ た。  $\mathcal{O}$ 月 日

\ \ \ L カコ  $\mathcal{O}$ ては 悲 ŋ 何 復 年 ならな さ、 か 旧していた。 経 残 ってから、 年 酷さにあらため V) 近く経った今、 そし 資料館で当 て、 長崎市と広島 もうあ 7 平 涙 時 和  $\mathcal{O}$ し  $\mathcal{O}$ ような悲劇  $\mathcal{O}$ た。 写真や資料 市 尊さを噛 を 二度と戦 訪 n た。 は見 4 をみ 争は起こ L 街 たくな 8 は Ć, 7 す そ 0

# 十二 孫たちに伝えたい私の戦争体験

Ś

**清本 和子 清本 和子** 

したか 小学校 当 争 海 甪 時 岸 日 語  $\mathcal{O}$  $\mathcal{O}$ 本 , c をたくさん 小学  $\mathcal{O}$ 太平洋に が 太平 六年生でした。 生は 小 学 生 洋戦 今の 面 知っていました。 の間ほとんど戦争が続いていたわけ 争に負けた一 L た小都 小学生が聞いたこともない 戦 争が 市、 始まったのが二年生 九 四 花蓮港 五. 年八 (かれんこう) 月、 私 ような戦 は 0 台 時 市 湾 で、 で 立. 東

って砲撃をし あ いぶ離れ 積んでいる小 かります いりませ ませ たとえば 銃 登校 で撃た か ? て ぬ 0  $\lambda$ 途 でしたが カコ 11 艦 中で並っ たので、 型の れたことが てくることで、「艦載機」というの もと思 艦 砲射撃」とか「艦載機」って、 砲射撃」 戦闘 木 艦砲射撃の弾丸が飛んでくることは 艦載 道 ました。今でもあのときの恐 機のことです。 あって、木の陰に身を伏せながら  $\mathcal{O}$ は 機の空襲 上に突然艦載 敵が軍艦 はたびたび 私の家は 0 Ĺ 機 から陸 が な 海 あって、 機現れ は 地  $\lambda$ カコ 空母 怖 5 だ は忘 向 カコ は て、 だ わ が カン

昭和二十年に入ると日本は敗戦への坂を転がり落ちて

き付 三月 本 1 軍 きまし 十月 け が Ś 全滅し、「玉砕」(ぎょくさい)という言葉が れま た。  $\mathcal{O}$ 東 二月 L 京大空襲 には があ 7 ニラがア ŋ 三月 ゙メリ  $\mathcal{O}$ 末には 力 軍 に 硫黄 占 島 さ  $\mathcal{O}$ 日

神 あ 六日に広島に原爆が落とされ、 は子どもながらにわかっていたような気がし 玉 メ つて、 リカ軍 [を守ってくれ 0 兀 国 月 で に とうとう昭和二十年八月十五 あ 同 が b, 盟国 沖 縄を占領するなど、当 危急存亡の時には ると教わ [のイタリアとド かってい 九日に長崎 たもの -イツが 神風が吹い 一時の 敗 日。 Ø, 教 れ、 敗 に 育 原爆 色濃 て、 六月 じます。 で は 日本 日 に 八 情 下 本 は 月  $\mathcal{O}$ は が 勢 T

挙妄動 が多く、 降伏を求めるポツダム宣言を受諾する、国民 にはほとんど理解できなかったのです 私たちは、 いという内容だったと先生にきかされました。 前  $\mathcal{O}$ 日 (けいきょもうどう) せず、 また、言葉も難しかったので、 から正午に重大放送があると聞かされて 教室で天皇陛下の お言葉を聞きました。 国の再 が、 小学生の 建に尽く 日 は決 本の 私たち 無 L L てほ 条件 て軽 1 た

旗 あ ります。 敗 を 後 ŋ なが 私たちが青天白日 の台湾での暮らし 蒋 介石 。 ら 出  $\mathcal{O}$ 迎えた中 軍 隊が台湾全土に進 旗 の中で、時折思い出す光景 国 (せいてんはくじつき)  $\mathcal{O}$ 兵 士 一たち 駐 は てきた時 色  $\mathcal{O}$ 0)

た中 えて う 歌うことができます。 ŋ れ か  $\mathcal{O}$ 0 玉 1 ょ 寒 温 の国 う ます。その 暖な台湾 な 地 [歌と孫文を称 軍 域 カ 服 姿で船 ら転 時 の気候に 進 戦 駐 か L 軍 5 える歌 て来た兵士たち 歓 はそぐわ 降 迎の りてきま は、 ため 今でもうろ覚 な 12 11 L 中 服装だっ た。 だっ 玉 語 多 た 分満 で た 歌  $\mathcal{O}$ え わされ な  $\mathcal{O}$ で 州 を覚 が L あ 5 ょ た

れ、 らめい 争中に が、 に 近 几 ある日突然荷物をまとめて桟橋まで行くようにと言 港へ行くと旧 月 、学校の てい たびたび ŧ 終 たの わ 講 りになって引き揚 目 を覚えてい 堂 日 12 に 本 集めら L 海軍 た海 · の 駆 ます。 軍 れ、そこで 旗 逐 で げ 艦 は を希望 が な 何 待 日 0 する てい 日 カコ 暮  $\bigcirc$ 日 まし 6 丸 本  $\mathcal{O}$ L 旗 ま 人 た。 が L は 戦 た 7 わ 港

では れ に 狭 な  $\mathcal{O}$ 形 艦 駆逐 0 詰 1 た 揺 をし な 船を沈没させ W  $\otimes$ 船 れ 艦 でした。 ほどでし 込 カン 倉 きれ てい E کے 0 た 寝 1 この うの て、 わけ たの 返 た。 りを打つ隙間もない 乗り まま波間に沈んでしまうので ですか です る戦 は もちろ 高 心 が、 闘用 速 地 / ら、 で ん食事 は 出航して の船ですか 海 もともと乗り心地 全くよくあ ... か 上 は を走 おろ から ほどにぎゅ 5 り、 か ŋ 到 ま 細 水さえ喉 . 着 す 魚 せ 雷 長 はない を放 ん。 どころの 7 んるま うぎゅ 魚 L つて を のよう か 通か し、 話 う 敵 1) لح 揺

れ が 収まり 港 に 着い た  $\mathcal{O}$ が わ カン 0 た 時 あ あ ま

> が لح 持 に カン だ 知 5 な 5 生きて 5 込ま って ŋ 浴 上 ま び 陸 した。 せら 海 な 1 L た私 る 1 外 れるという屈辱的な防 W よう カ 5 だ」と思 たちを待ち受け に  $\mathcal{O}$ 帰 と G 還 0 者がシラミやその Н た Q 0  $\mathcal{O}$ を思 てい 命令で取ら 疫措 た 出  $\mathcal{O}$ 置 は ま で 他 れ D た  $\mathcal{O}$ D た。 措 害 Τ 命 虫  $\mathcal{O}$ 置 を カ を 5 頭 5

4 11 L ちに与えら L 込め てい た。 なが お 腹 高粱というもの ら食べたのを思 な るのに、 が キュー ħ でも食べ た 高粱がの 食 キ 事 ユ 1 は を初 物 鳴る 1 真 どに引っか はほ だし 0 めて食べた私たちはお 赤 ほどすい ま な高粱 か に ず。 は 何 かってどうし てい (こうりや もなくて、 まし た ん) ご飯 が、 ても呑 腹 涙 を が 私 す で

ように 子 時 どうだっ 父は 11 にして港 日 ます。 豊線 ک を見て、 のこと 両  $\mathcal{O}$ 手に 私 に 後、 これ で、 たの 乗 が から鹿児 絶望に打ち 鮮 大 私 って大分駅 見 きな 明 たち が カュ 渡 元に覚え などは 私 す 親子 島 トラン  $\mathcal{O}$ 限り 戦 駅 ひしがれ 思 に行 にたどりつくのです 七 後 7 焼 クを提 人は 0 1 け 始 る 出 0 野 た 背中 0 まりです せ んは、 そうにな 原となっ ま げ  $\mathcal{O}$ か、 に せ た姿で、 大分 ん。 IJ 列 ユ 0 7 映 車  $\mathcal{O}$ ツ 鹿 た 駅 11 画  $\mathcal{O}$ が クを背負 児島 0 た 前  $\mathcal{O}$ 中  $\mathcal{O}$ 市 ど に 様 <u>\f\</u> 0) 内 駅 ょ え 0 子 カコ  $\mathcal{O}$ 面 た う 5 は  $\mathcal{O}$ 

# 日本はずうーっと戦争をし二十三(私の子ども時代、

吉祥寺本町 石渡 俊子

てい

た

私は昭和六年一月生まれです。

## 忘れられない母の姿

逃れ 家は 報 昭 遂 0 和 定に四 父母と子 +サ 1 八 が所に分散して住むことになった。 年 ン 0 供七人、 が 夏が過ぎると、 鳴った。麹町 そして叔母 東 紀尾井町に 京は昼夜ひんぱ  $\mathcal{O}$ +-人家族 住  $\lambda$ でい は、 W た私 に空襲 空 襲 を  $\mathcal{O}$ 

父と母 学校 先となった山  $\mathcal{O}$ 妹 お寺 は 私 六年 叔  $\mathcal{O}$ は 母 す 東京 ぐ下 が  $\mathcal{O}$ 私立三: 預 弟 を離 . О 形 かり祖父の故郷の滋賀県へ泣く泣く疎開。 は 県 麹 小学校三年の妹と六歳の弟と幼 れら 鶴 町 輪田高女一年(中一) 岡 小学校 に疎 れ なか 開 から学童 つた。 が 決まった。大学生の 疎開 (T) で山梨県 私 は、 父の 1  $\stackrel{\cdot}{\equiv}$ 姉 0 仕事 大月 と兄 歳 小  $\mathcal{O}$ 

辛うじ 上 に に 死 十二月に入っ ŧ め 思 莮 7  $\mathcal{O}$ 息 11 で 人 0 が 乗り込み、 出 \*乗り、 て、 来る状 私は母に連れら 通路と言わずト 態 上  $\mathcal{O}$ 野駅を出 避 難 難民 . 発 れ、 を満 イレの した。 鶴 載 岡 中 汽  $\sim$ 向 7 ŧ 車 隙 動 は カコ う列 き 間 網 出 な 棚 < 車  $\mathcal{O}$ 

> つと鶴| ていた。私を預かってくれる鶴岡 きない」と渋る教頭先生 に引っ張ってもらい乗り込むことができ、三日か 線路からタラップが らった。 乗客全員 た。 純朴な優しい人で、 続きをした。「私立から県立への転校は本来ならば その日の夜になって私 中水 岡に着いた。すぐさま県立 翌未明に 汽車 上 駅 ーから 付近 飛び降 「汽車が出るぞー」 で敵 母は安心して東京に戻れると言った。 高くてあがれなかっ 一に母は何立 機 は、 'ŋ̈́ 空襲の 近 くの農家に 一度も頭 鶴岡 市内の下宿の 知 5 0) 高 せ。 女へ行 を下げて たが、 知ら 汽 分 せ。 カコ 車 小 男 き転 n は 母さんは お か  $\mathcal{O}$ 私 泊 ス と母 0 願 許 1 校 8 たち て いし 可 て ツ  $\mathcal{O}$ 手 B ブ で は

京に帰る。」と泣いた。 人置き去りにされるの 山 形弁もわからない、知らない学校、 は 嫌だ、やっぱり 母 知らない <u>ک</u> \_ 緒 土 に 明 地 日 に 東

さ 表…」と鳴り出した。そのとたん母は黒 + L  $\mathcal{O}$ 29 その時、 れ 余年経った今も、 ように吠え声をあげて身もだえしている母の 爆撃機の がみつい 部屋にあったラジオが た。 方向が告げられる度に 滋賀方面は?山梨方面 あ の 時 の母の悲痛な姿が強烈に思 「大本営 「オ、 っ は ? 11 オー 木枠 発 東 表、 . ツ ニ 京  $\mathcal{O}$ 姿。 ラジ は 大 لح 戦 ? : B 本 オ 営  $\mathbb{H}$ 六 人 発

# 尋常小学校が国民小学校になった

に太平 が起 が 洋 麹 こり、 戦 町 争 小 学 校 (大東亜 昭 和 +年 六年 生に 戦 争 十二月八日、 入学した に 突入した。 年に 五. 日 年 中 生 戦 上になっ 争 (支 た 那 年 事

米英。 が 神  $\mathcal{O}$ 同 ため 時に 毎 国 学校 日 日 , の 朝 に戦 ぜいたくは敵だ。 本。 授 業  $\mathcal{O}$ 礼 八紘  $\mathcal{O}$ 名 V; 称が や授業の中で交わ 中 天子様 -身も急 宇。 . 尋常 **\*** 小学校 激に (天皇) 撃ちてし止まむ 1 変 わ か 大和魂。 のため され ら国民 2 てい た。 に命を捧げる赤 った。子ども 小学校に改め 億 火の <u>\_</u> ような言葉 玉。 は 6 鬼畜 お λ, 子。 玉

しらく 好きな は 授 体 操 業 かの中 水 右 0 ! 時 泳 に 0 間 などの号令の は、 なぎなたが新たに加わ 授 業は、 ドッチボ 空襲 0 £ と行 危 ル 険 O代わり 進 から中止 )の練 0 た。 習 Œ とな となった。 列 り、 横 隊 私 で 女子 の大 カ

木正 毎 成 年 桜 恒 井 例  $\mathcal{O}$  $\mathcal{O}$ 華やかる 別れ <u>こ</u>の で楽しい学芸 劇や国 粋的 な和 会 ロのプロ 歌の 朗詠だけとな グラム は 0 楠

友 を大書きし  $\mathcal{O}$ ] 柴 理 0) 田  $\mathcal{O}$ さん 顔を大きくバ 授 こて発表 業 そ は、 で れ は、 絵 が することになっ 何 班ごとにアジ が上手で発 とも印象的 ツ クに 描 想 き、 た。 で、 がとても豊か ア圏を皆で分担 そ 素  $\mathcal{O}$ インドを担当 浦 中にインド 5 ĺ だっ 着 Ļ した 想 玉 た。 や手 0 地 地 ガ 親 义

> な てしまった。 7 法 11 を 尊 る!」と激怒 小学校の空気は次第に暗くなってい 敬  $\mathcal{O}$ 念で見 あ の時 し、 0 の凍るような悲しさは今でも忘 8 生 7 徒たちの V ると、 目 担  $\mathcal{O}$ 任 前  $\mathcal{O}$ でそ 先生 つ 0 は、 絵 を Š れ は が け ħ

に 立 広とネクタイ姿だった。 キ あ たれ ] る日、退職された校長に代わって新 色の国民服を着用 た。 この 頃になると、 していたが、 ほ とんどの その しい先生 先生は 教 師 は が 茶 詰 色 朝  $\mathcal{O}$  $\mathcal{O}$ 礼 背 力 台

リカ ウロ けで と は いますが 同 皆さんは大和魂こそ尊く素晴 最 人は コ、 ľ 戦 前 人間 争は 列 にい 鬼」と聞かされてい は アメリカにもアメリカ魂  $\mathcal{O}$ つと目が 勝てるものでは 魂 たが、この が あ るとは .覚め 日の る思 ありま たの 朝礼の 11 だっ 5 に、 せ Ĺ お話 があ た。 ん。 1 ア ŧ メ は り 鬼 と話され IJ /ます。 0 新鮮で、 カに لح 畜米 教 英、 ţ 大 え 目 5 大 和 から 和 ア 魂 れ メ 私 だ 魂 7

5 0 た。 非 L 国民とされ憲兵に連 ば 大人も子どもも自由にもの らくするとその 先生の 行される時代になっていった。 姿 には を言い 見 か け 自 な < 己を表現し な 0 て L ま

# いに疎開。鶴岡、湯の浜の生活

つ

市 内 私 は  $\mathcal{O}$ 県 湯 <u>寸</u> の浜 校に通っ 温泉 釈か た。 197 そ 小  $\mathcal{O}$ さな電車  $\mathcal{O}$ 冬 0 に三十分乗 東 北 は 七 0 年 て 大 岡

雪に見舞われ、二階から道に降りられた。

らスキ できな 中に で L 行 0 カュ き、 ŧ 京 楽し Ì ŋ か L 築山 だった。 L 0 カゝ た授業を行ってい たが、県立 知 いことも から一人一人を滑らせた。 5 な 実技は鶴岡 11 私 鶴 杯 にとっ 尚 あ 高女は 0 城址 て雪 た。 冬の 東京 公 疎 玉 園 開  $\mathcal{O}$ 学童 に 体 ではまとも 生活 育 全 を抱 員 0 は、 授 ス 業は え 辛く 丰 な な ŧ 授 を が 悲 業が 5 担 0 L いぱ ŧ VI

最

も辛く、

最

t

貴重

な体

験となった。

なけ 横に出 だけ 生徒 ル 7 てしまう。 尾 間 広  $\mathcal{O}$ に 二月 庄 0) にスキ 野を行く皇 ほ る大 内平 姿が見えるところまでは、死 を 軍 れ  $\mathcal{O}$ がスキー 切  $\overline{\mathcal{O}}$ ば ス  $\mathcal{O}$  $\mathcal{O}$ なくては どん尻に なら 丰 口 円 ŋ ] 野 あ 私は苦しくて死 る日、 を四 ] 転  $\mathcal{O}$ 拓  $\mathcal{O}$ 開 な なの 競 雪 列 をはいて早朝集合した。 軍 会宣 は ]列縦隊 、ならない。震える手でバンドを整 技 たような場  $\mathcal{O}$  $\mathcal{O}$ 学校恒例 遥 で途中何度も転んだ。転ぶと瞬 などを行い、二時 腰 喘ぎながらもつい ように。 言のあとクラスごとの一 油 掛 か彼方に遠ざかっている。 断したら行軍の姿は雪原 で四 を設 ゴ め のスキー 営 所 時間 ム長靴にバンドを引っ かと思っ に L 到着すると、直径十メー 余 んでも 中 り粛 間 央 大会が て行くことがで ストックを頼 ほどで大会は 0 たが 々と行進する。 焚火 いい 開 斉滑 カュ を囲 何 催 行 と 5  $\mathcal{O}$ され 詩 追 中 カ 軍 降 W え 終了 - や選手 で に  $\mathcal{O}$ 7 か ŋ 頏 1 12 きた。 É お弁 最 張 消 9 11 列 け 満  $\mathcal{F}$ え カコ  $\mathcal{O}$ た 校 0 後 る 州

> り た。 疎  $\mathcal{O}$ 開 そ 生 行  $\mathcal{O}$ 軍 が 頃 が に フラフラにな 容赦 なって途中で落 なく始まる。私にとってこの ってや 伍 0 L と到着 た生 徒 たち L た。 ス (IE 丰 L とん カゝ 行 تلح 帰 が は

何とか 強 落伍 1 東北 つい L 人の たらとんでもないことになる。ビリでも て行 根 性を学ぶことができた け るよう死 め 覚 悟で 頑 張 る。」 とい 良 う VI 辛 か 抱 5

み 荒 7 脈 いた。 湯の 0 义 れ き、それが地平  $\overline{\mathcal{O}}$ 狂うことを知っ 浜 ようだった。黒く濁った海  $\mathcal{O}$ 海 岸 12 住 線から迫ってきて、 た。 んでみて、冬の日本 まるで、 理科室 面 に 波 海 不 頭 で 気味、 見 は  $\mathcal{O}$ 白 た 怪 な 人 1 獣 形 体 筋  $\mathcal{O}$ 相 が 解 ょ うに か 剖 を 6 静

と私は弟とバ 0 た。 春になると 海 0 お 海 ケツを持 か げ は で 優 私 し たちは 1 って飛んで行き、 姿を見せた。 栄 養 失調 浜 から救 落ちて に 漁 師 わ 1  $\mathcal{O}$ れ る鰯 舟 た。 が 着 を <

よう 遅 ほ  $\mathcal{O}$  $\mathcal{O}$ ユ でっぱ 勢い 夏に どの長岩によじ登り飛 れ たら É 巻 12 なると浜 き込 凶暴 りを 全身  $\mathcal{O}$ 頂 えま Ŀ な 両 を 手でが で土 潮 ま れ 預  $\mathcal{O}$ で け た にように 地 力 駆 波 と に っと掴む。そして間 け っ子とよく泳いだ。 登ら 海 び 込みの 底まで引きづりこま 緒に 口 なくて 転 の練習をした。 L 岩に突進 死 にそうになる。 は な 5 高さ三メ 髪を入 L な そ 強烈  $\mathcal{O}$ 瞬 れ 秒 ず 間 な ス でも 猿 大 に 1 波  $\mathcal{O}$ ル

成 功 L かし L た 時  $\lambda$ 快 な楽 感 は L たまら み É この夏のなく何 | 度も挑 昭 和 十九年) 戦 L た で 終 わ

ŋ

### 食料を求めて

5 ける前 嬉し 欠けることなく、 ラフラになって歩いた辛さは忘れられない。 てもらうようお願いした。やっと米やイモを分けてもら は米どころ け 日 くことができ、 軸 本 家 カコ 0 かったが、 などリ 和 がは、 5 敗 + に 色は 東  $\mathcal{O}$ 九 疎 京 食 庄 年 ユ 開先でも一 糧 隠  $\mathcal{O}$ か 内 ツ 米の重さは 恵まれ 5 クに 平野 夏、  $\mathcal{O}$ L 父母の苦労のおかげでどうにか食べていれても一軒の家が借りられ、家族が一人も き 運んだ反 調 達 サ 背 れ の農家を ず明 てい Ź がますま 負 つて、 パ が物、 尋常ではなく、 た。 白 ン に 島 なっ 母 す深刻に 母と弟 グ 軒一 の着 ア 、ム島 て 軒 物、 いっ 中 回って食料 なってい 残暑の  $\mathcal{O}$ 姉 た。我が家では 一)と私 日 それでも私た 妹の 本 軍 畦 晴 くった。焼 が 道をフ を売 中 全 滅 *\*\ 0

を下げ が 大勢生 ラ 1 〜と男 0 0 て亀 浜 活 家 0 温 でジ してい 子 屋 泉 が 旅  $\mathcal{O}$ 亀屋旅 t 降 館 ガイ た。 0  $\mathcal{O}$ てきた。 前 ある日のこと、 を歩いた。 モを分けても が館には あっという間 東京 きなり カコ ら らの 私は い 学 塀の もな 1 母 童  $\mathcal{O}$ 干 を く子どもた 使 疎 上 開 入 カコ 1 6 n で  $\mathcal{O}$ た籠 バ 知 児 ラ ŋ 童

> たち たイ 上で 母も 5 11  $\mathcal{O}$ まま家に帰った。 る は ・モは 生 は皆痩せて、 イ 籠  $\mathcal{O}$ 七  $\mathcal{O}$ **(**) ほ を 1 中 んだよ」と言ってくれ とんど無くなったが、その子たちが哀 モ あ  $\mathcal{O}$ を皮のまま わ ジ ててて ヤ 顔色も悪かった。 ガ 拾 かつての弟の学童疎開の姿と重な 1 七 11 を取 カコ 見ると、男の子たち じってい って走って逃げ た。 るでは 亀 屋に な 宿泊の子 は 1 た。 旅 か。 転 館  $\mathcal{O}$ が で、 塀 ů, 0 そ 0 7  $\mathcal{O}$

末に で丁 の縫 本 きて 湯 上から体中に撒 を煮沸すれ ているうちに忌まわ  $\mathcal{O}$ 0 風 髪の毛 負えない。 ぞっとした。 寧に梳くと新聞 い目にひそみ、 浜温泉には共同浴場があ (しらみ) ば退治出 にいくつもの卵を産み繁 は 終戦後、 7) 清潔に 栄養の足りない てもらうまで悩み 巧みに血 しい 来たが、 紙の上に黒い虫がパラパラと落 アメリカのDD してもうつってしまうの 虱をもらった。 を吸う。下着の 毛虱には ŷり、毎· 人間 晩妹たちと入浴 は 殖する。 を 苦労した。 続 T の 白 毛虱は 好 1 むようだっ た。 虱は 白 1 黒 1 だか その 0 粉 風 < げ は に て、 ら始 5 下 行 た。 0 下 頭  $\mathcal{O}$ 7 櫛 0

焼き尽 東 して三月十 地 和 区 いて五 を爆 i + 撃、 た。 白 年、 月二十五 未 日本国民にとって最 焔 明、 日 Œ で東京 T 日 0) ゙゙メリ お Ш  $\mathcal{O}$ 力 は  $\mathcal{O}$ 兀 В 大 分 手 29 火流となっ 地 0 編隊一三〇 も暗い 域 が を \*焼け 正 て た。 月 機 下 紀 が 死 尾 町 が 明 者 東 け、 帯 京 そ 万 を 江

 $\mathcal{O}$ 0 我 か 週間 な 浜 7 が 12 家 来 前 た は な 姉 に 湯 け と  $\mathcal{O}$  $\mathcal{O}$ n 兄 日 浜 ば は 全 勘当す に 焼 来て命 死 L め た。 Ś  $\mathcal{O}$ 疎 なら が 開 と 助  $\bigcirc$ 家 を か 嫌 父 族 0 0 1 た。 強 学 緒 神 徒 VI  $\mathcal{O}$  $\mathcal{O}$ 所で 動 命 恵みと言うし 令 員 で、 で 死 東  $\mathcal{O}$ 焼け <u>ځ</u> 京 12 る 湯 残

張 T メ が IJ 広 が 力 軍 0 7 が 1 遂 0 た。 に 沖 縄 に 上 陸 L たと知 らさ れ、 不 安と

隠 せ を  $\mathcal{O}$ な 詳 新 し に 2 で二十四 「広島 た。 た。 た ŧ 湯 いことだが、「また空襲でやられたの 細 型 た方 爆 月 5 り 0 は そ 郊 六 連 報 に 陸 浜 連  $\mathcal{O}$ 合軍 道さ 生 が 新 す 村 万 日 が 記 型爆 入 き Ź か ょ 民 人 ら 日· 広島 事 が た か に れ 類 1  $\mathcal{O}$ を私も 死 なか 弾 認 t 破滅 心 と 参 記に原子 本 戦」のこ 知れ 識 W 地 いう人もい が だ。 海を越えてひと飛び、ソ であっ 投下され 0 が 0 かすか た。 な 原爆であることや放 報道 その **爆** な いという 被爆された方に 弾 た。 カン は に · て、母 が った。 た。 日 湯の浜村民をふるえ それ 記 投下され  $\mathcal{O}$ 憶 被 湯 情 は より に 害 の浜 報が 几 残 は か」というくら ン 大の 人 ってい いで見 流  $\mathcal{O}$ は れ 許 娘 連 連 射線の被 発 た。 ŧ た新聞には をどこ 兵 が L るが、  $\mathcal{O}$ よう」とあ しても 娘 が 日  $F_{\circ}$ 湯 ソ 力 は 上 条約 その らえ に 山  $\mathcal{O}$ が 害 ド 隠 浜  $\mathcal{O}$ 12 b 11

月 現 八 日 海 真 岸に 昼 に、 本当にアメリカ た人に機 銃掃 射 を 艦 浴 載 び 機 せ て去 機 が 0 湯 って  $\mathcal{O}$ 浜

> した に 7 で れ 発 2 た人は 押し 目 静 馴 ま が  $\mathcal{O}$ n そ 原 ŋ 助 入 7 返 か 長岩 ħ  $\mathcal{O}$ 子 11 に入り 爆弾 日 0 0 る て たそうだ。それ 我 は  $\mathcal{O}$ 投下。 警 11 周 が 別りを伝 息を殺 た。 家 報 ŧ では そし 約 な Ź, 十 五 してい · つ 全 て次 て、 から終 員 V 万 綿 きな 海 た。 人、  $\mathcal{O}$ 中 入 月 戦ま 後 れ に り 爆 潜 で聞  $\mathcal{O}$ 爆 死 で誰 月 防 0 音 空 7 九 11 が 一人浜 頭 逃 た 聞 日 こえ、 巾 が れ 長 を 崎 射  $\sim$ け カコ 出 撃さ が 東 Š を ず 0 京

#### 終戦の日

音 容 座 言 0 放送 て が 0 わ 八 て れ 月 そのまま全員下 難 お た。 り、 十五 L 1 が くて た上級生が あ 全員 私 るか 日 理 は そ 朝早く 講堂に正 解 。 ら  $\mathcal{O}$ できな 生徒は帰ら 日 泣 校となっ は 1 鶴 てい 座 校 カコ 尚 つ して玉音 行 高 た。 た。 るの ずに講堂 女 0 先 0 た。 が見えた。 生 夏 放送を聞 正休 は 元に集合さ 何も 午 4 に 中 私は 説 天  $\mathcal{O}$ 11 する 明 登 た。 皇 陛 玉 校 ように 音 てく 前 下 日 لح 0 方  $\mathcal{O}$ れ内 に 玉 な

ころ に が 7 て いく 言 家に帰り んだ。 るような数 った。 寝 食べてい 転 私は 誰  $\lambda$ つくと、母 でい Ł 全身 カン 日 か た。「 だ れ ŧ 0 なくては 0 も叔母 た。 力が 虚 「俊子、 脱 だが幸 V 状 も姉 っぺ なら 態 日 とな 本 ŧ な んに 1 は 4 り、 カゝ なことに、 負  $\lambda$ 抜 0 け た。 けて、 な暑さ負 魂 たんだよ。  $\mathcal{O}$ 子 抜 ども 姉 4 け 殼 け W  $\mathcal{O}$ 横 0 な が لح 生 歩 ょ 11 寝 う

安心 に 光 ŋ L て浜 輝 いて見え、 いで遊べ た。 私たちを元気づけてくれた。 目  $\mathcal{O}$ 前  $\mathcal{O}$ 海 B 砂 浜 が、 Щ  $\mathcal{O}$ 木 Þ が 急

## 戦争が終わり、東京へ

思えば ため、 使して山 空会社の 家は 父 量に残り、 戦となっ あ 戻 る湯 の無念さは 戦 れ 後四 なか 争は 成 焼 ブ 殿 け、 功 バカな話だが、 ナの 閉 た。 負けて 0 年 L 頂 Щ それに加え父が愛国 て「わ 途方にくれたのであった。若くして洋紙店を創 かか 鎖 Ł  $\mathcal{O}$ 合板の 硬すぎて家具には不向きな、 ブナの 紙屋 5 計 そしてその膨大な後 銀 ブナを伐り出 つい ŋ 座 知れ が 12 伐採許 戻 天職 生産を受けることになり、  $\mathcal{O}$ に終わったが一家はすぐに 軍需 店、 れず同業者に遅れをとってしま な \ \ \ 紙 宝町 省の命令で、 可を 屋 して生産したが、間も 心に燃えて設立  $\mathcal{O}$ 奔走し、 と言 支店 始 って誇ってい 末 は 木製飛 不のため 全焼、 樵 その (きこり) ブナ 行機 父は した庄内 紀 だっ は 尾 た父は、 が材が大 なく終 製造 東京 霊 た。 井 を苦 Щ 町 で 今 航  $\mathcal{O}$  $\mathcal{O}$ 

0 と世 変り 尾 井 果 田 町 7 谷  $\mathcal{O}$ た 家 区 は 東 上 宗京に戻 北 焼 沢に古い家を見つけ、 け てし 0 た。 ま 帰る家が なか **当** つた一 時 六 万 円 家 Ė

## 終戦後の東京の生活

た。 び さつまいもだったり、  $\otimes$ つく たら若者 大豆か 戦 毎日 後  $\mathcal{O}$ す、 「だった。  $\mathcal{O}$ 食 歯でも 生 ふすまの粉で 活 は、 噛めなかっ 戦 空腹をか 時中 作  $\mathcal{O}$ :った真 それ かえ、 た。 米は 以 食 つ つ 上 黒な ベ 手に 12 物 悲 蒸し 惨  $\mathcal{O}$ 入 情 6 な 報 パ ŧ ず、  $\mathcal{O}$ 三 は は だ 食 冷 豣

純 皆 に コ れ しさの 飢えてい 0 ッペを両手にかざし先頭になり、 白 そんな中、 な のフワフ が 余り、 b, たが ワ たまに 頭を振り振 「コッペパン音頭」を作詞 0 パン。 空襲のない 進 駐 忘れてい の歌い 軍 か らコ 東 京 ながら廊 た本 がはやは、 ッペ 弟や妹たち 当 パ  $\mathcal{O}$ ンが 下を り 作 パンだ。 明 曲して、 るか ?配給さ 踊り 厄 一人が一 つた。 歩 私 V れ 私 はう 列 が

# 1 八紘一宇(はっこういちう)

地 次大戦の 全 化 世 0) 果てまで するス 界 を一 とき日本が国家の 口 つにまとめて、 0 意。 ガン 転じて、 として用い 理念として打ち 家の 全世界 た。 ように 0 八人紘 意。 和 合させ は 出 宇 天 し、 地 海 ること。 は  $\mathcal{O}$ 外進 家 八 0 方 0) 出 を正

# 一十四 大連で迎えた終戦

### 吉祥寺南町 棚橋 武雄 たなはし たけお

将校 H 機 7 本 0 き こ 軍 体 であるぼくを通訳に呼び出した。 軍 当  $\mathcal{O}$ 1  $\mathcal{O}$ 参謀 たりで爆墜され、 た В が 29 たちは、その 0) 鞍 重 Щ 一爆撃機はしば  $\mathcal{O}$ 爆撃時 捕 十数名 属の尋 にそ L の乗員  $\mathcal{O}$ ば 問 満 機 0) 州 ため、 が、 、が捕虜になった。 0 各 日 地 英文科 本 に 軍 出  $\mathcal{O}$ 出 戦 擊 闘  $\mathcal{O}$ L

ら数日 は、 尋 問に答えてくれたので、ぼくの頼り 容易なことではなかったが、 くの英語 で勤めを果たすことができた。 力で、米軍の 軍事機密を聞 捕虜たちも大変 な き出すため 1 通訳 でもどうや 協 力  $\mathcal{O}$ 的 通 に 訳

ツト、 彼等 続 機 ŧ 水 を などいくらも残ってはいない。 ぼ くは 浴 ば 和 は 時 二十 び 々房に か 大変に喜 アンド、 せら 尋問 京に近づき始めた時、 ŋ で、 年 れたように怖気立った。第二航空軍とい 八月九日、 入って捕  $\mathcal{O}$ ソ ん 済んだ捕虜には、煙草などを差し入れてや トーク』(座って話そう)と呼びかけると 連空軍 で、 すっ 頭と雑 のミグ機やイエ ソ連が参戦した時、 かり打ちとけてくるのだった。 談を交わした。『レ ぼ < ソ連戦車 は 地上 リ 機 戦闘 が国境を破 司令部 と戦 隊長を命 ・ツツ、 える飛行 中は冷 つて り、 シ ぜ

> 労動 軍 いう命令が出た。 手十名と、運命を共にすることを望む敷島高等女学校 撤 歩 5 しにかかったのは当然といえる。 退 L 兵 司 出 「員の女学生十五名ほどを収容して、大連に撤退 を始めていた。それを知って、 カュ 令 て、 Ļ 身のチン 部 部 に そのころは、 隊の三十人ば は、 ピラ少 地 上 戦闘 討 肝心の関 を指揮 か にお鉢を回したに過ぎな ŋ 0 通 できる将校 東 今度は 信 航空軍のほうも逃 軍 兵 の主力が新 を ぼ 預 はくに、 け が 5 1 れ な 女子 京 カゝ せせ から 0  $\mathcal{O}$ よと げ  $\mathcal{O}$ 通 勤 だ 信  $\mathcal{O}$

て、 習わせたにすぎな に三名ずつの女学生を助手として割り当て、通信: 名 始 したわけではな 女たちの教員にされた。といっても時たま彼女たちを ぼくが が まった時、 注意事項や伝達事項を伝えるぐらいで、特別 動員されて部隊に毎 新 京の司 通信傍受要員として、 令 い 教育 部に来て、米空軍 の方は女子通信手にま 百出 勤することになり、ぼ 敷島 子の暗号 高 女 解 0 女 読 カ 1傍受を な教育を 性 せ、  $\mathcal{O}$  $\langle$ 徒三 作 一人 は彼 並 べ が

は、 く 同 米空軍 士 ぼ 乱数を機械 の交信 くが相 とても . (7) 手に であ 暗号といっても、 ぼ < に取り組 0 0 L て、 た 頭 で解 0 V) は、航空機と基地との交信や航 んで発信する ずれ 読などできるも 作 もスピー 戦 命 令の 0 ドを要するの ような で ので 難解きわ は 重 な 要 か ま な つ り Ł な  $\mathcal{O}$ 

械 は 使 わ ず、 П 頭 で 1 合 0 7 11 た。

ヤー か 何  $\mathcal{O}$ ヤ 5 ット 百 ħ が受信器にとりついていなけ カコ ア Cはチャ ĺ リー てい 通 ファ それをつきとめ は 何千 わ • エ か イブル 通という傍受電報 ] るが、 例えば ット リーというごく  $\mathcal{O}$ それ . |-猫 A るの  $\mathcal{O}$ В メイトという発言で表す が C トキ 時間 が が、 仕事であった。 ヤ なの が必要で、 使 ń ット」 (C Α 1 はエ ばならなかった。 か、 慣 イブ れた語で、 出撃なの 連日休み A T ル、 そのために В な カュ 言  $\mathcal{O}$ は なく 目 ベ 1 標 が 誰 は な チ 綴 キ 力

> 9  $\mathcal{O}$

タイ だった。 就 と姉を頼 その電 職 ピストの たも 報をタイプして英語にす って新京にきて、軍属として第二航空軍司 0 で、 役目だった。彼女は 雑用係としてぼくの 東京の á のが 班に 女学校を卒 、仲本久子とい 廻され てきたの 令部に -業する う

激し 題ないが、 ことを考えなが 残って、 女子たちを収 女子通信手十名とタイピスト 朝から 雨  $\mathcal{O}$ ぼ 開 中で 女学生十五 くが迎えにゆくの 始 家 族たち . ら L の収容はトラックを動かすだけで難 容する昭 たが、 手 書き は 人は市内 十人ほど収容するうちに夜になっ 既 和二十 (T) に退 略 図 を待っている女学生 出 0 年八月十三 · は 軍 を L あちこち 眺 てしま 隊 8 Ź の寮にい は車 い、ただ一人家 の自 日 を走 は 1宅に るので 豪 5 た 雨 つせた。 ち 渋 だ る。 間  $\mathcal{O}$ 2 L

> 般 な 積 た。 ようなあ  $\mathcal{O}$ ので、一 4 市 込 朝 民 新 が 女子. 般 京 ŋ 集まってきて、 駅 人の さまだった。 たち に 入って 乗り込み を 乗車 昼 は 我先にと乗り込み、 る さ 近くに なかっ 長 せ 1 た。 無 奉天の ぼく た 蓋 貨 が 車  $\mathcal{O}$ 駅 他 車 に で  $\mathcal{O}$ 輌 荷 車 ま だ 車 る け 輌 B は で に は 食 戦 は 止 軍 ま 場 用

女子たち 放り出 駅員 で世 受けた血 向 嘱 か つて、 託 戦争は終 11 そして、 駅長室に来られるようにとの であ て、 話になることはできない の一人が来て言うの すわ 青山学 を収 いった日本 高  $\overline{\mathcal{O}}$ 気の 天皇陛下の玉音放送を聞 級将校に支援を頼 けにはい ったが、ここまで連れて来た女子たちをここで 容 院の学生の時、 満 することが 引くショック 商 事の蓑毛重役に頼みこんで、社の かない、と考えて大連に着くと、 で車 できた。 · ので、 |輌を降 んだ。 が、今形を 米英への宣 駅長のことづけです」と、 司 L 7 りて駅長室に入った。 令部の大連 かし、 て、 現したのを感じ 戦 終戦を知っ 食糧 布告を知 支隊 や費 用 寮 軍 7 た ま に  $\mathcal{O}$ 

は  $\mathcal{O}$ れ だ しな 戦 な すると、 争は  $\lambda$ て、 終ったのだ。 彼は どう 妾になっても、 ぼくの要求を当然の か L 7 今更女どもを連 11 る。 からだを売っても生きて 女たち ように は放 れ 0 てきて、 7 拒 絶 お L 助 7 7 げ ŧ 1 てく 0 た

ない しょう てしまうか よう。 ŧ つ れ 人の t を聞 現 金 ŋ 階 でも ŧ でしたら、ここで女たちを放り も 明 級も 知れ、 て、 戦 日にでも押しよせてくる中 消えてしまった。 ない 争 ぼ は くの 終 んですよ。それ 0 反 たんですよ。 抗 心 は 怒り 軍 にもう日  $\mathcal{O}$ に変 軍 Ł 出 隊  $\mathcal{O}$ わ だと思 国 す ŧ 0 本に 人に なく 0) た。 t は戻 奪わ 0 な 11 て 11 0 VI で 5 た た れ 11

そのとたんに高級将校の顔色が変った。

現 金 は、 円を要求 L ١ ر 米二十: 分かった。 0) 万円 か言ってみなさい。」と将校が言ってきたの してみた。結局、この交渉で、ぼくは米二十 を寮に 俵と、女子一人につき千円、 分かった。 運ぶことに成功した。 もういいよ。 つ 何をどの まり、二万六千 < で、 5 俵と 11 私 欲

た賢夫・ 親だけ でくれ 現 親だった。この母親の夫は新京の警察署長 つのほ 寮に戻ると女子たちは大喜びだったが、 くは、 子  $\mathcal{O}$ たの うもそのつもりで女学生の世話をしてくれてい が 0 管は 娘 ように なので、 米 心の撤退 は、女学生たち 俵 谷 は 一 津夫人に頼んでから、 丸 ぼく 坊主にし 12 部 同 を残して大部 は女学生たちを夫人に託 行 してきていた。大変に Ó た。女子 リ | ダーだった谷 通 分は寮 信手たち 嫌がる女学生 中で の床 で、 署に残 は既 下に しっ Ł 津 した 久 たちを かくし、 子 カュ 番 Ļ り 成 ŋ  $\mathcal{O}$ 喜 た。 夫 ĺ 母母 W

なので何事も強制はできなかった。

装解 という村にあ <  $\mathcal{O}$ 除 周 通 後、 水 ŋ 子  $\mathcal{O}$ 日 飛 段 本 る苦力小屋 行 取 軍 場 り  $\mathcal{O}$ Ê をすま 将兵 赴 き、 は に収容さ す ソ 連 解 放されば ぼく 軍  $\mathcal{O}$ れ ず、 武装 は た 寮 大 解除 を出 連 対岸 を受け 0 大 連  $\mathcal{O}$ 武 屯 近

な さ 前 5 臨 1 った。引込線には有蓋 っても一棟に五、六十名が収容できる大きい 広大な敷 から入ってきてい れ から武装解除された日本軍 時 た将兵 か月半ほどが  $\mathcal{O}$ 捕 | 虜収 が地に、 は、 容 苦力小屋を出てどこかに輸送され 所とし 経 た。 0 棟ほどの た て使われたのだった。そこに 貨車を多数連ね 十月一 ·将兵が送りこまれてきた。 日、千人ずつの 小 屋 が 並 た長 W で 1 1 部 · 建 列 た。 隊に 物 ることに 車 あ が で 小 ある。 編 屋 日 成

ぼ 4 11 11 なの うのがぼくの くにはそんな楽観  $\mathcal{O}$ いよいよ日本に帰れるぞ」と喜ぶ将兵が 希 望をつみ 直感だったが、 取 はなかった。 るような発 それは口に出せな 言は シベリア 慎 まな 送りら け 多か れ ば かっ 0 ならな た が

た。 円 0 中 を ぼ よく くは、 国 渡 L 人を紹介してもらい、その 食 た。 部 ベ 隊 に 日 を 行 離 0 0 早朝まだ薄暗 れる日を十 た 村  $\mathcal{O}$ 食 堂 月  $\mathcal{O}$ 中 主 日 時 国 人 人にまず半 間  $\mathcal{O}$ に 移 頼 浜 動 W に で、  $\mathcal{O}$ 早 小 金 小 朝 舟  $\mathcal{O}$ 舟 に 五. を 決 た 8

渡 せ け取 こてお ŋ 決め 無事に大連 をした 港に着けてくれ たら 残 ŋ 0) 五. 百 円 を

てくれた。の老中国人は「好、好」と喜んで必ず約束を果たすと誓っの老中国人は「好、好」と喜んで必ず約束を果たすと誓っ千円は当時の中国人には何年も暮らせる大金なので、そ

してくれた。 田 大尉だけ は、 ぼ くが 唯 人で部 隊 を 離 れ るの を 心 配

帰れ 大陸で軍を離 き止めようとした。 んぞ。 棚 橋少尉、 飢えて死 れて一人になったら、とても生きては日本に 緒 に日本に帰ろうぜ。 ぬ のが落ちだと思うよ」と、ぼ 見ず知らず くを引 0 支那

老中国 がら浜に出た。  $\mathcal{O}$ 0 変えるつもりは全くなかった。 とをやった後でないと、自分のことなど考えられなかった。 たら ぼくは塚田大尉の 部 隊 0 ぼ 人と小舟 移動 < はまったく違う運命を辿らなければならない の朝、 もし、 がぼくを待っていてくれることを祈りな 思いやりに感謝はしたものの、 まだ薄暗いうちに抜け出したぼくは、 あの中国 人が約束を守ってくれなか 大連に対 渡って、 やるべきこ 決心を

七 分通 しか ŋ は ぼくの まだ薄 朝 はす 脱 暗 0 走計 い カュ 浜に老中国人と小 り 画は成功だと思った。大連港に近づ 明るくなり、 海がぎらぎらと輝 舟を見る て歓 喜 した。 き

はじめた。

付 くに言葉を発するなといった。これが れてしまうだろう。 っとここまで来て日本兵だったことが  $\mathcal{O}$ かれることなく検問を通過できた。 検 港に近づくと、 問 をしているのが見えた。 ソ 連 老中国人もそれに気づいたらしく、 兵がボ まずい ŀ · を 駆 成功し、 ! 露見すれば、拿 て、 ぼくは感じた。 出 ソ 連 入り 兵に す 捕 る ぼ B さ

て足を止めた。ていく中国人を見送ってから歩き出したぼくは、はっとしていく中国人を見送ってから歩き出したぼくは、はっとし、港に上がり、残りの五百円を渡されて、喜々として帰っ

共産軍の兵士であることはすぐわかった。 人の検問をしているではない 今度は、 四、 五人の中国 兵 が か。彼等は八 港の 出 入口 路 を 軍と呼 か ため T ば 通 れ る 行

るのと、ぼくが言葉を発しないのに日本人と見抜 が に ぼくは観念した。 彼 待ちなさい」と綺麗 等の前を通り過ぎようとするぼくを、まだ若 な日本語で止めた。 彼が 少 1 ク年であ 少年 た眼 力 兵

隊 って彼は が三名ほど休 「こちらに来なさい。 検閲 所の 憩 建 L 物にぼくを入らせた。 ている様子だっ ちょっと調べることが た。 中 12 は あ 年 る \_ 配 と 兵

「柳樹屯から来ました」とぼくは答えた。「どこからきたのか?」少年兵がたずねた。

「柳樹屯では何をしていたか?」

「伯父の果樹園があって、そこで働いていました」

「これからどこへ、何しに行くか」

「大連です。働く仕事を探しに来ました」

「果樹園はやめたのか」

ていっていた。

「はい、やめました。日本兵が何千人も来て、果樹園が

荒らされるので、伯父もやめました」

を引きしめた。それに軍用双眼鏡が現れた。これを見た少年兵は一瞬表情兵はリックの口を開いた。中から数枚の下着類に軍隊毛布、敗布で作った軽便リックサックを肩から下ろすと、少年「そうか、わかった。では荷物を調べさせてもらう」

「これは何だ。日本軍のものだな。お前は兵隊だったの

か?

貰いました。 理に置いていったものです。給料の代りにこれ これ は、 初め 毛布と双眼鏡は売って金にします」 のころ柳樹 屯の日本兵 八が果物 を伯  $\mathcal{O}$ 代 . (父か 金 に . ら 無

収 ざと毛布を入れて置い するけど、 よろし くは、うまい すぐ軍 にいたとわかるものを持 わかった。通りなさい。 1 言い な」といった。 訳だと思った。これを考えて予め たのだった。本物の兵隊 つては でも、 *\* \ 双眼 ない あがりだっ はずだ。 鏡 は没 わ

タイピストの仲本久子は別として、女子通信手は皆寮を出れた。女学生の数も収容時からすると数名減っていたが、聖徳寮に行くと女学生たちは、嬉し涙でぼくを迎えてく「いいです」ぼくはほっとする気持ちで答えた。

った。 蔭で各地に散った女学生の父兄との連絡がとれたの えに来られた女学生やこちらから機関 してこっそり親許に送り返したりしているとのことであ 谷津久子の 母親の説明によると、満鉄 車の 0) 乗務員 釜炊の たち ように で、 0 迎 お

Ļ を続けさせられていた。それが幸いだった。 も鉄道も船舶も個人財産も目ぼ 戻すことのためだけで、軍を離れてきたのだから…。 ぼくは 日本人のものは手当り次第に何もかも没収され 鉄道の機関手や乗務員たちは日本人が依然として仕 それ を聞いて、 心が 軽くなった。 L い物は没収され 女学生 を親 た。 た。 許 に

※筆者は故人で、 遺 族 0 承諾 のもと、 掲載した体験談 原 稿 の 一 部を抜粋 は、 紙 面 しました。  $\mathcal{O}$ 都合上、

#### 大連、 青島 での 出 来 事 1= つ い て

南 内 う ちゃま

#### 11 立 ちに つ て

どで、 するため が あ 11 1 結 な ま げ 私 る は、 婚 が L する た。  $\mathcal{O}$ 金 時 に 会社 夜学に通 正 計 11 V) を が 11 · なと取 賞品 を辞 記 満 年、 念に 鉄 とし  $\Diamond$ 0 大  $\overline{\phantom{a}}$ いただきました。 て退 たそうです。 連 0 \* て てい <u>1</u> 生 おいてく 職 ま に 金 ただき、 れ を貰 勤 で  $\otimes$ す。 父はそろば れ 11 7 ま 娘 1 姉 気が嫁に まし し 昼 た。 は 兄、 た 逓 実際、私 はん大会なに信省に通 妹 勉 弟 強 が

級 ら 母 ħ 父が が 長 て 副 逓 11 あ 級 ま な 信 長 た L 局 をやって が一 で勉 た。 番、 私 強 は、 l 家の中で勉 ているときに ました。 女学 ,校で は 強 私が が 1 なが生まれれ 年 カュ 5 5 て、 年 た 生  $\mathcal{O}$ ま で、 褒 で 8

とき 州 が 州 栄 玉 でし え が を が 女学校 る で 建 ように た きると 7 るた  $\mathcal{O}$ で、 へ入ったころは、 は と父が 思 め 知 で 私 5 0 て す。 な 達 7)  $\mathcal{O}$ 0 私 代 つ ま け た 7 は L カュ た。 < ので 名 5 大連 れ 前 1 クラス 私 が L た にそうで、 たち ょ  $\mathcal{O}$ う。 満 人 榮 玉 増 口 す。 民 中 え が ح ま 国 ŧ 増 悪 は 父 11 L え た。 は 7 1 11 満 11 大 満 州 満 る

> まくい れ L な た みた 女学校 て盧 土 て で 地 ったら、 溝 1 き が で、  $\mathcal{O}$ た 橋 あ お 事  $\lambda$ る 最終的 件 友 だ カン 達 満 <u>\*</u> か 5 鉄  $\mathcal{O}$ 5 放 に満 2  $\mathcal{O}$ お 0 父様 理 借 7 鉄の を 事にしてあげるという約 り あ 起こ が れ る 理事に、 軍 ば  $\mathcal{O}$ したそうです。 人 ょ 八さん か なってい 0 日 で、 た 本  $\mathcal{O}$ 人 満 に が まし 鉄 لح 行 それ 思 か 0 5 7 ま が 頼 開 う ま

#### 婚 し たころに っいい て

送り、 こで、 う大 たようです。 る方だったらもう ようです。 さんをもら  $\mathcal{O}$ 周 主結 (きい 'n 人 でご飯 青島 は、 応写 組 朝 知 わ 織  $\mathcal{O}$ 鮮銀行 真 り合 な を 社 が ないとしょうがなって頂くところがな で は 宅 すぐオー 見 に きたとき、 1 たら  $\mathcal{O}$ 入居することに に 勤 お ば 8 L ケー てお 1 さまを そこに です な な り、 します か 11 が、 通じ って ったそうで、 な 派 満 て、 っていうことだ いうことに り お 遣 州 ば ま さ 連 さま し 簡 n 銀 単な た ま 外 早 が が L 来 写 Ċ た。 な 推 局 真 薦 0 お 社 と た を そ 嫁 す 宅

生 結 が  $\mathcal{O}$ 婚 方 活 昭 る 和 費 式 に 行 をずっと送ってい  $\mathcal{O}$ 18 前 0 年5月 を た  $\mathcal{O}$ 私 方 日 が 共 に 主 物 は 20 人 が 知 歳  $\mathcal{O}$ り あ で ま る た 母 結 親  $\mathcal{O}$ せ カュ 婚 で、 5 W  $\mathcal{O}$ L でし 行 荷 ま きな 物 義 L が 兄 た。 届 さ  $\mathcal{O}$ きまし 11 お 主 とい 嫁 島 人 さ は うこと W る が 母 大 親 連  $\mathcal{O}$ 

きるよ 送ら 待 新 は渡 婚 って 先 旅 れ に کے 行 1 てくる 頂 明 喜 などはできな ま 11 が  $\lambda$ L 7 11 でく た。 ま 11 る で、 ま 0 れ 姑と で L てい た す 主 か 実 人は が たのにできま 0 家 で た 先 姑 私 0  $\mathcal{O}$ に  $\mathcal{O}$ は で、 青 新 証 結 島 婚 婚 明 実 生 が す  $\sim$ せんでし 母 帰 活 な る です。 は新 り、 い の 0 で、 婚 た。 当 家 ŧ 旅 時 で j 行 証 が は 姑 明 証 لح で が 明

た 日で止め V) 結 婚前 な 11 ŧ に か した。 5, 料 理 教 刃でない方でこぞぎなさいと習 じゃ 室に行きましたが、 が 1 t の皮を包 丁でむくの 配 給が無くなり二 V) はもっ ました。

## 主人の出征と戦争体験

はその りに さ せ 連 れ l  $\mathcal{O}$ 11 た。 7 が に 主 日 人に 連  $\mathcal{O}$ に 届 自 1 が かと きま まま た 写 行 分 れ 召 人で 真 昭 て帰るからとそ  $\mathcal{O}$ 集 思 した 和 が で 穴でそれ 着 ら Ù 物だけ 0 す。 数 19 て たが カ月 が、 年の 食 **,** , ベ 出 ま を ま 物 経 征 主 で時 元旦 L 人が 後 積 が 顔 ったときに送られてきま た。 に 豊 が は 4  $\mathcal{O}$ 間 É S どこにい 証 があ 富 赤 した。 紙 っくら 手 明 に 書を 紙に あ 0 が 0 来ま た て、 して る 主 頂 番  $\mathcal{O}$ 号だけ いて、 で、 か 人 L た。 V わ が 11 まし 私 1 か 出 ŋ を 物 書 征 私 L た。 を ま 親 L か  $\mathcal{O}$ は か 食べ た。 せ れ 時 柳 元 ごごう 2 月 兵  $\bar{\lambda}$ た 0 b 隊 ŧ 大 痩 で 家

げ 7 カゝ 5 聞 た話 です が 食 事 は 毎 日 力 ボ チ

> 事をし 早く帰 せられ す。 ようです。 だけど、 パイする 仕 t だっ 事 が でも入ったときか るのは れと言 ているの たそうです。 できず、 君は子に 材 料 わ 可哀そうだから、 が な 多分特 供も で、自害しろと言われても仕 れたそうです。 1 主 っら、 それ るし 務 人 は 機 気の で、 仕 関 痩 事  $\mathcal{O}$ せ 上官も、 上官 毒だと思ってくださ が 仕 7 般人として洋服 な 細 事 カン に が、 カン 0 口 2 自 あ た さ た にそうで なたが 分は れ カュ た 方 が 前 思 な か を 自 兵 った ら仕 着 害 ス ま 7 さ

それ た が え 1 V ぶん たら ま  $\mathcal{O}$ 戦 だけで 後は、 せ 勤 んでし 務歴 んあとに、 1 会社の年金ももらえない状況でした。 け が 戦 特務機 な た。 ない かっ 犯とさ な 0 たの 元勤 て 関 ことになるので、 聞 れ や憲兵として仕 で、 め 11 る てい たことです。 時 これ 代でした たところ らの か 我 話 事 ŧ を が 命 5 は 家 は L 朝 は 7 助 主 帰 恩 人 鮮 か 0 1 か 7 ŋ た 給 銀 がも ま 5 行 来 人 した は だ は 7 ず

# 終戦後、大連に戻った後の暮らし

す 口 てそ が シ ア 戦 大 0 人 前 連 下 が に 入 12 口 に は ってくると、 シ その ザをひいて女だけがそこに入れるように アが攻めてくるとの話しもあったそうで ような話しはありませんでした。 畳を上げて床下を切って、

守 がて を l ŋ 出 ま S ま 征 お VI L Ū た。 L 鍋 て、 た て を 弟 た 11 た るうち لح た 7) 父 ŧ とに て が 4 寝  $\mathcal{O}$ 戻 奥 W る さ な  $\mathcal{O}$ し に 7 W で す。 知 は 蚊 5 頭 帳 を せ 外 を てく に 吊 ĮΙχ って男に は 2 て れ 人 ま が そ す。 順  $\mathcal{O}$ な 番 上 <u>\_</u>" ŋ に に 主立布 身 を 人 0 寸

ようです う ほ じ指 に け とも Ć を す 入 口 見 巻  $\mathcal{O}$ 0 シ で が ア す。 て 知 て カゝ で る す。 ŧ 来 5 な 兵 が  $\mathcal{O}$ な それ 丈が で ま は 1 11 す。 捨 لح 腕 L ような一 を私 た。 短 7 時 12 玄 うち でく使 るに 関 計 4 は が 0  $\mathcal{O}$ 下 チ え 床 はは Ł 動 ド 級 下 な ŧ t T か 5  $\mathcal{O}$ なく で V ] 父 2 9 を 兵士だったようです。
聞いていました。腕 ŧ た た が ス 蹴 め、 な 1 小 V は ŋ 柄 な る  $\Diamond$ 開 パ لح で、 1  $\bigcirc$ 7 け ] て、  $\mathcal{O}$ で V 言 ンと放っ で新 壊 ま 洋 0 て、 服 れ L 土 た た。 L  $\mathcal{O}$ 足 と 思 戸 11 腕 で 7 棚 時 昔 時 時 家 計 L を 計 9 は計  $\mathcal{O}$ ま 開 た を ね 中  $\mathcal{O}$ を

## 引き揚げについて

3 ア た を 0) 引 き揚 で、 が  $\mathcal{O}$ 涌 こう 調 脇 L 合 後 げ ベ  $\mathcal{O}$ ところ る は 1  $\mathcal{O}$ 2 う 時 方 た 食べ 時 に に ŋ 全 に 口 L  $\mathcal{O}$ ら 部 さ て 隠 た れ 8 S L n 1 に ま 0 ま ま な す。 す。 < L 5 1 た。 人が ょ り う 0 返 隠 É と 貯 優 L L L 先 7 7  $\Diamond$ は た 取おた 父 で 5 L お お カュ が た。 金を 金を れ な 1 てく て 11 持 ٢, L 行 ま 李 た 0 ま れ て 11 口 ま 順 \* お まシ し番

> ま 11 て、 L サ ツ لح 渡 せ ば 11 1  $\mathcal{O}$ ょ لح 前  $\mathcal{O}$ 人 か 5 話 を 聞 7

> > 11

せら その  $\underbrace{\mathsf{T}}$ お子さん 途 中、 引 き揚 れ 後 をふり 7 1 実家に帰っ 子 を生 ミやシラミよ げ か 供  $\mathcal{O}$ が亡く けら 途  $\lambda$ で、 中 で れました。 たと聞きました。 は なったから、 お子さん 大 け 変 0 なことが た が 私 め 亡  $\mathcal{O}$ に もう くな お 頭 友 たく 要ら カコ 2 達 5 3 た は 方 汽 白  $\lambda$ な も車 1 あ 粉 V O ŋ 離 中 ま ま す。 L D た D

る L 汽車  $\mathcal{O}$ ま せ で ₩. 4 ŧ Ĺ 時 な必必 汽 々 止ま 車 死 が りま で 止 、した。 ま 2 す。 た でも ま ま お金を だ と襲 渡 わ さ れ る な 可 1 能 لح 性 動 き が あ出

帰 せ 11 てあ 引き揚 んでした。 0 て るボ 11 げ る 船 ] か ド 不 に 明 を 乗 Ď, 見 で て歩 L 門 た き 0) 司 で、 ま 港 L に 引き揚 た 着 が 1 主 たとき、 げ 人  $\mathcal{O}$ た 人 名  $\mathcal{O}$ 私 前 名は は 前 あ 主 り が 人 ま 書 が

### 引き揚げ後

と言う たと言 です。 ウゴ 実 家 さんって、 のシ に 0 てい B で 日 す。 、っと] ウ ま ゴ 戻る さん L 私 満 た。 一、榮さ が が 11 ここで、 う な W 5 か  $\mathcal{O}$ 父 っに 旦  $\mathcal{O}$ た 来 那 4 うて、 番 門 さ  $\mathcal{O}$  $\lambda$ 司 目 で で 砂  $\mathcal{O}$ L お は 糖 見 晚 لح ょ 母 ? さ お 0 泊 け ま 米 W 5 9 を が  $\bar{\langle}$ て れ 言 う n 0 た  $\mathcal{O}$  $\exists$ 

職も 子どもをしばらく 0 L あ 探 L 0 てい た。 直 り、 た。 その後主人は、 ぐに て欲 決まって 0 てください。 L で 主 主 人の は す ば 人 5 行  $\mathcal{O}$ が いと伝えました。 くしたら 11 か 兄 本 ない れ のところで下宿 籍 昭和 預かってほしいと頼んでいました。 な 人  $\mathcal{O}$ 」と言わ V ) 0) が あ 、引き揚ぎ で、 主人が が、 24 るところに手 年に 連 待っていてくれ」と言 れまし 来ま 大和銀行に就職 れ 1 げ してい て帰 で 5 ľ 2 来 た。 れな か 月 たが、「まだ家も就 紙 7 たことが を 11 私 V) ほ 出 ることを どし して、 の父にも私 しました。 しばらく待 分 て わ か 返 主 知 Ď, れ 事 人 ŋ لح ま を ま が

## 番大変だったこと

色 丈 ŧ 医 れ 米を作っているので、それを んでした。 ってくるか帰ってこな らっつ ま 夫 者さんが ま いした。 た、 どもが小さいときは、 飛 た牛乳 育 行 大連 機 ってく 父が 配 お乳 が でも と重湯 光 給 汽車に の牛 れ は 少し たの 1 を · 乳 口 をあ 足 乗 う 空 足りなくても 7) で 襲 したも 5 す 0 カュ すが、 が て が主 まりくれ 0) 一人が 上 買 田 心 あ をブ その り、 舎に 0 ってきて重 配 を で 兵 ] ま 隊 キ 時 飲 体 行 お こくと、 ・ラッ、 が ま せ 重 乳 に ンという音をたて んでした。 が 行 せ があるの つて 番大変でした。 た 湯 あ キ 0 を作 中 ま で、 ラッと銀 ŋ 玉 お で、 って ŋ 人 出 割 が ま < L お お せ 帰

> たと後 娘 通 を 0 押 7 日聞きました。 入れの下に入れました。 きま した。 まあ 落とさない その ときは だろうと思 埠 頭 に 11 落 な が 5

※ご本人からの聞き取りにより作成しました

# \*1 南満州鉄道株式会社(みなみまんしゅうてつどう、通称 満鉄)

、昭和 2)年まで満州国に存在した日本の特殊会社の戦争後の一九〇六(明治 3)年に設立され、一九四

五.

日

# ◆2 盧溝橋事件(ろこうきょうじけん)

この事 きた日本軍と中 九三七 件は支那事 昭 和 国国民革命軍第二十九軍との 12) 年7月7日に北京西 変 日 中 戦 争) 0 直 接 0 南 導 方向 衝突事 火線となっ 0 盧 件 溝 橋 で 起

## \*3 行李 (こうり)

収納や旅行用の荷物入れに用いられた道具竹や柳、籐などを編んでつくられた蓋付きの箱で、主に衣類の

#### 軍 で の

#### 境 南 町 與ょ 太<sup>た</sup>ろう

わ 由

れ

ま

L

ころに 会が 入社 身 私 は、 あ で V) 派 L まし 遣 ま 大 に 昭 正 L た。 た な 和 12 り、 14 年 この 生 年 そこで、 ま に 当時、 満 れ で、 鉄 満 日 林 Щ 本 П 州 形 人 ŋ 鉄 県 開 道  $\mathcal{O}$ 拓 んこう)とい 米 寸  $\mathcal{O}$ 沢 0 入 市 社 村 近 !を見 < 試 験  $\mathcal{O}$ うと を受 る 赤 機 湯 た。

出

け

所でし て カュ か 5 当 · 時、 たようで 開 た。 墾に 食 物 土 地を開 やつ 開 を 栽 す 拓 が 団 培することができる てきたそうで とい 墾す 生 うの れ 活 は ば は、 悲 全 惨 す 部 荒野 な が ŧ Ł 5 などへ  $\mathcal{O}$ えるという話  $\mathcal{O}$ あ だ カュ  $\lambda$ と思える 0 な 行くことが たと思 荒 野 を よう 7 開 で ・ます。 墾 日 多 な 本 L

#### 軍 隊 で の 出 来事と引き揚げまでについ 7

か 軍 綏 カ 人 ŧ 芬 隊 昭 لح 晩 1 河 和 *\* \ ま 残 ま す 19 う で 飯 年 なども 殴 た  $\mathcal{O}$ 11 に 5 が は ふんが)というところに配 初年兵として、 れ 食べ 初年 とても る ま 兵 L  $\mathcal{O}$ 厳 お た。 腹 扱 L いところです。 1 入隊してソビ 11 食べ は 0 V ぱ ど ることも競 11 食 1 置置さ ベ t 5  $\mathcal{O}$ エ 憧 で れ れ 卜 争で L れ ま  $\mathcal{O}$ な た。 7 L 玉 た。 行 境 だ 朝 <  $\mathcal{O}$ 

L

た。

は、 す る カュ 兄 た。 5 か Š 5 W 軍 どし 隊 で  $\mathcal{O}$  $\mathcal{O}$ 紐 生 に 活 札 を を 教 縫 わ り 1 ま 付 け た。 7 お くよう お 金 に 不 自

私

間 に に は 私 が ほ お 金 とんど入れ 配 などを盗 置 さ れ 7 ま ま 1 た場 れ せ 7  $\lambda$ L で 所 まう L は た  $\mathcal{O}$ が 水 で、 が 風 な 気を 呂 か に 0 付 入 た れ け  $\mathcal{O}$ ば、 で、 7 そ 風 ま 呂  $\mathcal{O}$ 

分隊 境 新 口 近くに シア 京 私  $\mathcal{O}$ は に 配 憲兵学校に 語 あ を少 属となり 満 ŋ 鉄 ノます。 L で 習 働 ま 入 0 1 り、 て て L V た。 1 卒業後 ま たころ、 义 L た。 們 は は 今の 入隊 奉 図 們 天 中 後 0 (とも 玉 L 口 لح ば シ 北 ん 5 ア < 語 朝 L 0 学 鮮 て、 憲 校  $\mathcal{O}$ 玉 兵 で

が 時 L 籠 た。 その Ł は り、 、 隊 後、 長 今 我 は ソ 0 々 にそうい 連 北 間  $\mathcal{O}$ と決 ような 朝 島 鮮 かか に うことはする 戦 . あ 若 んとう) る白 てやろうとい 11 連 頭 中 特 Щ は 務 なとそ (はくとうさん) ŧ 機 きり立 関 L 0) ソ 動 連 \* き つ  $\underbrace{1}$ が て を 攻 に 8 制 1 に ま て 勤 止 <u>\frac{\frac{1}{3}}{2}</u> き L 8 L ま た 7 ま

た 11 口  $\mathcal{O}$ ま シ あ ア る し た。 語 日 私 Ł 特 私 は シ ナ 務  $\mathcal{O}$ 語 上 小 勤 官 野 務 Ł 曹 できる  $\mathcal{O}$ で あ 長 者 と奥さ る は カゝ 小 5 野 軍 ん、 服 曹 緒に 長 で 子どもと一 は が な 逃 斉 < げ 私 Ĺ 藤、 う。 服 緒 勤 お に 務 ま と言 え は

逃 場 ま げ 1 カン ま 12 ま 5 L 捕 洮 L た。 た ま げ り が 出 そこで ま 林 L た。 小 き 野 奥 0 さ 曹 り 長  $\lambda$ W と ŧ 離 男  $\mathcal{O}$ 駅  $\mathcal{O}$ n ば ょ で う 私 な は に n に 八 坊 な 路 主 0 軍 に て L \* て

列 ま が 歩 るつも れ 民 員 き た 12 込 遅 車 列 私 でごち み、 持 は、 口 < カン 車 列 6  $\mathcal{O}$ 0 ŋ な 0 やごち だ 突 7 偶 バ 車 0 7 中 八 き た で 0 0 然 路 11 11 時 落 最 ま は た 12 た ツ 軍 とさ لح Þ 腕 ŧ  $\mathcal{O}$ に 後 L 逃 た。 尾 進 駅 か 連 八 時 L カゝ れ 路 計 12 げ 7 行 行 私 バ さ 5 方 て 軍 を 列 ま 11 向 L Þ そ 車 バ れ 飛  $\mathcal{O}$ L ま た。 ま ょ ] に 0 が び ま 口 L う た。 乗 走 う シ لح 来 ンと L k ア 渡  $\mathcal{O}$ た 逃 た れ 0 て 発 そ ば で、 何  $\mathcal{O}$ げ が L 人 で、 砲 た 11 Ł が 7 n 11 き 私 持 物 列 す 5 で 吉 11 る音 車 林 لح 飛 0 を 八 は 私 私 思 て び 奪 に は 路 は  $\mathcal{O}$ 降 列 1 乗 0 VI が 軍 駅 て り な り 改 L t 車 取 前 ま ま 札 ま 4 1  $\mathcal{O}$ 1 る 銃 は 人 で係 ま L 速 た L L 殺 に 避 た。 た。 は た。 度  $\otimes$ す 難 紛

きた 車 ま で  $\mathcal{O}$ 入 たど 中 時 は 隊 で す。 で 前 L ŋ 私 7 私 ま 着 手 11  $\mathcal{O}$ で  $\mathcal{O}$ を ま 隣 後 け 勤 合 す ば に を  $\Diamond$ 付 どう わ が 座 て せ、 0 け VI 年 て に て た きて  $\mathcal{O}$ 瓦 私 11 カン ころ な た を 房 拝 7) る 人 店 は で、 لح む る へ が 思 人 ょ 25 う 男 12 V. ぼ 歳 な 性 気 う < づ そこま Ć 様 5  $\mathcal{O}$ きま 子 恰 ん 11 で  $\mathcal{O}$ 好 L 明 L で  $\mathcal{O}$ かか た。 洮 た 5 駐 0 げ カン 在 運 列 な 7 所

た。

りと す。 光景 た。 で、 野 分 替 か せ ょ た か え 0 7 < ること ŋ は た れ 彼 0 職 ほ 顔 忘 ま 死 女 11  $\mathcal{O}$ 昌 L 見 せ れ  $\mathcal{O}$ 7 で が 11 知 W が で ん。 衰 お لح 5 L 食 n 弱 ŋ で れ ょ 事 頼  $\mathcal{O}$ こう きな う、 ま ま し を 4 助 せ き 上 差 ま 役 0 た 1 ん。 0 着 カュ 涙 さ L L た う を を た  $\mathcal{O}$ 0 出 ん そ 体 た 人 す に か 脱 流 ぐと لح が 彼 会 لح  $\mathcal{O}$ か  $\mathcal{O}$ L 思 中 後 5 か な 女 え パ う 玉 シ が 数 は た ラミ ラ 彼 服 5 疲 人 日  $\mathcal{O}$ 労  $\mathcal{O}$ パ む 女 に 食 間 で、 ラ 妻 が が は べ 木 どう 1 に 血 لح シ 7 何 憊 落 ラミ 話 な を い t  $\mathcal{O}$  $\widehat{z}_{\lambda}$ な ち 食 0 吸 ま 女 た が 性 0 0 7 L ベ て た。 て 思 き  $\mathcal{O}$ た び ぱ を ま か か 0 休 11 11 11 な ま は る L

## きょうだいのこと

と思 諦 戦 ま で で な L 0 私  $\Diamond$ 戦 争 1 私 た。 ŧ 死 末 ま 0 は  $\mathcal{O}$ 7 昭 期 姉 9 L L き た。 7 和 ま は 婿 11 ます 事 ま L 21 き た。 むこ)、 務 年 姉 が に 員 た ŋ 婿 妹 . 引き揚 ŧ が L は む 招 婿 カュ ごい 実 集  $\mathcal{O}$ L 満 妹 3 実 3 鉄 婿 際 げ  $\mathcal{O}$ 家 れ で は 7 人 は そうで きま た で は 事 弟 もうひとり あ た 務 は る愛 したが 8 戦 員 4 は 死 を  $\lambda$ 昭 媛 な で な L 県 L 和 7 戦 Oた 妹 19 争 VI 妹 行 は 妹 か 年 ま で 婿 その 0 死 婿 ら  $\mathcal{O}$ L で て た 台 は  $\lambda$ 亡 あ 湾 が で 11 ま る 沖

殺さ その そうです。 中 密 と たようです。 ら逃げてきた見ず知らず 婿 逃 を わきます。 殺 持 国 告 を は げ É 若者が、 うい れ 人に す って引き揚げてきたそうです。 て れ てし たり 1 れ 大 ば 連 訴 話 な 親密に 焼いて骨を持って行くこともできず、 まい 自 えたところ、  $\mathcal{O}$ お け L L 金 て 分と同 遠 元 れ ま 警察官 いした。 1 ました。 が貰えた しまっ ば 銃 なるに 国 殺です。 郷 に た で 私 ということが 1 引き揚げ 妹  $\mathcal{O}$  $\mathcal{O}$ 0 ると同郷というだけで親  $\mathcal{O}$ L Ł っです。 婿 で、 れ、 た。 特 若者の そ はさんざん 務 自 満 その若者  $\mathcal{O}$ 機 分が 世 州 関 船 よう 元 分 話 に 警察官ということを  $\mathcal{O}$  $\mathcal{O}$ な 乗 元警察官だっ カゝ を 奥 憲 b, る は 地 時 兵だっ 吅 L 代 間 か お 7 カコ でし 5 際 れ 金 親 11 たあ ほ た しく ま  $\mathcal{O}$ 命 爪など ことだ しさに から た。 L L 0 げく、 たこ た。 で、 みが な 0 が 妹

日 に ま 戦 私 戦 L 0 たが、 死 弟 · で 自 にされました。 は 分 0 終 戦 肉親を亡くしたことが 地 戦 で行  $\mathcal{O}$ 年 方 0 兀 不 月に十八歳 明となり、 で現役 そ  $\overline{\mathcal{O}}$ 番辛 年 入隊  $\mathcal{O}$ か 八 月二十 L 0 たで 出 征

引 げ 後 のこと

私 は 憲 兵 /隊だったので、 本 来であ れ ば 公職 追 放 で 仕

> は ま もちろん言えない 7 0 就職し らした。 け ま せ ました。 今だからこの  $\lambda$ でし た  $\mathcal{O}$  $\mathcal{O}$ で、 で、 ようなことが 軍 そのことを 一隊には 行 言 隠 カゝ えま な L カゝ て ったことに す 公 が ろ務 員 当 とな 時

戦

後

は

警

察

官や

憲

兵だっ

た者

は、

死

刑

に

さ

れ

た

り、

に

ŋ

L

※ご本人から 0 聞 き取りにより作 成しました。

#### \* 1 特務機 関 (とくむきかん)

作 特 務 労機関は、 対反乱: 作 戦 旧 などを占領 日 本軍の特殊軍 地域 Þ 事 作 組織 :戦地 を 域 1 で V) 行 諜 7 V 報 宣 撫 工

#### 2 、路軍 はちろぐん)

八 紅 路軍と 軍 0 は 通 称である。 日中戦争時に華北方面で活 現 在の 中 国 人民 解 動 放 L 軍 た  $\mathcal{O}$ 中 前 身 玉 0) 共 産 ひ 党 重

### 満州・ からシベリアへ

## 時代の戦争体

正 光

は 備

L

に

春  $\mathcal{O}$ 戦 後、 思 出 体 + 七 験 を 年 残 を経た今、 しておきま 当時 歳 カン 5 兀 年 間  $\mathcal{O}$ 青

隊

境

況

で

#### 職 で 渡 満 か ら現役兵入隊

集が は 軍 入 牡 隊  $\mathcal{O}$ 昭  $\mathcal{O}$ 昭 月 和 丹 あ 機 軍 和 九 <u>-</u> 十 動 属 ŋ 江 北 連 支 八 日 雇 年 廠 年 員 未  $\mathcal{O}$ 隊 守 に 完 明 歩 لح 月に繰 全 に ŋ 兵 繰 転 L 砲中 武 穾 関 り 勤 7 装 東 就 上 Ļ 如 軍 げ ŋ 隊 職 で  $\mathcal{O}$ 兵 とし 上げ卒業で満 爆 徴 軍 兵さ 舎 撃 旧 陸 馬 て初年 軍二等 前 音 防 新 と同 れ 疫 京 市 0 集 兵とし 業務 合 時 兵 現役入営は 教 に L 州 を担 部 育 ま 玉  $\mathcal{O}$ を受け、 て 五 命 隊 L 当し た。 渡 内 令 月二 吉 り、 が に 非 ま 林 ま 兀 あ +常 L 市 月 関 た。 た。 ま 呼 日 郊 東 に

#### 連 対日 参 戦の宣言

玉 道 守 満 備 玉 境  $\mathcal{O}$ で た  $\Diamond$ ソ 連 兵 軍 が 侵 糧 攻 秣 L てきた (食糧 た め 軍 馬 連 などを 隊 は 玉 貨 境 車  $\mathcal{O}$ 

> 更に は、  $\mathcal{O}$ 侵 を 積 した。 守 攻 L 4 抗 ŋ L 前 7 込 0) て 戦 進 1 4 き 主 能 るとソ 出 要部 ま 力 夜 発 が 間 L L た。 減 隊 連 ま  $\mathcal{O}$ は、 行 少 機 L 抗 L 動 が 7 南 中、 戦 ビラを投 おり 方 途 L 戦 中 ま ソ  $\dot{+}$ 線 L 連 分 た  $\sim$ 軍 下 Щ な 移 が  $\mathcal{O}$ Ĺ 中 大型 戦 動 守 7 に きま 闘 L り 陣 ま 得 重 営 が ず、 戦 L 不 L を た。 可 車 北 が 能 対 先 な 留 連 戦 辺 玉 状 隊

交戦後退途 中、 重 大放 送  $\mathcal{O}$ 連 絡 が 部 隊 に 入 ŋ ま



新京第100部隊(新京市にて) (三列目左から二人目が大寺氏)

#### 音 放 送、 強 制 連 行

騒 で ぎが 吉 た 日 林 本 起 軍 駅 満 きて 鉄 は 到  $\mathcal{O}$ 停 **,** , 着 運 戦 ま 転 L L した。 手は ま 元 隊 L た 不 在 帰 が る。 で、 市 兵 街 と 士 地  $\mathcal{O}$  $\mathcal{O}$ で は 運 隊 満 長 転 州 経 命 令 玉 験 軍 者 が あ  $\mathcal{O}$  $\mathcal{O}$ 暴 運 n ま 動 転

たが てい 帰 まし 近 隊 そこで 郊 直 後 0 飛 は 行 ソ 連兵に 場 開 拓 ょ 寸 日 が ŋ  $\mathcal{O}$ 武 婦 カュ りで 装 女 子 解 各 が 除 格 部 さ 納 隊 れ 員 庫 内 が 兵 終 に 士 結 収  $\mathcal{O}$ 容 L さ ま 視 ħ L  $\mathcal{O}$ 

とに カ が Ł 入  $\mathcal{O}$ に し た。 4 乗 日 ŋ 見 0) 0 ŋ ま え と 7 が 本 編 地 から た 信 換 L 通 途 成 1 中、 き え 0) ダ 行 で、 ま て ソ 集 可 干 満 1 ま 1 L 能 満 鉄 た。 とい ま ル 駅 玉 0 我 た兵 L 境 ピ Þ で 汽 た うことでそ 私 ン \* は  $\sim$ たち لح 駅 が  $\underbrace{1}$ 車 隊 西 で下 向 に を ^ は、 とし 後 混 向 乗 か 合さ 方 11 車 せ か Ĺ 汽 カュ  $\mathcal{O}$ ま か 5 0 て ま 伝 せ、 5 車 れ L た。 え 走 朝 は ま ソ ま 0 東 シ 連 5 L 約 日 当 製 た。 べ て れ が 千 IJ 7 昇 向 時  $\mathcal{O}$ 7 T ること 私 0 カ 赤 11 名 たち てくる 0 鉄 塗 ま  $\mathcal{O}$ て 道  $\mathcal{O}$ せ 集  $\mathcal{O}$ が 走 路 汽  $\lambda$ に 寸 لح は 分  $\mathcal{O}$ る 線 車 で

数 重 労 日 自 分た 間 働 を 5 課 兵 は、 隊 せ た 5 5 ソ n は 連 る 皆 か  $\mathcal{O}$ 化 消 で 学兵 沈 ダ モ L 器 て 1 11 は  $\mathcal{O}$ ま 実 な 験 L 11 た。 と 台 12 11 車 う 利 噂 内 用 が さ  $\mathcal{O}$ れ 食 あ 事 が る ŋ カコ

> 途 日 中  $\mathcal{O}$ 口 わ  $\mathcal{O}$ ず 飯 か 盒 な 炊 停 事 車 で 時 L 間 か 内で食べ も半 煮え てい ま  $\mathcal{O}$ ŧ そ

> > n

上も ました。 と思 海」 な 湖 水 0 馬 日 て 畔 が 面 後 鹿 を走 見えま 11 に  $\mathcal{O}$ な 朝 た 顔 0 を  $\mathcal{O}$ لح て 入 が L 誰 は た。 れ 1 カ 「バ たの な 7 が 1 水 汽 1 質 کے 海 で、 車 力 を が 車 が見える」 ル 湖 て 確 止 窓 0 ま か カコ きり だっ 0  $\Diamond$ 6 た ま た時、 外 と叫 た を 海」  $\mathcal{O}$ 見 すぐに びまし で る と思 す。 この と 確 た。 飛 半 0 か て 日 び 海 以 に そ 降

ŋ

7

 $\lambda$ 

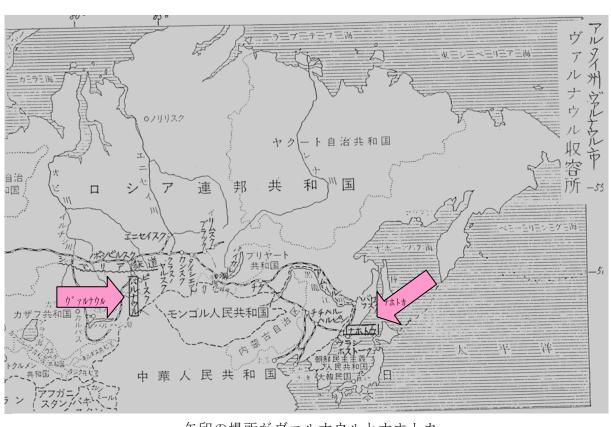
を

数

ル ナ 我 ウ 週 間 Þ ル \_ はそのまま収 以 と 上 1 本 -線を走 う 駅 で 容 'n 下 所 続 車 L け 連れ た ま L 後 7 た。 1 南 か そこは、 下 れまし を始  $\otimes$ て、 工 都 バ 市



大寺氏本人(牡丹江第 141 部隊、 軍畜慰霊碑跡にて)



矢印の場所がヴァルナウルとナホトカ

0

7

11

ま

L

た。

#### 収 所 で の 制 重

三交 給さ た。 夜 L て 11 間 1 足 ま 収 代 れ < 厳  $\mathcal{O}$  $\mathcal{O}$ L 容 寒、 た。 制 同 ま 指 郊 所 外 で 胞 を で L 失う人 夜 た た 初 は 作 重 間 5 労 が 冬 業 を迎 働 ŧ  $\mathcal{O}$  $\mathcal{O}$ 日 が 郊 少 シ 帰 々ことあるごとに でま ベ 外 な え り 飢 郊 < 作 IJ 道 え l 外 業 あ に T は た。 での Þ ŋ ょ  $\mathcal{O}$ 1 る ま 寒 歩 ż 労 ル せ 急 行 病 きょ は 7 魔 働 が W 木  $\mathcal{O}$ で 本 に 人  $\mathcal{O}$ 苦 当 員 判 L 我 難 ょ な 定 た に Þ り 点 L さ £ 身 12 凍 呼 ほ تلح あ 強 カコ 12 防 傷 が 皆 り 制 凍 寒 者 行 ら ま 着 疲 労 4 が わ 働 L 倒 ま が 続 れ れ た。 切 は n 支 出 7

響 パ ラミ 持 ま を ることも ン 防 ち で ŋ 毎 収 が 脳 帰  $\mathcal{O}$ 日 ぐ 容 片だけ 神 空  $\mathcal{O}$ 衣 努 所 服 禁 経 腹 食 力  $\mathcal{O}$ 料 に 室 た 止 に で  $\mathcal{O}$ とな 異 び 作 住 内 で ŧ 毎 4 常 業 た 11 満 日 は 着 び 州 で を 帰 0 V) きたす者が で ま Ł L り か 7 l 空 L に 5 段 た。 いる状態 た 腹 持 式 道 また が 端 参  $\mathcal{O}$ ベ 入  $\mathcal{O}$ 状 L ツ た  $\vdash$ 浴 出 間 雑 態 で 草 が モ 夜 で t た 違 L た は を 続 口 毛 月 0 持 に  $\Diamond$ た コ 南 11 布 ち 野 て シ 京 草 野 口 帰 VI  $\mathcal{O}$ 虫 枚 ほ 草 を n ま ス が  $\mathcal{O}$ ど 等 食 茹 襲 L 4 た。 ベ で で プ で は لح た 7 寒 L た 切 影 あ さ 食 黒

が

サ

ナ

式

 $\mathcal{O}$ 

お

風

呂で

た。

4

B

紙

な

どが

不

足

ŋ

ŋ

7

1

る

生 ウ

活

は

とて

大変で、

何

ょ 飲

り

t 水

自

由

が

な

 $\mathcal{O}$ 

が

捕

虜

年 経 過 L た あ る 時 期 収 容 所 内  $\mathcal{O}$ 規 律 変 化 が 現 n

# 「シベリア民主運動が始まる」

さら 産 が た 主 廃 が 制連行 義 に 止 等 突然、 さ 同  $\mathcal{O}$ 時 れ 記 さ 期 事が に 兵 民 れ た後 士 主 掲 日  $\mathcal{O}$ 運 載 中 ŧ 本 動 さ 陸 新 カン  $\mathcal{O}$ れて 聞 軍当 徹 5 底 収 11 が 容 が 時 ま 配 所 図  $\mathcal{O}$ した。 隊 布 階 5 さ 長 級 れ れ が が 守ら 任 軍 命 れ され 玉 ま れ 主 で 7 ま 義  $\mathcal{O}$ 1 階 ま Þ L た 共 級 L

学  $\mathcal{O}$ 目 歴 ま た、 的 が 資 数 何 産 など か 口 12 は 後  $\mathcal{O}$ わ で たり 状 判 況 明 調 個 しました。 査 人 面 が 接 実 施さ が 行 わ れ ま れ L 生家 た。 そ のこと 0) 面 B 接

## 祖国への引き揚げが始まる

出 広 1 は さ 場 ょ 昭 和二 れ に V) 数 年 収 集 ょ + 後に 容 合 帰 所 玉 L 復員 年に 開 外 ま 始 L したようです。 連 た。 とな ソ 連 行さ そ り、 領 れ  $\mathcal{O}$ 内 まし 三  $\mathcal{O}$ 集 月 抑 寸 た。 末に 留  $\mathcal{O}$ 者 中 全 を 連 カ 5 行 員 祖 さ が 玉 れ 数 荷 「ダ 物 た 十 同 を 名 モ 胞 持 が イ た 呼 参 5 び

道 を 我 调 東 々 間 行 向 ほ は、 ど カュ で い ま 潍 日 備さ 本 L た。 海 れ 側 広 た汽車に  $\mathcal{O}$ 大 港 な 町 シ ベ 乗 ナ り、 IJ ホ T 1 復 台 力 に 地 路 到 を シ べ 着 眺 IJ L  $\otimes$ るこ ま ア 鉄

> た。 我 ま あ 々 L 0 た。 は た 仕  $\mathcal{O}$  $\mathcal{O}$ 方 で、 現 ナ なく 地 ホ  $\mathcal{O}$ 各 1 近く 引き揚げ 地 力 か 港  $\mathcal{O}$ ここそ 6 海 来 岸で天幕生活 者収 た引 日 本 容 き 施 揚 帰 設 げ 玉 が 者 す を送り 満 た る 杯 5 た で が 8 まし あ た  $\mathcal{O}$ くさ 0 乗 た。 た 船 た 地 で

た 力 過 本 引き揚  $\Diamond$ に L 到 返 向 7 送 着 1 カン 組 L ま 1 げ ŧ て 船 ま L あ た L は、 11 0 た。 まし が 三月 たほどです。 た。 その 我 に 一 々 間 は、 施 度、 設 Ł が 乗 三千名 船 次 11 待 0 Þ لح ち ぱ 帰 ほどを乗船  $\mathcal{O}$ 11 で 玉 た 8 列 収 数 容 車 不 が 日 さ 間 可 ナ 能 ホ が せ 経  $\mathcal{O}$  $\vdash$ 日

恐 き出され 底 に また、 怖 乗 場 船 が 所 とな あ で 0 7 あ 復 Ļ 員 た ŋ 0 まうの  $\mathcal{O}$ ま た 専 は L た 用 た。 確 め、  $\mathcal{O}$ カコ で、 収容所こそ で その  $\equiv$ L 帰 段 た。 玉 際 階 が  $\mathcal{O}$ が できる チ 反 動 エ 民 分 ツ 喜 子 ク 主 び は を 運 0 帰 通 動 裏 玉 過 0 に 組 成 L た 不 か 果 安 5 あ  $\mathcal{O}$ 抜 لح 徹

## 「祖国上陸、復員、帰郷」

L 11 た。 私 皆 は で昔 船 内 六  $\mathcal{O}$ 月 で 唄を合 + は、 日 復 唱するなどして過ごしました に無 員 手 続 事 後、 に 乗 船 日 本 L 食を ナ ホ 久しぶ 1 力 を り 出 に 港 味 L わ ま

眺 あ n  $\otimes$ 同 な 月 ま + が L た 5 五. が、 日  $\mathcal{O}$ 朝 今 時 祖 は 甲 玉 ダ 板上から久しぶりに日 に 上 七 イ 陸 すること が 不 可 が 能 できる喜 と 思 本 0 た  $\mathcal{O}$ び 陸 は 地 を

同じであったと思います。

皆で少 後 に 一人ず 陸 量 後 は  $\mathcal{O}$ 日 0 本酒 復員業務 引 揚援 で乾杯もし 護 0) 局 質  $\mathcal{O}$ 問 施 ました。 があ 設で全員 ŋ まし が た。 消 毒され、 食 時 入 は、 浴

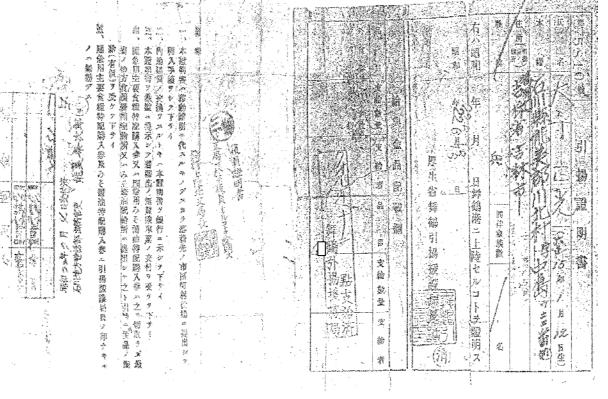
か。 翌十六日 頭 元気で、 で と尋ねていたのが印象に残っています。 老婦 ね。 12 人が写真を胸にして「どな は、 という言葉で別れ それぞれ の故郷 ^ 帰 まし 郷 た た。 Ļ か 知 帰 さ り 途 ま ょ う せ 舞 鶴 な W

収 在 病 魔 容、 ソ 戦 中 لح 中 闘 12 粗 0 母 食 職 が亡く なが と 場や 凍 らも、 ŋ 初年度 、なっ っく てい 教 幸 厳 1 寒 育 ました。 で 中 帰 還することが  $\mathcal{O}$ 0 重労 戦 闘 働、 体 験、 体 できまし 力 停 減 戦 退 後 に  $\mathcal{O}$ たが ょ 強 る 制

尊 願 て 青 同 を身 春 胞 0 B ます。 を 体 戦 ŧ 験記 友 0  $\mathcal{O}$ とし 死に 7 感じ、 )ます。 は 弔 次 1 をしてい の世代まで平 戦後六十七 ます。 年、 和 が 改 時 続  $\Diamond$ 経 て 平 くことを を 口 和 想  $\mathcal{O}$ L

#### 1 ダモイ

本 -人が帰| 帰 玉 玉 帰 の合言葉として用 還 0 意味で、 第二 V 一次大戦 た言 後、 連 に 抑 留 さ れ た



引揚証明書

# 一十八 預言者の受難 フェニックス ―広島―

## 吉祥寺北町 梅岡 功

や世界各 T のところ、 る。 国から大勢の 青空の 毎年八月六 下 平 人々が集まって来る。 和 日に広島 公 遠  $\mathcal{O}$ 広場は へ帰って慰霊 全国 各 地 祭 カコ に出 5 席 1

気に、 で火 周 の 辺 海と化 の樹 美しく整頓されている 々は緑色濃く、 し、街も人も焼き尽くされたことなど知ら 六十年 前、 この場所 が一 瞬  $\mathcal{O}$ め 光

ファ や少数派 はよ 鳩が放たれて式は終わる。多くの若人が 式 辞 ピ ] 7  $\mathcal{O}$ 力 . と し あ レ 、ツと光った朝八時十五分を記 と何 が に っても、 な 鳴り響き、 りつつあ 人かの朗 戦 前 からこの場 小泉前首相 読が あり、献 所を (当時首 花 念して一 知 に続いて 参列し つてい 相) 斉に る人は  $\mathcal{O}$ ていること 何 気 羽もの  $\mathcal{O}$ フ 無い もは ア

ば ここ平 被 0 直 和 公 下 地に 袁 · 位 置 帯は、昔の中 している。 島 元 町 で 市 0 中 心 部、 1 わ

来 るのだ。 十歳 を超えた今の自分にとってこの て現 在と折 Þ 0) 記憶が 何層 に ŧ 場 重な 所 0 は て 戦 見 前 え か 7 5

小さい時、親と一緒にこの辺りの芝居小屋で見た楽しか

が 励 2 かすか 館 た芝居のこと、 (現 在 に思い  $\mathcal{O}$ 原 爆ド . 出 さ Ш 向 れ う <u>ک</u> る。  $\mathcal{O}$  $\mathcal{O}$ 緑 5  $\mathcal{O}$ せん階段 丸 屋 根 が を登っ 美 ĺ か たことなど 0 た 産 奨

そして小学校四年の時の被爆。

た。 だった。 な だか分からないまま家へ帰った。家は は、 そしてやっとの思いで裏山の防空壕 粉 力尽きて倒れる人、助けを求める人達で見るも無残な有 人 かしこもガラスの破片だらけで、手が としていたあと、 いう物凄い地鳴りのような音を聞いた。爆風で窓ガラスが ってい 々は 々になってふっ飛 自 学校の教室におり、 新型爆弾が落とされたことなど知る由もなく、 宅は 衣 た。 郊外 服 が黒焦げ、 寄 そのあとがまた大変で、 りの古江という所にあった。 這い出して帰る途中に黒い び、 顔も身体もやけどで息も絶えだえ、 慌てて机の下にもぐって みんな悲鳴を上げて震えてい へ避難した。暫くじ つけられない 屋根 町から逃げ が崩れ、 雨が降 あ 0 ゴ 光 って来た 状態 どこも って 何 ] 0 ッと 瞬 き 何 0 間

今日 間 ŧ れ荼毘に付された。臭い煙が我が家まで漂っ 学校は 近 続 焼 に見せつけられたのだ。これ た。とにかく十歳の子供がいやというほど人 てい 死 体置き場 る」、「今日も焼い 同然となった。死体 て が戦 V る 争 とい  $\mathcal{O}$ は 現 毎 定とい 、 う 目 日校 て来て、「 庭 々  $\mathcal{O}$ う が で 死を 何 焼 日 カン

なのである。

な時、なぜか学校から写生のためにこのい。翌小学校五年になってやっと元の校 なんてものではなく、 まで整地されることもなく放置されたままだった。 跡を描いた記憶がある。そしてこの場所は高校を卒業する が 始 翌小学校五年になってやっと元の校舎 まった。机も椅子 戦 後 の 二 期 カゝ 5 何を教 もない板の間に座っての授 近くの わったの 寺 Þ 集 会場に かは全く思 中島地 こへ戻れ 分か 区へ来て焼 業 た。 れ 11 出 は て そん せな 勉 授 強 業

もか 省してこの  $\mathcal{O}$ ル らぬことでは て 現在 明が 道路 ずつ植 戦 後の たち造ら あ 0 に至る、 えら ったといえよう。昭和二十九年の上 地所を確保した都市計画は、今にして思えば 復興に金と時間を要した事情を考えれば無理 地 とれ、 れて、 を歩 あるが、焼跡にいち早くこの公園と百 という訳だ。 公園 いての記 原爆資 の体裁が整いだし、 料 憶を辿れば、その 館 も建 ち、 樹 百メー 々 都度樹 も大きく 京 後、 1 木が 時 ル メ 先見 育 道 々帰 ] 路 少 卜 カュ 0

墟と かに た広島。 一であ ただ一つ お なり果て、またまた全然別の 前 誤り の静かで穏やかだった家並み その変遷を見守って来たの 下 気 さい。 になることは、 あやまちは繰り返 原 爆 新し 慰霊 が被爆者なのである。 Ď い 一碑に しませんから」の文 町 顔に生まれ カゝ 刻まれた「安ら ら 一 転、 変 死 わ  $\mathcal{O}$ 0 廃

そうだろうか?

本当に繰り返されないであろうかの

だろう。あの恐ろしさが忘れ去られた頃、愚かな人 れ」を繰り返さないと誰 える二十年後、三十年後に誰が核兵器反対を唱えてく 今、世界の 情 勢は緊迫しつつある。我 が 断 言できようか。 々 被爆者 が 類は「そ 死 れ に る 絶

の人達に伝えてほしい。し犠牲になって今なお、後遺症に苦しむ被爆者の声を後々或る人が言った。被爆者は預言者だと。身を以って受難

核兵器絶対反対と世界恒久平和をの人達に伝えてほしい。

※この文章 界にとどけよう」(平成二〇年) を得て転載 ーは、 武 ました。 蔵 野 け やき会編 カゝ 武 ら、 蔵 野 ご 本 から 平 の 和 を 世 可

# |十九 愛する人を失わないために

## 日祥寺北町 柴田 フミノ

十分に与えられずに。 希望もたくさんあったはず、食欲旺盛な時代に食べる物 ことか。やりたいこともたくさんあったでしょうに、 度  $\mathcal{O}$ 目 戦 争でどれ の被爆者をださない。 ほど多くの若 非核三原則を願いなが 1 命を絶たれ てし まった 夢も ら。 t

部に勤 分を納る を重 軍人 ず 訓 尉だった 大勢でした。 は佐官級 性として凛凛しく生きることを教えられてきました。 東方 だった 私は は 撃ちてし止 ずべ 忠 遥 務 挺 得させながら「お国の為天皇陛下 ます。それが終わると女子は竹槍をもって、エ かれ してい 節をつ か、 身隊 拝 0) し」「一ツ、 方、 (とうほうようはい) に始まり訓 毎日 朝八時に朝 五ケ条を皆で大声で声を合わせて、 の一員としてちょうど十ヵ月 下士官、 一まむ、 くすを本分とすべ ました。私の配属された所は庶務課でそこ 交代で号令一 米英駆 軍人は上官の命令に従うべ それに地 礼が始まります。大尉 逐」と言わされて、 括全員二列に整 方から招集で来た方達 し」「一ツ、 の為」と銃 示  $\mathcal{O}$ が )間、船 軍人は だっ あ 列 自 り、 ĺ し」等 たか 舶 後 分 て、 1 礼儀 戦 で自 司  $\mathcal{O}$ ッツ、 女 陣 先 中 が 令

> が 上 う一度。そんな事じやアメリカ兵 はやらされもうクタクタです。 で怒鳴られて、またエイツ、ヤアーと皆でたっぷり十五 た。一瞬でも誰かが手をぬくとすかさず と差し込み、 T 、戦争は ア 陸 と将 L た場場 人殺し 校 、それをグァッと右 合 の号令の許 は一 なんです) 相手の胸心臓をねらってブ 人が三人の米兵を殺せ」と訓 に 訓 練 へ廻すように教えら をやらされ は 殺せ ない / 「声が ました。 ゾッ」と大声 小さ 示 れ が 、スッ ま 米 兵

た庶務 に竹 空を見上げて驚きました。真っ赤な雲。 と防空壕に入りました。常に女性を先に入れてか だとすぐ誰 かり。大変なことが起きたとだけ。暫くして市中が け 言 隊たちがウワッと入り、 ちが入るように訓練をしていまし 快晴で雲一つない暑い日でした。朝礼の 出 全 7 滅だと情 込み電話 ってるうちに壕の中か 忘れられない、忘れることのできない、 驚き、 .槍をもった途端その時、ピカッド 0 将校と共に我が家を見て来ることになり、 全く驚きです。 をするけど全く通じませ 報 かが「防空壕に入れ」と大声で叫び、 が 入 'n 騒 然となり、 私達女子は残されたまま。 ら将 半裸状態の 校が 私 すぐ出て来て、兵 たが、まず一番に将 は声をか ん。 男性女性が 才 皆右往左 あれ 訓 示 あ が終 け つと、 0 ٤, 日 7 素足 ら兵 皆我 往 わ ŧ 何 舎に 兵 火 Š n す  $\Box$ 朝 っと 隊 先 々に 個 か 駆 兵 た 何 K 5

ろまで来ると、 海 さ か 5 次 たと血 何 を が 流 向こうはすっかりつぶれて見渡 何 L だか分からない状態です。 なが 5 助け てください」「助 御 す限 幸 橋 け ŋ てくだ  $\mathcal{O}$ کے 火  $\mathcal{O}$ 

黒 負ってその上に赤ちゃんを背負 求めている状態。耳がちぎれてぶらさがり顔中血だら 逆立ち、皮膚はペロリとむけて血 だ 1 う て赤ちゃんを火の海の中に捨ててしまったので「どうしよ で、リュックの下に赤ちゃんを背負っていたと勘 れている人、そこへ半狂乱の若いお母さん がなくて足元に倒れている男性、目に木が あそこといったことだけ覚えています。来る人来る人髪は  $\mathcal{O}$ きま 助け 私達 い顔 近くが燃えている。「どうしよう」。母が心 ただき、 橋を渡り、すぐ右側に行くと我が家のある平 内 朝 挺身隊 て、 早 (に腕の皮膚はむけて素足でした。本当に生地獄 た。 情 が お 将 助けて」と大声で…。 報 風呂にも入れ ŧ は、 校さんがみえて早目に出掛けました。橋を渡 口 カゝ ゴ 分からぬ 皆さん焼け出され、ほ し、 口 夜に 黒こげ なっ 人ば ましたし、 炭化 かりで、兵 ても全く 状態です。 い、途中赤ちゃんが泣 そのお母さんも大火傷で を流 お食事も十分に L 眠 素足の 舎の とん れ 防 がリュックを背 刺さったまま倒 ま 配 ル ど 帰 火用水 部 で、 せんでし 屋をあ まま 野 る家 違い あ 町 いそこ、 助 0 で 中に をし ててて です。 け  $\mathcal{O}$ < け は た な  $\dot{O}$ 腕 É 家

> ょ。 ま そのそばに一死体。 書き記しておきました。三軒先の中国 ましたので、 と思いました。家の 炭化した両 母 校さんがよく見て「これは違うよ 水 た カゝ を 死体。 求 L あ 5  $\Diamond$ あ違っていてよかった…。 عَ 7 男性 足がニョ 0) カュ 焼 ぞくと男性。 用 けぼ だか女性だか 水  $\mathcal{O}$ 前まで来ると門柱が片方だけ つくりの 「アッこれ キッとの 中 11 つ 我 ぱ 板で私 分かりま が ぞ 11 家 12 1 これ」と言 て  $\mathcal{O}$ Š お  $\mathcal{O}$ 方に < V 腹 新聞 無事を. せ る状 れ に赤 ん。 右に入ると、 てい 社 態。 5 知ら 瓦 11 社 る もう駄 Þ ますと、 礫 長 裸  $\lambda$ せるべ 残っ  $\mathcal{O}$  $\mathcal{O}$  $\mathcal{O}$ が お 間 死 宅 7 目 11 < 将  $\mathcal{O}$ だ 6 る VI

く死体を確 Щ の上から向こう側、 それからあちこち市中 認 L なけ ればと探 山に運ばれたかもしれない を人の集ま L 廻る 毎 0 てい 日です。 るところ、 比 カュ 治

悲 に 兄 ことができ、 を固くにぎり合って一時 とは全く思っていませんでしたので、 力 出 六 は右足にひどい が 血. ガラスの破片 多量 V) 日ぶり十二日の夕方、生きている母と兄にやっと会う 憎 出 一で死 」と言 来 事 親子で肩を寄せ合って只々涙。生きて会える 去。 で 1 す。 がささったまま 続けて 母 傷で歩くことも不自 は 兄は 死 元ぬまで 11 義 を過ごすことが嬉しかったです。 た事を忘れることができません 姉  $\mathcal{O}$ ア 後 を 義 メリ 追 姉 言葉もなく、ただ手 由 は う クカが ょ う な状 家  $\mathcal{O}$ 僧 態で、 下 敷 がで即死 ア 母 日 は顔

い。あったのでしょうか。私は聞きたい。声を大にして聞きためったのでしょうか。私は聞きたい。声を大にして聞きた戦争をして勝てると思っていたのでしょうか。勝つ自信が軍人、政治家の人達は何の物資もない日本がアメリカと

戦争のできる国にしないでください。愛い我が子をとられ、恋人をも奪われるのです。戦争をすれば尊敬する父を失い、愛する夫を死なせ、可

切に、自分の持ち時間を他人や社会のために、微力ながら生きることの許される日まで、与えられた一日一日を大生きるということをもっと真剣に考えてほしい。

平和の鐘を鳴らし続けて平和の祈りをいつまでもと

頑張るつもりです。

赤き花眞っ盛りなり広島忌

えで、ご本人の許可を得て掲載しました。 界にとどけよう」(平成二〇年)の一部を修正したう※この文章は、武蔵野けやき会編「武蔵野から平和を世



被爆 50 周年記念事業碑母子像(長崎市内)

# 武蔵野市青少年平和交流派遣団の概要

年平和交流派遣団」を、長崎市へ派遣しました。め、武蔵野市在住・在学の中高生12名による「武蔵野市青少平和の尊さを、次世代を担う子供たちに肌で感じてもらうた平を迎えました。これを記念して、改めて、戦争の悲惨さと 武蔵野市では、昭和57年に非核都市宣言を行い、今年30周

につい てい 学 生 年と 学を行いました。 マにした学習会や意見交換会に参加し、 5 で 和 集まった約35名の小・ 祈念式典への参加を行いました。 は スフォーラム (青少年ピースフォーラムとは、 8 月8日から8月10日の派遣期間中は、長崎市の青少年ピ が 長 ま す。 平和学習を進行し 崎 툱 て学び、 崎 の青少年とが一 市 に参加し、 青 少年ピー 交 流 を深 中・高・大学生たちと、 被爆者の体験講 緒に たり、 スボランティ める事 被 また、 被 業で 爆の実相や 爆 す。 併せて被爆遺構の見 建 全 国 34 話を聞い ア 造 物 の 同 全 国 等 平 高 フ 平和をテー の自治体か を 和 校 オ た 案 の 生 I の וֹכוּ 内 ゃ 尊 青 ラ 平 少 大  $\Delta$ さ

な平和学習を行いました。 同派遣団は、3回の事前学習や事後の報告会も含め、様々

家族や友人に伝え活かしていく予定です。
今後、各団員たちは平和について学んだことを、それぞれ



長崎市長表敬訪問

# 青少年平和交流派遣団に参加して

# 東京学芸大学附属小金井中学校 一年

**塩澤 理紗** りょぎわ りょ

... まず興味を持ったのは、『平和とは何か』という事でし 私は今回、平和交流派遣団に参加させて頂きましたが、 ~

て平和. 争が続いているという事を思い出し う事かを考えていた時、 亡するという事件があり、 シリアで日本人ジャーナリストが戦争に巻き込まれて死 にするにはどうすればいいのかを考えさせられました。 ピー について考えました。 スフォ I ラムで は ふいにシリアなどでは今でも戦 他 改めて戦争のない平和な世 7 の都道府県の人達と交流 平和でない ました。最近でも、 時 はどうい 界 U

ますが、いつからやっているのかという事が知りたくなこの式典は毎年当たり前のようにNHKで放送されてい次に関心を持ったのは、長崎平和式典についてです。

9日の式典が終わった後、原爆資料館に行き年表をた

りまし

終戦 くも らしいことなのだと思いました。 うに願い続け、 亡くなった人々の事を思い、二度と戦争が起こらな ったのもそれから約5年後だということがわかりました。 どってい 平和な世界に少しずつ近づいていく為に 10 してからまだ完全に復興してい 年以内に行っていて、 ると、 平和式典と同じようなものを終戦 今でもその式典が残っているとい 正式に『平和式典』と決ま ない 意味 頃 から、 のある から早 戦 う事 争で いよ は

引き継 っと広い ればならないと感じました。 強く願っているという事が分かりました。 とても恐ろしいことで、それを経験した人々は ビの他に祖父母の話しかありませんでした。 L١ は私達若い世代がその方たちの経験したことを次世代に 経験した方はもうお年寄りの方ば 回長崎に行ってみて、 1 ます。 秒でも早く戦争の無い平和な世の中になってほ 長崎に行く前は、 いで行くにはどうしたら良 分野で今回経験したことを伝えていきたい 戦争の事を知る手掛かりは本やテレ 戦争は二度と起こってほ 今は まだ中学生ですが、 61 かりなので、 かを考えてい 実際 しかし、 これ 1日 に戦 しく か 1 なけ か 争 な しし 5 を 分 今 L١

# 青少年平和交流派遣団に参加して

## 吉祥女子中学校 二年

高林 彩香 たかばやし さや か

h

平和はいかに大切かについてです。原子爆弾(核兵器)がいかに恐ろしい被害を及ぼしたか、るにあたり、私は多くのことを学びました。その内容は、このたびの武蔵野市青少年平和交流派遣団で派遣され

うお亡くなりになっていることでしょう。私たちはそのうお亡くなりになっていることでしょう。私たちはそのて感じたからこそ、わかるものだったと思います。て感じたからこそ、わかるものだったと思います。いてさらに深く考えることができました。二度とあのような惨劇を起こしてはならないと、強く思います。とを最大限に生かし、戦争や原子爆弾の非正当性についとを最大限に生かし、戦争や原子爆弾の非正当性についとを最大限に生かし、戦争や原子爆弾の非正当性についたを最大限に生かし、戦争や原子爆弾の非正当性についたを最大限に生かし、戦争や原子爆弾の非正当性についたを最大限に生かし、戦争や原子爆弾の非正当性についるさどができました。三度とあのような惨劇を起こしてはならないと、強く思います。

ればこの惨劇の存在が忘れ去られてしまうかもしれませ方々に代わって声を上げてゆく必要があります。でなけ

も役立てていきたいです。に、ここで学んだ数々のことをこれからの自分の人生に、して、今回の派遣団に参加したことを決して忘れず



# 青少年平和交流派遣団に参加して

### 吉祥女子中学校 三年

八木 詩織

京より平和 活躍していることに感心しました。 体験していない学生にまで高く、式典の多くの場面 を小、中、 なりました。 に 参列できたことは、 年8月9日にテレビで放映されている平和 への関心が、 高校生が担当していることに驚きまし まず、式典の司会、 私にとって大変意義のあるもの 街全体として高く、特に戦争を 献水や献水の水の採 祈念式典 た。 水 に 東

学生の子どもたちが、年老いた被爆者が語る被爆 うことが伝わってきました。 世 の大切さを心に刻んでいます。 耳を傾け、 何が起きたかを考え、 た、長崎市議会議長の式辞に「長崎では小学生や に とあるので、街をあげての平和教育が盛 向けた核兵器廃 平和について学び、 絶 平和であることの大切さをい 運 私たちもまた 動 核兵器の恐ろしさと平 高校生は平和大使と に 若い 力を注い 67 年 んだと 前 でい 体験 の 日 ま て · 和 中

までも心に持ち続けなくてはいけないと思います。

も感じました。聞くことができた私たちが、次の世代に語り継ぐ大切さされた方々は、亡くなられてしまうので、直接、お話を方がいますが、私たちが大人になる頃には、戦争体験をピースフォーラムでは、被爆体験を話してくださった

世界に届けていくことが大切だと思いました。 北朝鮮、イランの核兵器開発の 高 めているので、 世界には未だに1万9千発もの核兵器が 核兵器の ない世界を望む私 動きが国際関 存在 たち 係 U の の 緊 て 張 お を 1)

市民から寄せられた

戦中・戦後の武蔵野の資料

大日本飛行協會發行

至寶「隼」部隊長

定價 5枚1租 5 0 錢

隊長

東部軍管区情報解説要覧図(提供 岩崎兼男氏)



表

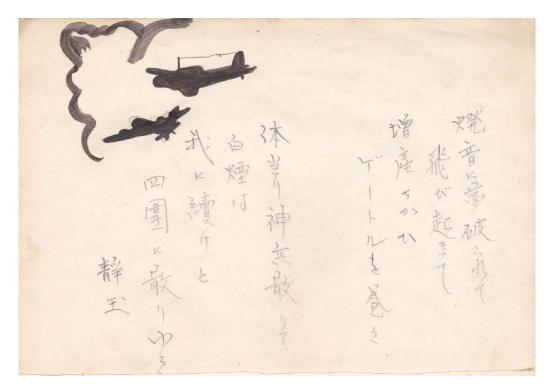


裏

支那事変従軍記章之証(提供 渡邉とし子氏)



寄せ書きの一部(提供(田島久江氏)中島飛行機武蔵製作所に学徒動員された仲間からの



昭 ( 提 和 供 57 S 奥 58 野坂 郎氏り壊 り壊 し 前 の 中 島 飛行機武 蔵製 作 所の 煙

突



(提供 奥野聡一郎氏) 4 階建ての建物は、現在の都立武蔵野北高

校





〜 中 提島 供飛 行 平 機 野 武 義 蔵 昭 製 氏 作 シ 所 の 査 閲 式

△ 製 ¬

提造隼

供さいれに

岩崎兼男氏)にエンジンが積まれていたには、中島飛行機武蔵製作

たかの所

で

映

画

封

切

IJ

の

際

の

記

念

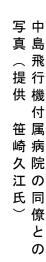
絵

葉

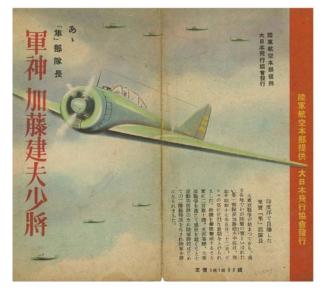
書

の

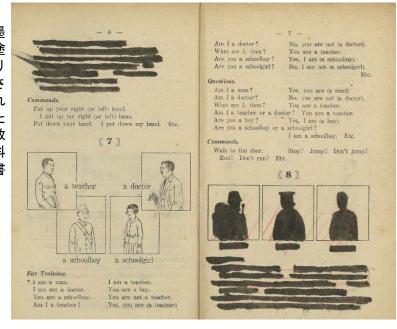
袋







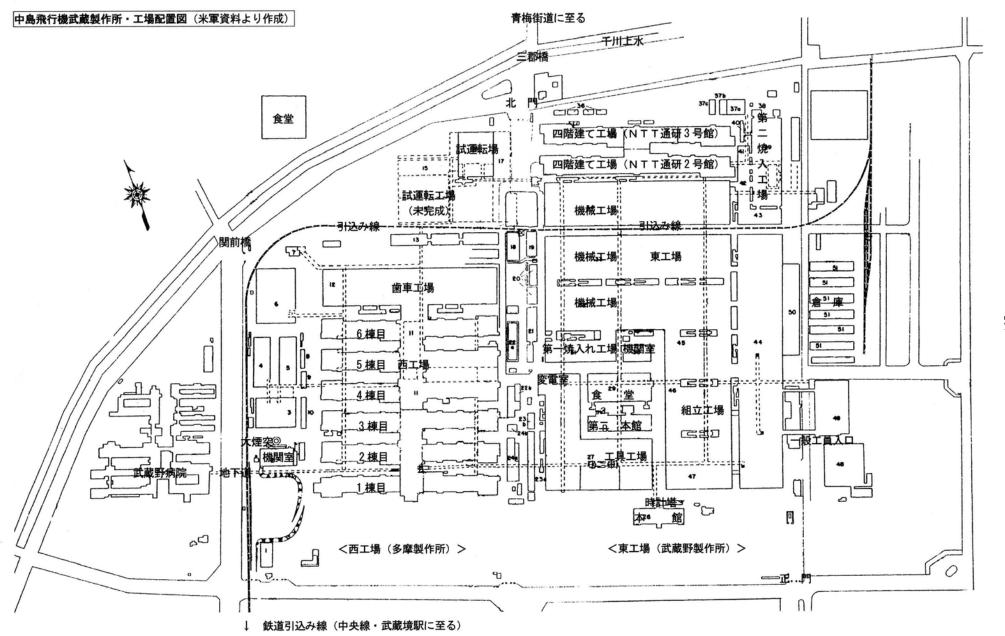
墨 提 塗 供り さ 横れ 山た 義 教 雄科 氏書



# 四 年表·工場配置図

### 戦争関連年表

| 西暦 元 号   おもな出来事   武蔵野町の出来事   1931   昭和 6   9/18   柳条湖事件から「満州事変」   前年に横河電機が転入   1932   昭和 7   「満州国」建国 リットン調査団   5.15 事件 犬養首相暗殺   7   7   7   7   7   7   7   7   7   |
|---|
| 1932   昭和7  |
| 1933       昭和8       2月 小林多喜二虐殺 8月 関東軍特殊演習 (翌年吉祥寺まで延長)         1934       昭和9       東北で冷害 昭和恐慌         1935       昭和10       天皇機関説事件         1936       昭和11       2.26事件 11月 独防共協定         1937       昭和12       7/7 盧溝橋事件から日中全面戦争へ         1938       昭和13       国家総動員法、成立(戦時体制の強化) 中島飛行機武蔵野製作所、開設 中島航空金属田無製造所、開設 独ソ不可侵条約 ドイツがポーランド侵攻(第二次大戦開始)         1940       昭和15       日独伊三国軍事同盟  |
| 1933   昭和8   2月 小林多喜二虐殺   帝都電鉄、渋谷一井の頭公園間が開始   8月 関東軍特殊演習 (翌年吉祥寺まで延長)   1934   昭和9   東北で冷害   昭和恐慌   1935   昭和10   天皇機関説事件   11月   独防共協定   1937   昭和12   7/7 盧溝橋事件から日中全面戦争へ   1938   昭和13   国家総動員法、成立(戦時体制の強化)   中島飛行機武蔵野製作所、開設   中島航空金属田無製造所、開設   独ソ不可侵条約   ドイツがポーランド侵攻(第二次大戦開始)   1940   昭和15   日独伊三国軍事同盟   日本の表記   日本の表記 |
| 1934       昭和9       東北で冷害       昭和恐慌         1935       昭和10       天皇機関説事件         1936       昭和11       2.26事件         11月       独防共協定         1937       昭和12       7/7 盧溝橋事件から日中全面戦争へ         1938       昭和13       国家総動員法、成立(戦時体制の強化)       中島飛行機武蔵野製作所、開設         1939       昭和14       5月ノモンハン事件       国民徴用令       中島航空金属田無製造所、開設         1940       昭和15       日独伊三国軍事同盟  |
| 1934       昭和9       東北で冷害       昭和恐慌         1935       昭和10       天皇機関説事件         1936       昭和11       2.26事件         11月       独防共協定         1937       昭和12       7/7 盧溝橋事件から日中全面戦争へ         1938       昭和13       国家総動員法、成立(戦時体制の強化)       中島飛行機武蔵野製作所、開設         1939       昭和14       5月ノモンハン事件       国民徴用令       中島航空金属田無製造所、開設         1940       昭和15       日独伊三国軍事同盟  |
| 1935     昭和 10     天皇機関説事件       1936     昭和 11     2. 26 事件       11月     独防共協定       1937     昭和 12     7/7 盧溝橋事件から日中全面戦争へ       1938     昭和 13     国家総動員法、成立(戦時体制の強化)     中島飛行機武蔵野製作所、開設       1939     昭和 14     5月ノモンハン事件     国民徴用令     中島航空金属田無製造所、開設       独ソ不可侵条約     ドイツがポーランド侵攻(第二次大戦開始)       1940     昭和 15     日独伊三国軍事同盟   |
| 1936     昭和 11     2.26事件<br>11月 独防共協定       1937     昭和 12     7/7 盧溝橋事件から日中全面戦争へ       1938     昭和 13     国家総動員法、成立(戦時体制の強化)     中島飛行機武蔵野製作所、開設       1939     昭和 14     5月ノモンハン事件     国民徴用令     中島航空金属田無製造所、開設       独ソ不可侵条約<br>ドイツがポーランド侵攻(第二次大戦開始)     ドイツがポーランド侵攻(第二次大戦開始)       1940     昭和 15     日独伊三国軍事同盟   |
| 11月 独防共協定       1937 昭和 12 7/7 盧溝橋事件から日中全面戦争へ       1938 昭和 13 国家総動員法、成立(戦時体制の強化) 中島飛行機武蔵野製作所、開設       1939 昭和 14 5月ノモンハン事件 国民徴用令 独ソ不可侵条約 ドイツがポーランド侵攻(第二次大戦開始)       1940 昭和 15 日独伊三国軍事同盟   |
| 1937     昭和 12     7/7 盧溝橋事件から日中全面戦争へ       1938     昭和 13     国家総動員法、成立(戦時体制の強化)     中島飛行機武蔵野製作所、開設       1939     昭和 14     5月ノモンハン事件     国民徴用令     中島航空金属田無製造所、開設       独ソ不可侵条約     ドイツがポーランド侵攻(第二次大戦開始)       1940     昭和 15     日独伊三国軍事同盟  |
| 1938       昭和 13       国家総動員法、成立(戦時体制の強化)       中島飛行機武蔵野製作所、開設         1939       昭和 14       5月ノモンハン事件       国民徴用令       中島航空金属田無製造所、開設         独ソ不可侵条約<br>ドイツがポーランド侵攻(第二次大戦開始)       ドイツがポーランド侵攻(第二次大戦開始)         1940       昭和 15       日独伊三国軍事同盟  |
| 1939     昭和 14     5月ノモンハン事件     国民徴用令     中島航空金属田無製造所、開設       独ソ不可侵条約     ドイツがポーランド侵攻(第二次大戦開始)       1940     昭和 15     日独伊三国軍事同盟   |
| 独ソ不可侵条約       ドイツがポーランド侵攻(第二次大戦開始)       1940 昭和 15 日独伊三国軍事同盟   |
| ドイツがポーランド侵攻 (第二次大戦開始)       1940 昭和 15 日独伊三国軍事同盟  |
| 1940 昭和 15 日独伊三国軍事同盟  |
|   |
|   |
| 皇紀 2600 年式典   |
| 1941     昭和 16     12月 アジア太平洋戦争、開戦     中島飛行機多摩製作所、開設  |
| 1942 昭和 17 4月 ドゥーリットル空襲 (日本初空襲)   |
| 6月 ミッドウェー海戦   |
| 1943 昭和 18 2月 ガダルカナル島撤退 山本五十六戦死   |
| 10月 学徒出陣 東京都制施行 10月 中島武蔵野と多摩が合併   |
| 1944 昭和 19 4月 学徒勤労動員の通年動員が始まる   |
| マリアナ沖海戦敗北 6月 米軍サイパン島上陸<br>8月 学童集団疎開、始まる 11/24 中島飛行機武蔵製作所、初空襲  |
| 11/24 マリアナ諸島から B29 初空襲   その後、12/3、12/27 にも空襲  |
| 1945 昭和 20 2月 硫黄島上陸 3/10 東京大空襲 中島飛行機への空襲、続く   |
| 1943  |
| 6月 沖縄戦終結 7月 ポツダム宣言 2/17 艦載機による空襲  |
| 8月6/9 広島、長崎原爆 4/2 夜間空襲  |
| 8月9日ソ連対日参戦 15日 終戦の詔勅 4/7、12 1トン爆弾の空襲  |
| GHQ による占領 五大改革指令 8/8 1トン爆弾の空襲   |
| 米国戦略爆撃調査団、来所  |
| 1946 昭和 21 天皇の人間宣言  |
| 戦後初の衆議院選挙 公職追放  |
| 11/3 日本国憲法、公布   |
| 1947 昭和 22 2/1 ゼネストの中止 トルーマンドクトリン 11/3 市制施行 人口 6 万 3 千人   |
| 5/3 日本国憲法発布、教育基本法制定   |
| 1948 昭和 23 南北朝鮮分断 市営運動場、開設  |
| 1949 昭和 24 中華人民共和国、建国   |
| 下山事件、三鷹事件、松川事件  |
| 1950     昭和 25     警察予備隊、発足     電気通信省「電気通研究所」開所   |
| 1951         昭和 26         サンフランシスコ講和条約、締結         東京スタジアム・グリーパーク野球場  |
| 1952 昭和 27 サンフランシスコ講和条約、発効  |
| 日米安全保障条約、発効   |



中島飛行機武蔵製作所 工場配置図 『米国戦略爆撃調査団報告書』(国立国会図書館憲政資料室所蔵)より

2

117207 O - 47 (Face p. 118) No. 1

## 五 実行委員編集後記

### 小餅 友子

争をしては と改めて思い直 玉 の も幸せがきますようにと願わずにはいられません。 放棄 法 そしてそのすべてに共通して「二度とこの 地 での体 様々な意味で戦争を体験し 戦力の不保持・交戦権の否認をうたった「日本 が日本にあることが、 ならない」 験、 します。 銃 後 との思いが詰 の生活、 そして世界のどこの子供 どれだけありがたい また戦 た方々の貴重 まっていま 後 のさらなる苦労 ず。 な記 ような戦 たちに 事 戦 録 ゕ 争 で

### 十田 守彦

戦場 ぞ今日まで生きて来て下さったと思わずには いさせてい 関 酷 時 て を改めて噛み締め な体 体 今回、 は 係 なら 体 が 験 の記 験 高 験 な 談 戦 の まっ もあり、 ただきました。 争 録が集まったのでは 記録は少なくなりましたが、 て 体 験記録 ح 1 ما 11 る今だからこそ、 いう思い う い 体 験 集第 ます。 の 戦 ない世代として、 を新たにした次第です。 後 67 集の編集を少しだけ ない 近隣アジア諸国 年が経過し、生々 戦争だけ かと思いま 多くの貴 平 和 おれ は との す。 絶 お手伝 妏 な 重 の 緊 よく 一な戦 大切 Ù 平 許 11 張 和 過 しし

> ばと思い することを強く希望します。 日」となりまし と友好 けとして戦争の悲惨さと平 の 懸け ま す。 橋 た。 昨年 を 築 これからも、 しし から ていくことに少し 11 和の大切さを心に刻 月24日が「 この日を一つの 武蔵野市 でも 貢 む 献 うきっか 平 で 和 き の

### 柴田 フミノ

か。 正しく教えてほしいと思い 驚きました。 するパネル展を開い 占めるとのこと。平和で豊かな日々です。 メリカと戦争をしてい 戦後 学校教育では、日本がやられたこと、 67年を経て戦争を知らない 学校では、 たとき、 たんですか?」 歴史を教えてい ます。 大学生の「 人が全人口 ح 過 去 ない の 以前 やったことを 問 の のでしょう L١ の ビ 日 戦 八 本 争 割 ただ は に 強 関

義勇軍 2 Ų て らませ 秋 昭 和 12 田 ケ月余の L١ 時代は戦争一色に塗りつぶされました。 まし 福島 ながら として大陸 年7月に盧溝橋事件が起き、 た。 訓 の各県から10 練 満 の の 州 の ち、 開 拓及び国 大 陸 東京駅から夢や希望に胸を 代 の農家の少 へと日の \_ 境 の警備役も担 丸 日支事変へと突入 年たちが、 の 小 旗 Щ に送られ わ ð 玉 しれ、 ふく 策 新潟

日本の敗戦で満州国は崩壊し、ソ連軍が侵攻してきた

がし 全滅 うち幾人が、 との思い ょ 前 の う。 です。 ま したかもし です。 少年たちは す。 で、 し は ま 故 大 陸 しく出 れないと思うと胸がしめつけられる思い 郷の土を踏むことができたのでしょう。 へと向・ ただただお国の 死ぬほどの苦し 発した少年たち(終戦 かっ たのです。 ため、 み を味 あ わったこと 天皇陛下のため の の少年たちの 時 は で 20 L 歳

すし、 は 沖縄 11 た。 事優先の制 命、 私 310 日支事 自身の戦争体 遠 い 中国で戦死した人や日本国 夢 万を超すと聞い も希望 日の 変から太平洋 圧下におかれ エもあっ 出 来事 験 がは、 ており Ō た大切な命を失い · 戦 争 昨 ました日々を過ごしており ようにも思えます。 Ė う ます。 の出来事のようにも へと広がり、 土への空襲で失った命 ました。 将来の 徹底 思えま 南方、 ある若 U まし た軍

うに。 どうぞ戦争のない平和な世界がいつまでも続きますよ 争体験記 戦争には正義はございません。 録 集第 集が出 来ますことを、 心 より 喜 h

### 菊地 **圭永子**

おります。

ありがとうございました。

無量です。 今 年 度、 戦 争 体 験 記 録 集を発行することができ

> 取りに取 体 験 者 の 組 高 龄 化に伴 ίį 実行 <u>:</u>委員 公会では 精 力 的

ij

h

でおりま

つ 残し、 の悲惨 さを感じずにはいられませんでした。 起こしては た私の役目であると思いました。 体 . 験 次世代に伝え繋げること、 者の な時代を生き抜いた逞しさ、 方 11 々のお話からは、 け ない という願い それがバ 貫し を、 実体験からくる つ て 「 戦 それを記録とし ま た トンを受け 争は 戦 中 力強 戦 度 て 後

はどれほどいるでしょうか? 争が起きて、 る親がいても、 被害者にもするが加害者にもする」ということです。 お話 を伺っていて気が付 自分の子どもが被害者になることを想 加害者にもなりうることを想像できる いたことは、 戦争は、 像 人 戦 す を

となるのではないでしょうか? 日々の暮らしの中で自分自身の足元や心持ちをしっ と見据え、 武 力や暴力、 他者と手を携えることが「平 排除や反発で諍い を解 決する 和 への の では 第一 かり なく、 歩

平 の しし ·和発信 さて、 でしょうか?私自 と思い 平 和 実体験のない私がどれだけ の ます。 という括りでは語れ 難 し さ を 痛感し 身の 宿題です。 うつつ、 な 宿題 L١ \_ 伝えることがで 現 に 状 戦争が起きてい 取 の ij 社会の中 組 んでい きる な

### 平成 24 年度 武蔵野市非核都市宣言平和事業実行委員会 委員

| 団 体 名             | 氏 名     |
|-------------------|---------|
| 武蔵野市コミュニティ研究連絡会   | 小 餅 友 子 |
| 武蔵野市立小中学校PTA連絡協議会 | 今 井 尚 子 |
| 武蔵野市老人クラブ連合会      | 高橋進午    |
| 成蹊大学 学生           | 渡邊美月    |
| 成蹊大学 学生           | 佐藤文子    |
| 武蔵野の空襲と戦争遺跡を記録する会 | 牛 田 守 彦 |
| 世界連邦運動協会 武蔵野支部    | 中 里 崇 亮 |
| 武蔵野けやき会           | 柴 田 フミノ |
| 武蔵野市国際交流協会        | 藤谷純子    |
| 公募委員              | 稲 葉 和 高 |
| 公募委員              | 菊 地 圭永子 |
| 公募委員              | 中島秀文    |
| 公募委員              | 松 村 勝 人 |
| 公募委員              | 山 本 輝 子 |

# 武蔵野市非核都市宣言

である。
ることは、全人類が切実に念願するところることは、全人類が切実に念願するところ戦争の惨禍を防止し、恒久平和を実現す

急かつ重大な課題である。 爆の恐れのない世界を確立することは、緊いる今日、とりわけ核戦争を回避し、原水いる今日、とりわけ核戦争を回避し、原水

限の努力を傾注するものである。

関する宣言都市として、人間が人間を滅ぼ関する宣言都市として、人間が人間を滅ぼ関する宣言都市として、人間が人間を滅ぼ

非核都市となることを宣言する。する決意を表明するとともに、武蔵野市がここに、われわれは、平和のために貢献

昭和五十七年三月二十九日

# 世界連邦に関する宣言

る。 確信 意 遠 うと共に、 政に反映せしめ、 市と相携えて、 を希求する。人類最初 と友愛に基づく世 により世界連邦 して提唱し得る最 し、 の繁栄を保障する世界連邦 武蔵野市は、 また戦争放棄を憲法 し、この宣言を行な 武力国 進んで現行 家の対立 世論を喚起 世界の恒久平和と人類永 (n) 一界の新 実現を期するもの 速やかに国家宣言を行 適の立場にあることを 0) 0) を解消 , 国連憲章の改正 に明記した国と 原爆被災国とし L し、 11 秩序 他 0) L これ 建設 て、 の宣言都 0) を国 実現 であ 英知 同

右宣言する。

昭和三十五年六月二十八日